第６章　特論

第１節　満濃池の植生 - 植生の変遷と今後の課題 -

香川大学名誉教授
増田　拓朗

１．植生の変遷

（１）江戸～明治

江戸時代に描かれた絵図[1、2]を見ると、満濃池周辺の植生はほぼマツ林(アカマツ林)であったことがうかがわれる【資料 17、19】。なお、日本のマツとしてはクロマツとアカマツが代表的であるが、クロマツは海岸部に多く分布し、内陸部・山間部にはアカマツが多く分布する。満濃池周辺のマツもほぼアカマツである。

また、絵図には、マツに混じって広葉樹と見なされる樹木が描かれているが、その樹姿および葉の描き方と当地の植生を考慮すると、サクラ、モミジあるいはハゼノキ等の落葉広葉樹と推測される。江戸時代以前の植生について記した資料は見当たらないが、おそらく、薪炭林およびマツタケなどの林産物採取の場所として、アカマツ林が維持されていたものと推測される。

明治になって満濃池の改修が行われるが、『讃岐国名勝図会』巻之十一(日本名所風俗図会 14 四国の巻[3])には、明治３年(1870)に岩を穿って竇(ゆる)水道を貫通させたとの記述の後に、「堤根は旧のごとく六十余間堤を築き重ね、桜・楓・桐島・さつき等を植ゑ置きて、池もとのごとく造営成就なりせしは・・・」として、修復された堰堤にサクラ、カエデ、ツツジ等を植えたことを記し、さらに、「ここにおいて遠近の諸人、池遊覧せんとて、日ごとに弁当・割籠を携え、ここに至る者の絶え間なかりしかば、堤の上に桟敷机木を設けて遊客を憩ひしめ、酒肴菓を商う者もあり。四時村民の潤いとなせるは、これも万民を救いたまふ一助なるべし」との記述がある。

明治 40 年(1907)に発行された『讃岐名勝栞』[4]には、満濃池八景を詠んだ歌８首が記載されているが、そのうち３首に樹木(サクラ、ツツジ、マツ)が詠まれている。

池塘桜	池塘に咲てかをれる花の中に華は櫻の外なかりけり	従三位	梅渓通治
神野山躑躅	金幸神野の山に咲初めて朝日に匂ふ二躑躅の花	従七位	松岡　調
矢原老松	玉きはる幾代經にけん老松の尚行末もたのもしき哉	正七位	森　寛斎

江戸時代から花の名所として人々に親しまれていたかどうかは断定できないが、少なくとも明治期には、堰堤に花木が植栽され、春の桜、初夏のツツジ、秋の紅葉、そしてマツの緑を楽しむ行楽客で賑わい、村民が潤ったことがわかる。堰堤だけでなく、池を囲む山にもアカマツに混じってヤマザクラ、ヤマツツジ、およびハゼノキなどの花木、紅葉する樹木が自生していたであろ

資料17　象頭山八景 満濃池遊鶴［弘化２年（1845）］（まんのう町所蔵）

資料19　讃岐国名勝図会 満濃池 池宮［嘉永７年（1854）］（国立公文書館所蔵）

うことが推測される。なお、上記２首目の「二躑躅」は「丹躑躅」の誤字と思われる。ヤマツツジか、オンツツジか、あるいはキリシマツツジか、濃い赤色のツツジを詠んだものと思われる。

（２）昭和後半（1980 年代前半）まで

明治時代までのアカマツ林を主とする植生が、昭和の後半(当地に高度経済成長の影響が及ぶ 1980 年代初頭)まで続いていたことが、植生調査結果などから推測される。

1982 年に刊行された『第２回自然環境保全基礎調査(植生調査)』[5)]によると、満濃池の周囲はほぼ 100%アカマツ群落とされている【第 16 図】。小面積のヒノキ林、スギ林が描かれていないなどやや精度に問題があるが、満濃池周辺がほぼアカマツ林であったことは間違いないと言える。

1980 年代に入ると、満濃池北岸の中部～東部に「国営公園」の計画が持ち上がり、環境調査が行われた。これらの調査(植生調査)結果[6、7)]は精度が高く、小面積の群落も記載されており、現在も残る北岸東部の半島ヒノキ林も記載されている。

これらの調査結果によると、満濃池北岸の水際から尾根筋まで、堰堤から見える範囲はほぼアカマツ林であり、このアカマツ林内には、ヤマザクラ、ヤマツツジ、オンツツジ、コバノミツバツツジ、ヤマウルシ、ヤマハゼなどが出現しており、江戸期の絵図や明治期の文献、歌に詠まれた植生景観が 1980 年代前半まで維持されていたものと考えられる。

（３）1980 年代後半

1980 年代、満濃池北岸中部～東部に国営公園、南岸西部～中部に県立森林公園が計画され、整備された。これにより、里山林、薪炭林として地域の人々によって維持、管理されていたアカマツ林が管理されなくなり、マツクイムシ被害の拡大によるアカマツの減少、広葉樹林への植生遷移が急速に進むことになった。もっとも、公園が計画されなくても、燃料革命、肥料革命の進行によって、地域の人々のアカマツ林離れ、管理放棄が進み、アカマツ林の消滅、植生遷移が進行したと思われるが、公園設置計画によって、この動きに拍車がかかったことは間違いない。

・満濃池の北岸中部～東部の国営公園整備(国営讃岐まんのう公園)

1984 年　事業採択

1985 年　都市計画決定

1987 年　工事着手

1998 年　第１期開園

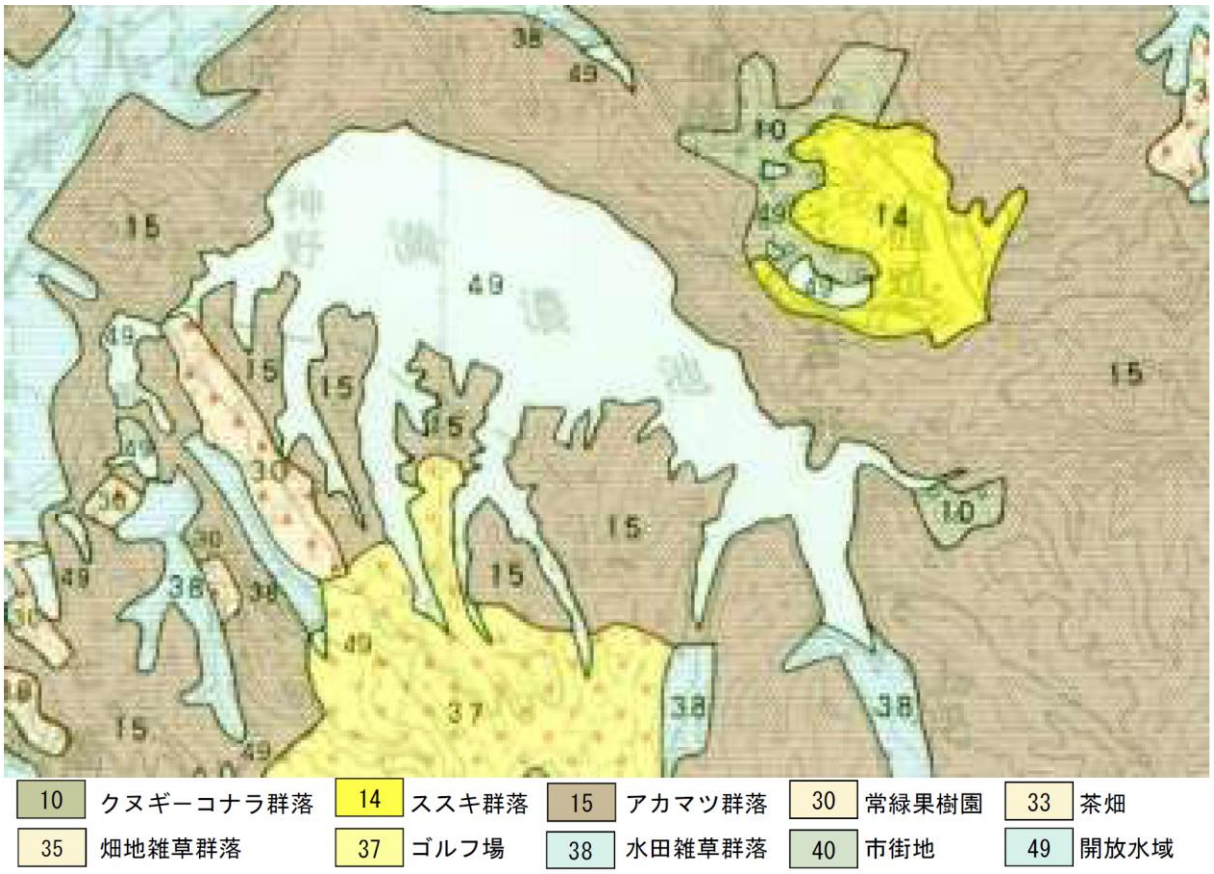
2013 年　全面開園

・満濃池の南岸西部～中部の香川県立森林公園整備(香川県立満濃池森林公園)

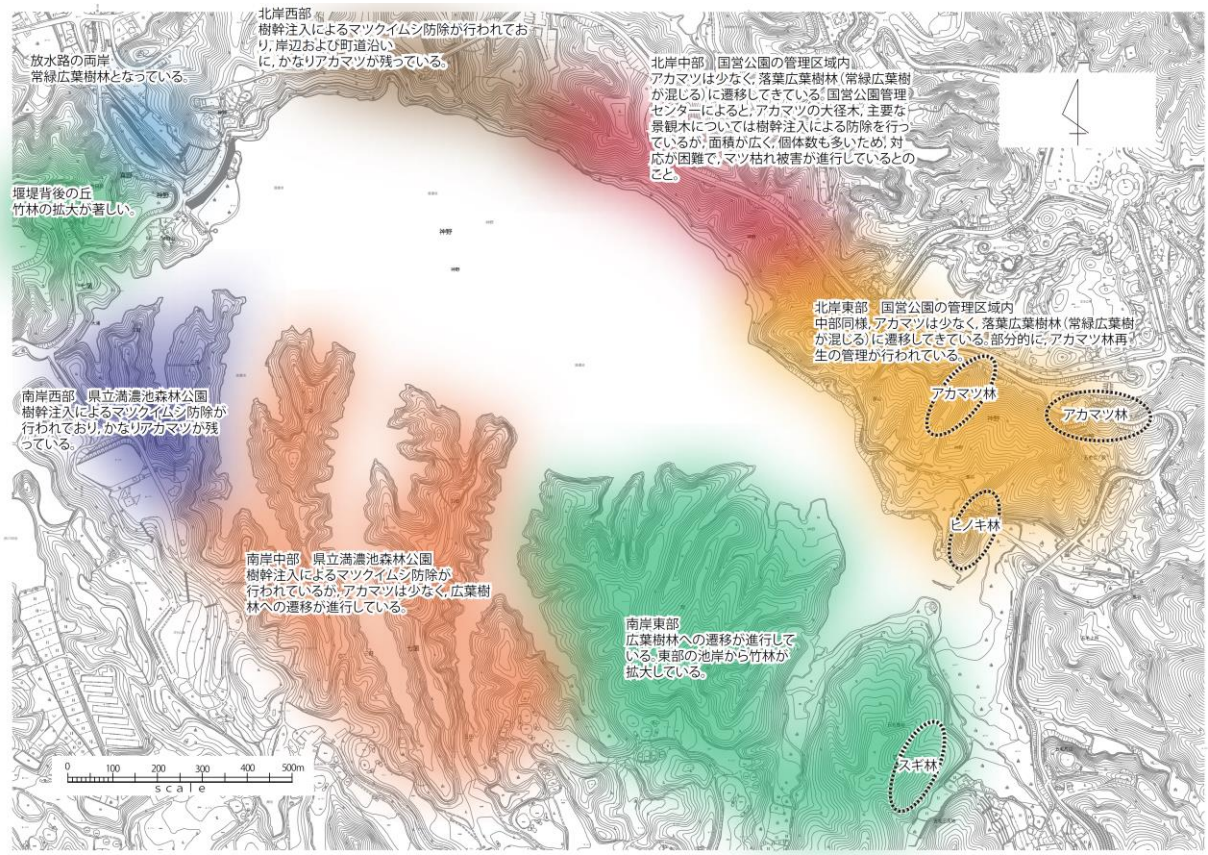
1981 年　計画決定

1982 年　用地買収開始

1984 年　全国植樹祭の会場に決定



第16図　第２回自然環境保全基礎調査（植生調査） 現存植生（1982）



第15図　満濃池周辺の植生の概況（2018）

1986 年　森林学習館、野鳥の森等の整備に着手。

1988 年　全国植樹祭開催（５月）。森林公園として供用開始（６月）。

（４）現在（2017～2018 年）

現在の植生の状況については、第４章第２節に記載のとおりであるが、簡単に整理すると以下のようである【第 15 図】。

○北岸

北岸西部には、アカマツがかなり残っている。とくに池岸および道沿いに多い。道の背後の斜面にもアカマツが点々と残るが、コナラ等の落葉広葉樹、アラカシ、ソヨゴ等の常緑広葉樹が混じり、中～低木層はネズミモチ、ヒサカキ等が繁茂する状況で、後継樹の成長は期待できない。

北岸中部～東部は、西部に比べてアカマツが少ない。林床の刈り取り等、アカマツ林保存・再生の取り組みが行われている所ではアカマツが残っているが、それ以外の所はコナラ、アベマキ等を主とする落葉広葉樹林、あるいは、アラカシ、ソヨゴ、クスノキ等の常緑広葉樹林に遷移している。

○南岸

南岸西部、取水塔南の岬にはアカマツがかなり残っている。

南岸中部、池に突き出た岬の池岸および遊歩道沿いにはアカマツが残っているが、面的にはコナラを主とする落葉広葉樹林に遷移してきている所が多く、アラカシやクスノキ等の常緑広葉樹も入ってきている。

南岸東部はアカマツが少なく、大半が落葉広葉樹林に遷移してきている。かつて耕作地であった池の岸辺から竹林が拡大しており、管理放棄されたスギ林に竹が侵入している。

○堤体背後、放水路両岸

放水路の両岸は、アラカシを主とする常緑広葉樹林である。

放水路南の丘は中腹から上部に竹林となっている。

２．今後の植生管理の課題

満濃池の岸は樹林で覆われており、現状で特に大きな問題はないが、今後に向けては、いくつか検討を要する課題がある。

（１）アカマツおよびアカマツ林の扱い

30～40 年前までは、池の周囲はほぼ全域がアカマツで覆われていたが、アカマツは急速に姿を消しつつある。現在、岸辺や道沿いにアカマツが残っている所もあるが【写真 68】、広葉樹にと

写真 68　北岸西部
岸辺にアカマツが残る。

写真 69　北岸中部
アカマツが枯死し、広葉樹が茂る。

写真 70　北岸中部
道沿いにアカマツが残るが、広葉樹林化が進行。

写真 71　北岸東部
斜面中腹。わずかにアカマツが残るが、広葉樹林化が進行。

写真 72　北岸東部
国営公園内、アカマツの森。

写真 73　写真 62（左）の林内
マツクイムシ防除(樹幹注入)、下草刈りなど、アカマツの育成管理が行われている。

って代わられている所も多い【写真 69～71】。生存しているアカマツはマツクイムシ防除措置(薬剤の樹幹注入)がとられている個体であり、また、アカマツ林として維持されているところは、下草刈りなどの林床管理が行われている所である【写真 72、73】。林床管理がなされず、中～低木層にヒサカキ、ネズミモチなどが繁茂する状況では後継樹の生育は期待できない。

水面に枝を広げるアカマツ【写真 68】、あるいはアカマツ林【写真 72、73】が欲しいのであれば、それなりに保護管理が必要であるが、全域を対象にすることは労力的にも経費的にも不可能であろう。保護すべき個体、および保護・再生すべきアカマツ林を選定し、保護管理していくことが望まれる。

一方、既に植生遷移が進行し、広葉樹林として成立している所、例えば、【写真 74】のような所は常緑広葉樹林(ツバキの森)として保護管理していけばよいと思われる。保護管理作業にもあまり手間はかからないと考えられる。

（２）花木類の扱い

『讃岐国名勝図会』に記載されているように、満濃池は、かつては春のサクラ、初夏のモミジ、秋の紅葉、そしてマツの緑を楽しむ行楽客で賑わったことが知られているが、1980 年代以降のマツクイムシ被害の蔓延によるアカマツ林の衰退と広葉樹林への植生遷移によって花木類の生育環境も大きく変わってきた。とくにアラカシ、クスノキ、ソヨゴ等の常緑広葉樹が優占する常緑広葉樹林では、サクラは被圧され、生育不良を呈している。

南岸中部の岬(香川県満濃池森林公園区域)の一つが、「桜の森」と命名され、遊歩道沿いに桜の苗木が植栽されているが、周囲の広葉樹の高木に被圧されて、生育不良を呈している植栽木が多い【写真 75】。サクラの健全な生育を期待するのであれば、その木の成長した姿をイメージして、その生育空間(枝が広がる空間)を確保してやること(周囲の樹木の伐採)が必要である。ただ単に植樹すればよいということではない。サクラ並木、サクラの森づくりをするのであれば、どこにどのように整備していくのか、十分な検討が望まれる。

また、森林の管理放棄に伴って、林床にはネズミモチやヒサカキ等の常緑広葉樹の中～低木が密生し、ツツジ類が被圧されている。

現在の社会情勢において、かつてのような里山景観の復活を望むことは難しいが、上記(１)のアカマツの項でも書いたように、人為的な管理をしなければ、落葉広葉樹林から常緑広葉樹林へと遷移していくことが予測される。

春のサクラ、初夏のモミジ、秋の紅葉、そしてマツの緑が欲しいということであれば、植生の状況および眺望景観を考慮して、それぞれに応じた保護管理を行っていく必要がある。現在、国営公園内で行われているアカマツ林の再生はその一つのモデルと言える。

（３）ヒノキ林、スギ林の扱い

小面積ではあるが、北岸東部の半島にヒノキ林、南岸東部にスギ林がある。

写真 74　南岸中部、岬の先端部
高木層にクスノキ、中木層にツバキが群生する照葉樹林。

写真 75　南岸中部、岬の遊歩道沿い
落葉広葉樹、常緑広葉樹の混交林。サクラが植栽されているが被圧されている。

写真 76　南岸東部、岸辺の遊歩道沿い
竹林が拡大。

写真 77　南岸東部
アカマツは衰退し、広葉樹林化、スギ林は管理放棄、そこに竹林が拡大。岸の浸食も進んでいる。

写真 78　堤体背後の丘
中腹から上は竹林と化している。
さらなる竹林の拡大が危惧される。

写真 79　北岸東部
岸の浸食が著しい。池東部は、北岸、南岸とも浸食防止が課題。

ヒノキ林は国営公園の管理区域内にあり、第４章に記載されているように、斜面上部の木柵内側(国営公園の散策区域内)は、間伐および下草刈等の管理が行われているが、斜面下部の木柵外側(立入禁止区域)は管理がなされておらず、もやし状のヒノキおよび林床植生が密生する状況である。

国営公園管理センターによると、「園内および林床が透けて見えるのは満濃池の景観上好ましくない」という要望もあって、斜面下部は下草刈りや間伐・除伐を控えているとのことである。自然林であればそれでよいと思われるが、もやし状のヒノキが密生する現状は景観上からも、防災上(土砂崩れ防止上の観点)からも好ましくない。景観を考慮しつつ、段階的に自然林(広葉樹林)に戻していく森林管理が望まれる。

（４）竹林の拡大

部分的に竹林が侵入・拡大している。とくに、南岸東部および堰堤背後の丘における竹林の拡大は問題が大きいように思われる【写真 76～78】。

竹に被圧されると他の樹木は衰弱・枯死し、竹の純林が形成される。竹は根茎が密であるが浅く(深さ 40～50cm 程度)、その下の土層との間に境界面を形成する。平坦地であれば問題は少ないが、斜面が竹林で覆われると、大雨が降った場合にこの境界面で、根茎の層が畳が滑るように斜面を滑り落ち、大きな土砂災害を引き起こす。

放置竹林については各地で問題になっており、その対策も考えられているが、満濃池周辺でもその対策を検討する必要がある。

（５）岸の浸食

満濃池東部の岸が波浪によって浸食されている【写真 79】。現状のまま放置すると高木が池に倒れこむことが頻発する恐れがある。ただし、岸をコンクリートで固めてしまうことは、景観面からも、環境面からも問題が大きい。河川改修においては「自然に適合した工法」[8)]がヨーロッパから導入され、各地で施工されている。それらの事例を参考に護岸整備を検討する必要がある。

（６）背景の検討

堤体および池岸から、中景および遠景として見られる背後の山々も満濃池の景観を構成する要素として重要である。周辺地域の土地利用の変化や地形改変、あるいは植生の変化などについても注意し、必要な対策をとっていくことが望まれる。

参考文献・資料

１）長山孔直画、象頭山八景「満濃池遊鶴」、1845
２）梶原景紹著：讃岐国名勝図会、「満濃池 池宮」、1854
３）松原秀明編：日本名所風俗図会 14 四国の巻、角川書店、1981

４）矢原理平編：讃岐名勝栞、1907
５）第２回自然環境保全基礎調査(植生調査)、環境庁、1982
６）末広喜代一ほか：丘陵公園予定地とその周辺部の植生、昭和 59 年度満濃池動植物現況基礎調査、香川動植物の会、1985
７）末広喜代一ほか：讃岐丘陵公園予定地の植物相と植生、国営讃岐丘陵公園(仮称)地域の動植物現況調査報告書、香川動植物の会、1985
８）バーデンヴュルデンベルク州環境省編(リバーフロント整備センター監訳)、河川工事ハンドブック「自然に適合した工法」、集文社、1997

第２節　近代の満濃池改築と景観

香川大学創造工学部教授
角道　弘文

１．近代における満濃池の改築

（１）はじめに

満濃池の景観を構成する主な要素として、堤体や取水塔をはじめとする潅漑施設それ自体と堤体により形成されている広大な池面があげられるだろう。すなわち、私たちが見ることのできる満濃池の主な景観は、県営満濃池用水改良事業によって 1958(昭和 33)年に竣工した潅漑施設にもとづくものである。

第三次嵩上げ工事と呼ばれるこの事業によって、満濃池の堤高および貯水容量はそれぞれ現在の 32m(標高 149m)、1,540 万 m^3 に拡大され、これによって日本最大のため池と称されるようになった。

ところで、河川法ではダムと堰堤の違いが明確に区分されている。同法第 44 条によると、堤高 15m以上のものがダムであると規定されていることから、堤高 32mの堤体を有する満濃池は河川横断工作物としてはダムと呼ばれるべきものである。しかし、満濃池を単に土木構造物としてのダムとしてのみ評価することは不適切であろう。史料にもとづき確認される限りにおいても平安期にまで遡ることのできる満濃池の由来や脈々と築かれてきた改築の過程は看過されるべきものではないし、また、堤体(dam)の築堤により生み出された貯水池(reservoir)の景観上の特色・独自性は決して過小評価されるべきものでもない。

ここでは、現在の満濃池が形成されるに至った近代以降の改築の経緯について概観する。なお、引用は「満濃池史 - 満濃池土地改良区五十周年記念誌 - 」(満濃池土地改良区、2001)である。

（２）明治期における改築事業

幕末の 1854(嘉永７)年、樋管の継ぎ手からの漏水により堤防の決壊に至った満濃池は、岩盤の掘削によって底樋とするなどの工夫を施し、1870(明治３)年に築堤が完了した。当時の満濃池は、貯水容量 584 万 6,000m^3、堤高十三間(23.66m)であったと記録されている。

その後、明治初期・中期にかけて繰り返し発生した渇水、また、新田開発による水田面積の増加等により、満濃池掛かりでは慢性的な水不足が発生し、各所で水利紛争が起こった。そこで、「満濃池第一次嵩上げ事業」が満濃池普通水利組合を事業主体として行われた。1905(明治 38)年の着工、1906(明治 39)年の完了である。本事業によって、堤防が三尺(0.91m)嵩上げされたこと、貯水容量が 660 万 2,000m^3 に増強されたこと、これにより満水面積が 94.3ha となったことが「満

濃池史要」に記録されている。

この事業によって、従来は堤防の西端にあった余水吐が堤防東端に移設され、あわせて地山に隧道を開削して放水路が設けられている。

ところで、潅漑施設としての機能を発現するには取水施設が必要不可欠である。従来では、取水櫓でユルの開閘操作が行われ樋管からの取水が行われていたところ、1914(大正３)年に取水塔が完成し、その後は取水塔方式による取水が行われるようになり現在に至っている。なお、現在の取水塔は 1955(昭和 30)年に新設されたものである。

（３）昭和初期における改築事業

大正期の度重なる渇水、明治期後半から大正期にかけてのサトウキビ等からの水稲転換、満濃池流域からの土砂流入による貯水容量の減少などにより、嵩上げの要望が高まった。1927(昭和２)年から1930(昭和５)年にかけて、「県営満濃池用排水改良事業」(第二次嵩上げ事業)が実施され、堤防が五尺(1.52m)嵩上げされ、貯水容量が780万m^3に増強されるなどの工事が行われた。この結果、満濃池の満水面積は105.2haとなった。

（４）昭和中期における改築事業

満濃池の現在の外観は、1940(昭和15)年から1958(昭和33)年にかけて実施された「県営土器川沿岸用水改良事業」(後に「県営満濃池用水改良事業」)の嵩上げ工事(第三次嵩上げ工事)によるものである。昭和初期に発生した渇水を契機として貯水容量の増強が要求され、６mの嵩上げによって貯水容量を現在の1,540万m^3に増強するものであった。

また、この事業によって前法石張り3,270m^2が施工され、同時に、付帯の余水吐も工事が行われた。先述の取水塔も同事業により新設され、現在の満濃池を支える構造物一式がこの時期に完成したことになる。

（５）満濃池諸元の変遷

満濃池の景観を規定する諸元の変遷について整理すると第３表のとおりである。

第３表　満濃池諸元の変遷

事業名略称	工事実施期間	堤高(m)	貯水容量(万m^3)	満水面積(ha)
(第一次嵩上げ前)	-	23.66	584.6	不明
第一次嵩上げ	1905～1906	24.48	660.2	94.3
第二次嵩上げ	1927～1930	26	780	105.2
第三次嵩上げ	1940～1958	32	1,540	138.5

注)第二次嵩上げ以前の堤高は、現在の32mを既知とし逆算して求めた。

２．潅漑施設としての景観構成要素

（１）満濃池堤体の特性

ため池の約70％は江戸期以前に築造され、建設材料としてコンクリートがなかった時代の築造であったため､堤体が土堰堤(アースダム)であるものが国内約21万ヵ所のため池の大半を占める。しかし、満濃池の堤体はアーチ式アースダムであり、土堰堤でありながらアーチ式となっている堤体は全国的にも極めて珍しい。このアーチ形式の土堰堤が作り出すやわらかな曲線美に満濃池の独自性を見いだせる【写真80】。

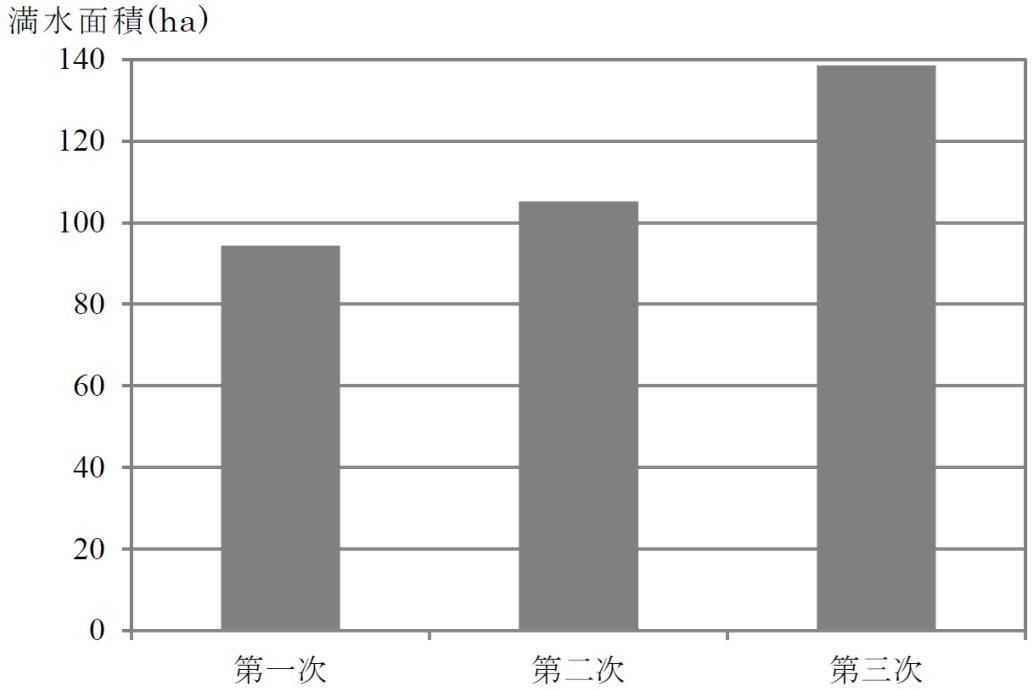
本来、水圧を左右岸の強固な岩盤で支持させる意図でアーチ形式が採用される。同時に、重力式コンクリートと比べると、必要となるコンクリート体積を減らすことができるという利点がある。したがって、ふつうのアーチ式コンクリートダムでは薄っぺらな印象を受けることが多い。これに対して､満濃池の堤体は裾野の広がった土堰堤でありながらアーチ形式をなしているため、堤体は面的な広がりをもつ、たっぷりとした曲線となっている。

写真80　アーチ形式の堤体

（２）日本最大級のため池としての池面の景観

近代における改築により満濃池の堤防は段階的に高くなり、それに応じて満水面積も拡大された。とくに、第三次嵩上げ時に堤高が６ｍ嵩上げされたことにより、満水面積は飛躍的に拡大したことが分かる【第 17 図】。

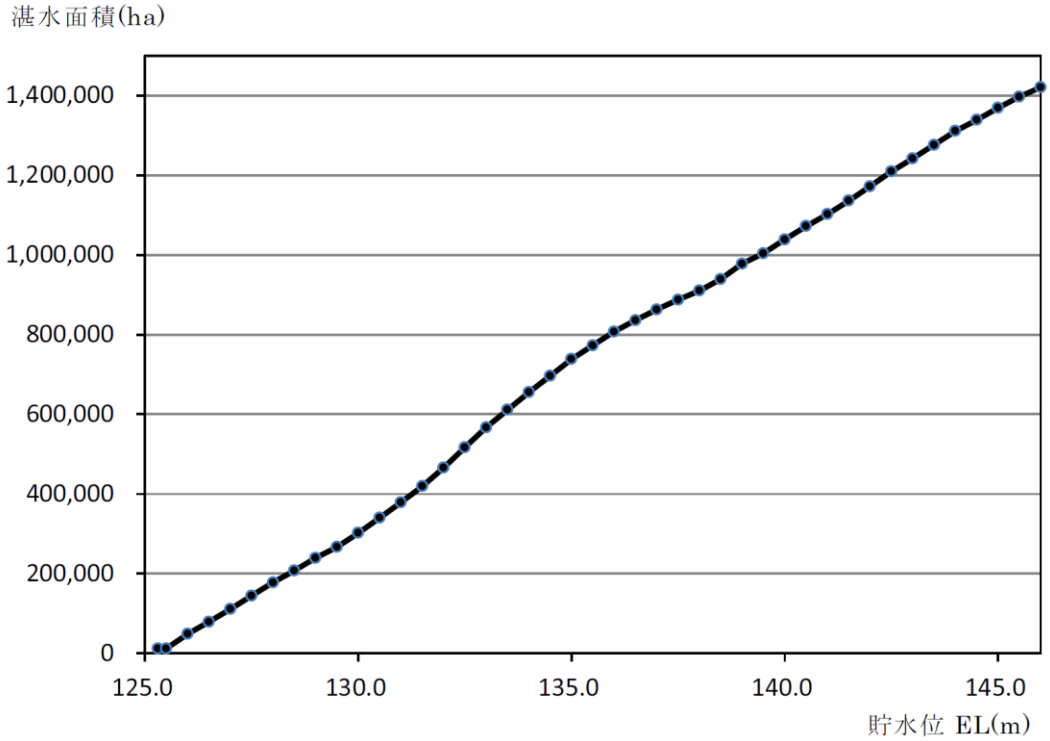
ところで、2010 年度に香川県によって満濃池深浅測量業務が実施されている。当該業務では、基準点測量、横断測量、音波測深等による深浅測量などを行い、満濃池の貯水容量を算定することが目的とされた。貯水容量算定の過程において、標高 0.5mごとの貯水位に応じた表面積並びに貯水量が算出されている。ここでは、「満濃池深浅測量業務報告書」(以下、「業務報告書」という)に記されている計算書ならびに等深線図を用いて、満濃池の池面の景観について評価する。



第17図　嵩上げ工事による満水面積の推移

なお、同業務では池底(最深部)より堤体の天端高であるEL149.0mまでが測量範囲となっている。

貯水位EL(m)と湛水面積(ha)の関係を【第18図】に示す。水位の上昇に応じて湛水面積がどのように拡大するかについては、個々のため池の水縁部の地形勾配に依存する。満濃池の場合、両者には線形関係が認められ、一部の水域(貯水位EL133m～138mの間)を除き、貯水位の上昇に



第18図　貯水位ELと湛水面積の関係

比例して湛水面積は増加することが分かる。

なお、業務報告書では、常時満水位(EL146m)の湛水面積、すなわち満水面積は142.0haと計算されている。先述「１．近代における満濃池の改築」に記載の満水面積等は「満濃池史 - 満濃池土地改良区五十周年記念誌 - 」にもとづく数値であり、同書記載の満水面積は138.5haである。両者には3.5haの違いが認められるが、両者は数%程度の違いに止まっている。以降は、常時満水位(EL146m)の満水面積を142.0haとみなし、業務報告書に掲載されている等深線図をもとに、嵩上げ工事に伴う池面の景観について評価したい。

放流操作等により水位変動が繰り返される農業用ため池にあって、湛水面積の最大値は、常時満水位での湛水面積(満水面積)と考えるのが妥当であろう。常時満水位を上回る水位は発生しうるものの、これは出水時に余水吐での越流が発生する場合に限られるし、出水の程度によって変動しうる越流水深を見越してまで、起こりうる貯水位の最大値を厳密に評価することは不要であると考える。

そこで、第一次嵩上げ前、第一次嵩上げ後、第二次嵩上げ後、第三次嵩上げ後(現在)における常時満水位ELをそれぞれ推定し、常時満水位に対応する池面の景観について、等深線図をもとに評価する。常時満水位ELが明らかになっているのは、現在の状態においてである。堤体天端高EL149mに対し、常時満水位ELは146mである(第４表)。この３mの差分は、計画越流水深と余裕高を見込んだものである。この数値は、農林水産省の「土地改良事業設計指針『ため池整備』」と合致する。

一方、1930 年以前に遡る第二次、第一次嵩上げ工事の設計思想として、越流水深および余裕高としてどれくらいを見込んだのかについては不明である。ここでは、現在の設計指針と同様に３mが見込まれていたと仮定した。また、とくに第三次嵩上げ工事にあたっては、従前の堤体を覆うように盛土が行われたのではないため、堤高の基準面となる基礎岩盤の標高が多少異なっているはずであるが、ここでは、その差異は無視しうるものと仮定した(第４表)。

第４表　嵩上げに伴う常時満水位の推移

事業名略称	堤高 (m)	常時満水位 EL(m)	堤体天端高 EL(m)
(第一次嵩上げ前)	23.66	137.66	140.66
第一次嵩上げ	24.48	138.48	141.48
第二次嵩上げ	26	140	143
第三次嵩上げ	32	146	149

注）第二次嵩上げ以前の常時満水位および天端高は，現在の 146m，149mをそれぞれ既知とし逆算して求めた。

業務報告書では等深線図が標高0.5mごとに作成されている。そこで、常時満水位時に発現する

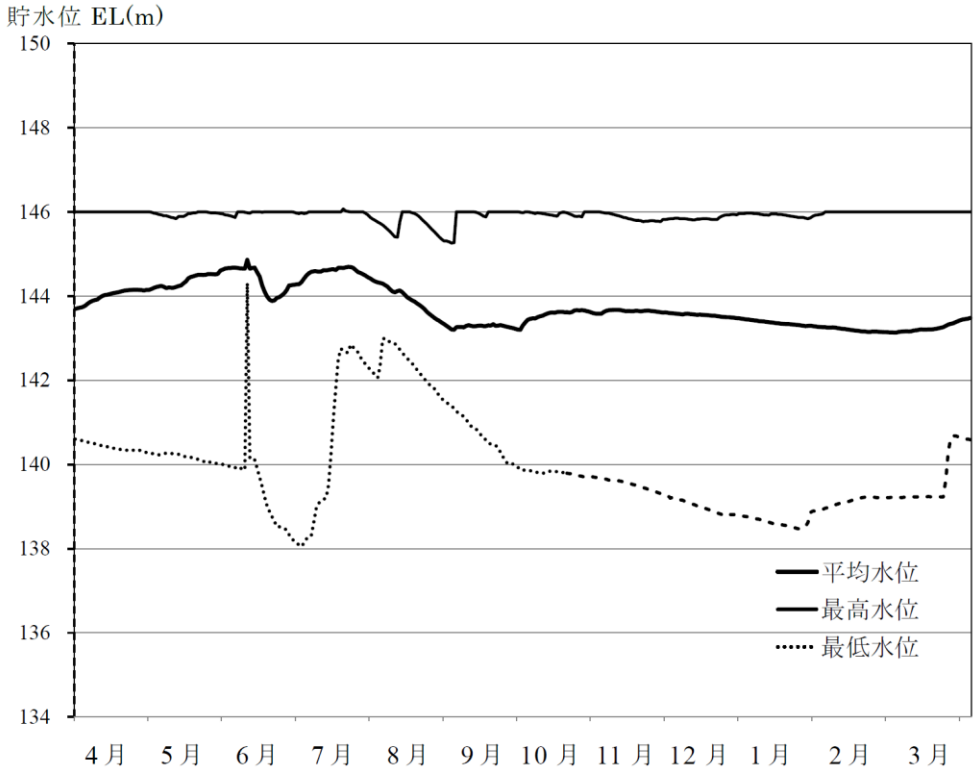
池面の景観を評価するために、第一次嵩上げ前としてはEL137.5mの等深線図を、第一次嵩上げ後としてEL138.5mの等深線図を、第二次嵩上げ後としてEL140.0mの等深線図を、第三次嵩上げ後(現在)としてEL146mの等深線図を用いることとした。

ところで、農業用ため池の水位は、常時満水位が常に維持されているわけではなく、放流操作等により水位は上昇下降を繰り返す。【第19図】は、観測日ごとの平均水位、最高水位、最低水位を、23ヵ年分(1993～2017年、ただし2001年除く)の日貯水位データをもとに表したものである。

【第19図】より、過去23ヵ年に関しては、たとえば８月から９月、また、11～12月において、最高水位が常時満水位EL146mに達しない日が連続してみられる。とくに、８月中旬、９月中旬には、常時満水位を１m程度下回っている時期がある。また、過去23ヵ年の平均水位は、年間通じておよそEL143.5mであることが読み取れ、通常は常時満水位を2.5m程度下回って推移していることが分かる。このことから、EL143.5mの等深線図についても評価に加えることとした。

EL146mの等深線図(第三次嵩上げ後、現在)、 EL143.5mの等深線図(過去23ヵ年の平均水位)、EL140.0mの等深線図(第二次嵩上げ後)、 EL138.5mの等深線図(第一次嵩上げ後)、EL137.5mの等深線図(第一次嵩上げ前)を【第20図】に示す。

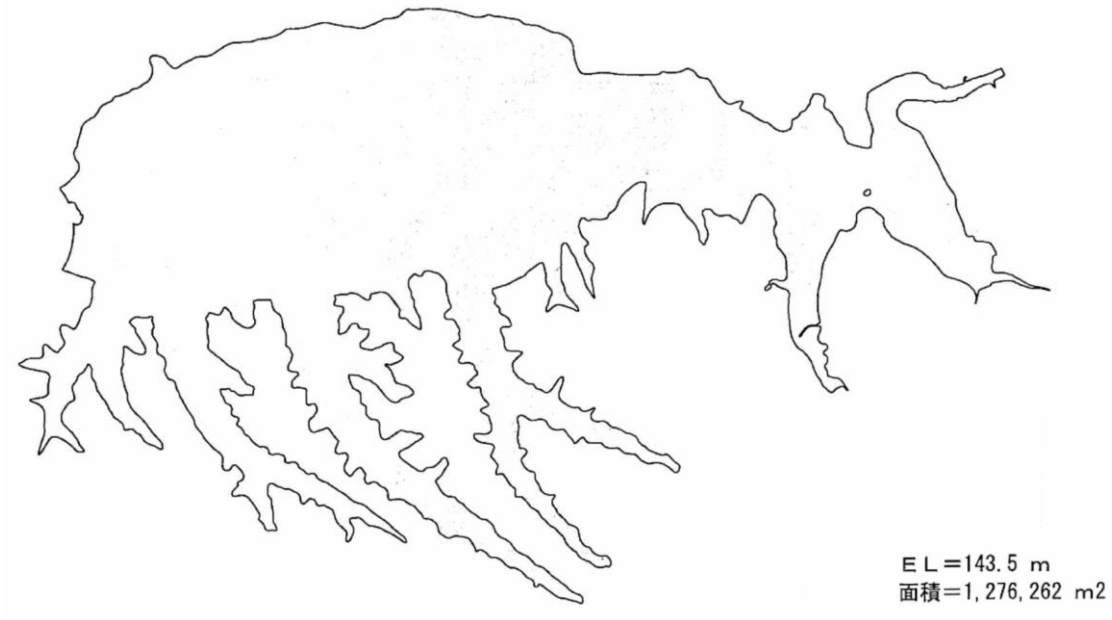
近代における改築の過程において、池面の景観が大きく異なるとすれば、それは堤体から背後地にかけての満濃池の奥行きについてであることが分かる。第一次嵩上げ前と第三次嵩上げ後(現在)の奥行きを比較すると、図上での単純な見積りであるが、池奥方向におよそ700m延伸していることが推測される。



第19図　平均水位、最高水位、最低水位の推移

S=1/40,000

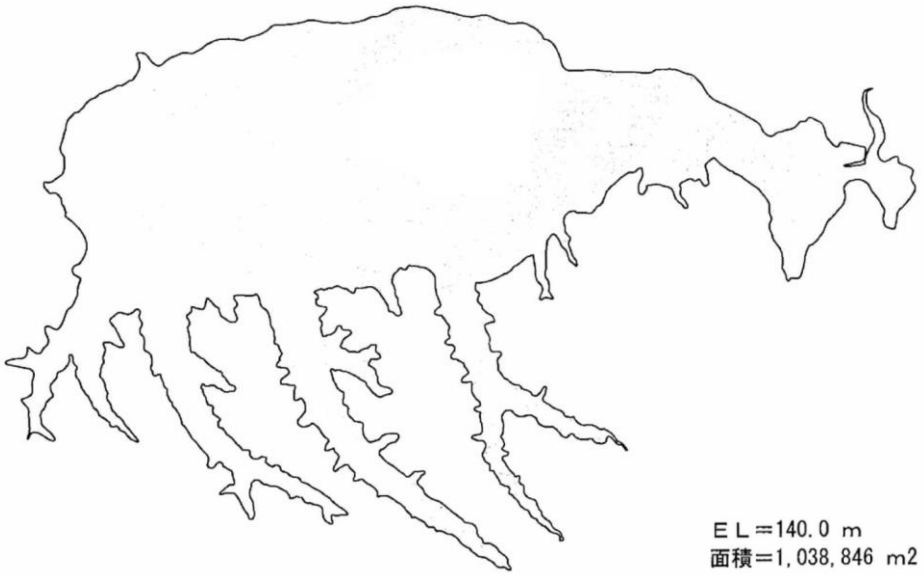
①常時満水位EL146mの等深線図（第三次嵩上げ後、現在）



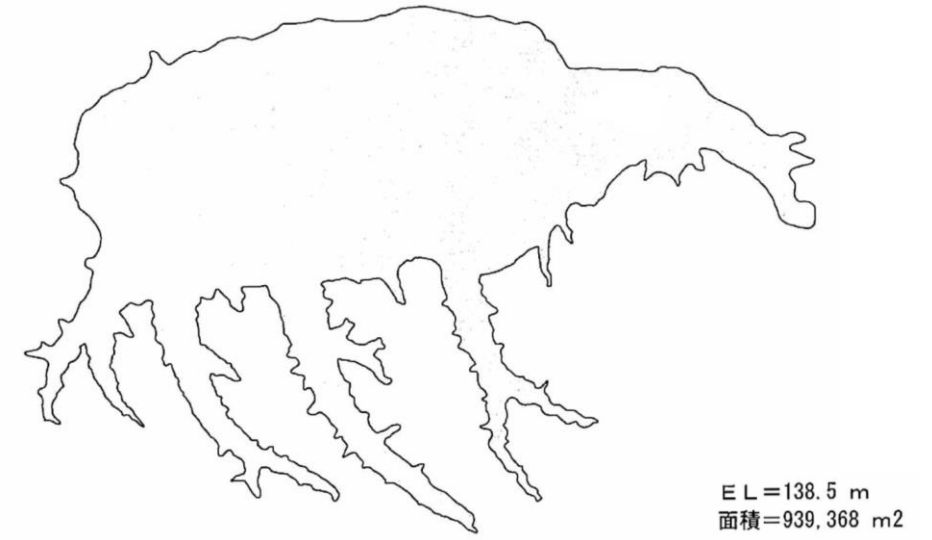
②EL143.5mの等深線図（過去23ヵ年の平均水位）

第20図－１　各時期の等深線図

S=1/40,000



③常時満水位EL140.0mの等深線図（第二次嵩上げ後）



④常時満水位EL138.5mの等深線図（第一次嵩上げ後）

⑤常時満水位EL137.5mの等深線図（第一次嵩上げ前）

第20図－２　各時期の等深線図

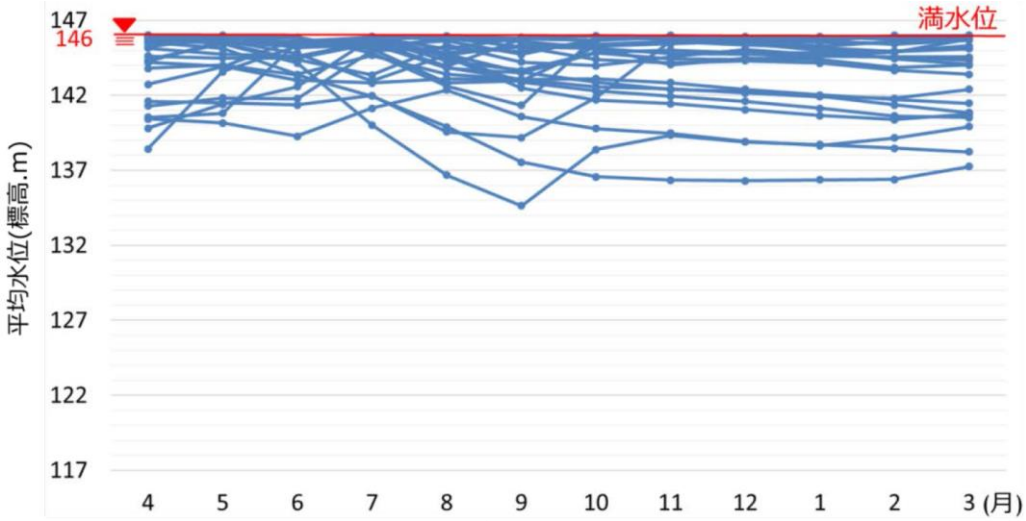
堤体が位置する上流部において、左岸側にはいくつかの支流が合流しており、それら支川が湛水していることも池面の広がりを感じさせる要因と考えられるが、第20図 - ④⑤から判断する限り、近代初頭の改築工事の段階ですでに、ため池湛水域の左岸側については一定程度の広がりがみられたことが推察される。

（３）水管理に伴って生じる景観変化

満濃池は、潅漑施設として人工的に築造された農業用ため池である。潅漑用水の取水によって水位は下降し、自己流域等からの流入によって水位は上昇する。このように、放流操作や降雨条件に伴って水位は変動し、これが満濃池の景観に影響を及ぼす可能性がある。

ａ）水位変動パターン

23 ヵ年分(1993～2017 年、ただし 2001 年除く)の日貯水位データをもとに作成した貯水変動を【第 21 図】に示す。直近 23 ヵ年において、最低水位を記録したのは異常渇水に見舞われた 1994 年であり、同年９月下旬に 134m(貯水率換算で 18.3%)を示している。他年では、常時満水位である 146m(EL)から 142mの間で推移することが多くみられる。時々刻々と変化する貯水位によって、満濃池の景観を成す池面の広がりや水のボリューム感は影響を受けることになるものの、平水年においては、常時満水位から満水位以下４m程度の範囲内で変動すると言ってよく、景観に及ぼす影響はその変動の範囲内ということになる。



第21図 水位変動パターン

ｂ）護摩壇岩の出現頻度

護摩壇岩は、空海が改築工事期間中に護摩を焚き、工事の無事完成を祈念したとされる岩山である。貯水位によっては、護摩壇岩が浮島のように見えることもあったり【写真81】、堤体法面と一体【写真82】となって見えることもある。

満濃池土地改良区によると、水位が 80%を下回ると護摩壇岩まで歩行でアプローチできるほどにまで露呈するとされている。水位 80%＝貯水率換算で 50%であるが、これは過去 22 ヵ年のうち５年のみと推定された。護摩壇岩が露呈する出現頻度は高くはないものの、平水時とは異なった満濃池の印象を与えうる。

写真81　護摩壇岩

写真82　護摩壇岩露呈の様子

ｃ）いわゆる幻の滝の出現

一般にアースダムでは、堤体からは独立して余水吐が設けられる場合がある。余水吐から、放流工を経て余水が堤体下流へと排水されるのであり、ふつう、放流工はコンクリート三面張であるが、満濃池の場合は放水路の水路床はコンクリートが打設されておらず、岩盤がそのまま露呈しており凹凸のある状態である【写真83】。水路床が滑らかではないために、放流工での流れは乱流となり、水飛沫が滝のように見える現象が現れる【写真84】。これを地元では「幻の滝」と呼んでいる。

放流工からの余水の流出は、満水状態になっていることが前提である。直近 23 ヵ年の貯水位データによると、満水となった日数は年平均で約 30 日である。降雨データがないため推定が困難であるが、満水状態であり、かつ、一定程度の流入量が発生した場合に幻の滝が発現するのであり、その発生頻度は上記の年平均約 30 日よりも低いと考えられ、極めて希な現象といえる。

写真83　放水工の水路床

写真84　余水放流の様子

第３節　歴史資料からみた満濃池の景観変遷

香川大学名誉教授
田中　健二

はじめに

本節では、近世讃岐国の地誌を集大成した「讃岐国名勝図会」と、寛永 10 年(1633)の「讃岐国絵図」に代表される国絵図や満濃池を描いた絵図などの絵画史料をおもな資料として、平安時代から明治初めにかけての満濃池の景観の変遷を明らかにする。

１.「讃岐国名勝図会」に見る満濃池

江戸時代末期の嘉永７年(1854)に前編５巻７冊が刊行された「讃岐国名勝図会」は、高松藩の藩士であった梶原藍水の編著である(注１)。藍水は父藍渠があらわした「讃岐志」９冊など讃岐国関係の地誌類を集大成して「讃岐国名勝図会」の前編・後編・続編をあらわした。

「讃岐国名勝図会」前編５冊の刊行にあたり、巻頭の序文で、公卿・歌人の千種有功(ちぐさありこと)は「こたび梶原景紹(藍水)が、この国(讃岐)の名所旧跡どもをくはしうえ(撰)り考へて図をさへ、つはら(くわしく)にものせる」といい、後序では、漢詩人の祝部希声(はふりべのまれおと)(梅辻春樵)が、「景紹別の字は藍水、(中略)みずからその国内の名勝を記載することを謀る」と記しているとおり、本書は讃岐国内の「名所旧跡」、「名勝」を挿絵入りで紹介したものである。挿絵の大部分は、巻一の表紙見返しに「真景松岡信正模」とあるように、松岡調(みつぐ)の筆である(注２)。挿絵には、讃があり、詩文が添えられている。本文に引用された文献とともに挿絵の讃をみることで、満濃池の景観の描写を知ることができる。

ここでは、国立公文書館所蔵の「讃岐国名勝図会」について、まず、その性格を明らかにし、ついで、満濃池に関する記事を抄録する。そのうえで、「讃岐国名勝図会」をおもな資料として、江戸時代の編さん物に見る満濃池の景観の変遷を明らかにする。

(注)

(１) 梶原猪之松(竹軒)著の『讃岐人名辞書』(第二版) 高松製版印刷所 昭和３年、によれば、梶原藍渠・藍水父子の事績は、以下のようである。
藍渠の名は景淳。宝暦 12 年(1762)生まれ。高松の商家槲屋の出で、歴史に通じ、高松藩主頼恕のとき士分に取り立てられ、藩の史局考信閣の学士として、国史の編纂事業に従事した。一方で、讃岐国内の名勝志編纂を企て、「讃岐国名勝図会」の刊行を目指したが、天保５年(1834)病没した。藍水の名は景紹。藍渠の第４子で後を継いだ。父の任を継いで考信閣出仕となり国史編纂に従事した。その一方で、父の遺業を継ぎ、「讃岐国名勝図会」を完

成した。明治初年(1868)没。その子は泉太郎という。

（２）国学者で、明治期は金比羅宮祢宜、多和神社宮司、田村神社宮司を勤めた。著書に「新撰讃岐国風土記」・「讃岐国官社考証」などがある。信正は若年の頃の名である。

（１）国立公文書館所蔵「讃岐国名勝図会」について

嘉永７年(1854)に刊行された「讃岐国名勝図会」巻五の末尾には次の広告がある。

真景　松岡信正圖
　讃岐國名勝圖會前編　七冊
　　大内　寒川　三木　山田　香川東上　五郡
同
　同　　後編　八冊
　　香川東西　阿野郡北南　鵜足　那珂　四郡
同
　同　　續編　五冊
　　多度　三野　豊田　三郡

上の前・後・續３編のうち刊行されたのは、前編だけで、刊記のない５冊本と嘉永７年(1854)と安政４年(1857)の刊記をもつ７冊本が残されている。内容は同じである。他は、刊行されることなく、草稿本が各地の機関等に所蔵されている(注１)。

国立公文書館のデジタルアーカイブで閲覧できるのは、巻一の表紙見返しに「真景松岡信正模 讃岐國名勝圖會前編七冊 演習館蔵板」と見える前編５巻７冊と、巻六の表紙見返しに「真景松岡信正模 讃岐國名勝圖會後編八冊 演習館蔵板」と見える後編６巻８冊である。前編は刊行されたものであるが、後編は草稿本である。

国立公文書館が所蔵する「讃岐国名勝図会」後編は、明治６年(1873) ７月、当時の名東県の旧香川県士族梶原泉太郎が、明治政府による皇国地誌の編さん事業に貢献するため、「讃岐志」とともに献納したものである。長文になるが、【資料 41、42】を掲げる。

次に掲げた２点の公文書によれば、明治６年(1873) ７月 30 日、名東県の権令らは太政官に対し、旧香川県庁所蔵の「西讃府志」44 冊、「讃州略図」１面と、元香川県士族梶原泉太郎所蔵の「讃岐志」９冊、「讃岐国名勝図会」８冊を地誌編集のため差し出したが、そのうち梶原泉太郎所蔵分については、私有物であるため、代金を申し出るよう伝えたが、それは不要であり、献納するとのことであったから、書籍を添えて届ける旨報告している。前年、明治５年(1872) ９月に出された皇国地誌編集布告を受けての対応であろう。

泉太郎は書籍の代金は不要で献納すると申し出たのであるが、太政官では奇特のことであるとして賞金 10 円を下賜することを 12 月 23 日に決定している。それに先立ち、この献納を受けた太

資料四十一　梶原泉太郎讃岐志幷同国名勝図絵献納ヲ賞シ金円下賜

太政類典・外編・明治四年―明治七年・官規・賞典恩典一

『国立公文書館デジタルアーカイブ』

（表題）

「梶原泉太郎讃岐志幷同国名勝図絵献納ヲ賞シ金円下賜」

十二月廿三日

名東縣へ達

其縣貫属士族梶原泉太郎先世編集ノ讃岐志並讃岐國名勝圖會獻納候段、奇特ノ事ニ候。依テ為其賞、別紙目録ノ通、下賜候条、此旨可相達事　縣

但、賜金ハ大藏省ヨリ可受取事

金拾圓　　名東縣貫属士族　梶原泉太郎

大藏賞へ達

名東縣貫属士族梶原泉太郎先世編集ノ讃岐志並讃岐國名勝圖會獻納候ニ付、為其賞金拾圓下賜候條、同縣へ渡方可取計。此旨相達候事　十二月廿三日

名東縣届

元香川縣廳ニ有之分

一西讃府志　　四十四冊

一讃州略圖　　一面

元同縣士族梶原泉太郎所藏ノ分

一讃岐志　　九冊

一讃岐國名勝圖會　　八冊

右ハ地誌御編集ニ付、今般差出申候。右ノ内管下私藏ノ分御買上、無差支候ハヽ代價申出候様、御達ニ付、則梶原泉太郎へ申聞候處、代價御下渡ニ不及、書籍獻納仕度旨申出候ニ付、書籍相添、此段御届仕候也。七月三十日

庶務課・地誌課　議案　財務課歴査

別紙書目ノ通、名東縣ヨリ差出候圖書ノ内、元香川縣士族梶原泉太郎獻納ノ讃岐志九冊並讃岐國名勝圖會八冊ノ儀ハ、其先世多年苦心編集ノ書、殊ニ世上傳本モ無之。屹度御用可相立品ニ付、為御賞金拾圓下賜可然哉。依之同縣へ御達並大藏省へ御達共案文、取調左ニ相伺候也。十二月十九日

地誌課議案

讃岐志九冊、舊高松藩梶原藍渠編集一國ノ全志ニ候事

讃岐國名勝圖會續編八冊、藍渠子梶原藍水編集、前編ハ既ニ刊行相成、本書ハ全ク板下本ニテ書中圖面等、往々上梓處モ有之。殊勝ノ書籍ニテ何レモ世上傳本無之候事。

資料四十二　名東県庁蔵西讃府志外一部士族梶原泉太郎蔵讃岐志外一部献納申立並賞金達

公文録・明治六年・第二百四十七巻・明治六年十二月・諸県伺(二)

『国立公文書館デジタルアーカイブ』

書籍指出御届

元香川縣廳ニ有之分

一西讃府志　四十四冊

一讃州略圖　一面

元同縣士族梶原泉太郎所藏分

一讃岐志　九冊

一讃岐國名勝圖會　八冊

右者地誌御編集ニ付、今般指出申候。右之内管下私藏之分御買上、無指支候ハヽ代價申出候様、御達ニ付、則梶原泉太郎へ申聞候處、代價御下渡ニ不及、書籍獻納仕度旨申出候ニ付、書籍相添、此段御届仕候也。

明治六年七月三十日

名東縣權参事西野友保(印)

名東縣参事　久保断三

名東縣權令　林　茂平(印)

太政大臣三條實美殿

名東縣

其縣貫属士族梶原泉太郎先世編集之讃岐志幷ニ讃岐國名勝圖會献納候段、奇特之事ニ候。依テ為其賞別紙目録之通、下賜候条、此旨可相達事

但賜金ハ大藏省ヨリ可受取事

明治六年十二月廿三日　右大臣岩倉具視

名東縣貫属士族

金十圓　梶原泉太郎

大藏省

名東縣貫属士族梶原泉太郎先世編集之讃岐志幷讃岐國名勝圖會献納候ニ付、其賞金十圓下賜候条、同縣へ渡方可取斗候旨、相達候事

明治六年十二月廿三日

右大臣岩倉具視

(文案貼紙)

讃岐志九冊、舊高松藩梶原藍渠編輯一國之全志ニ候事

讃岐國名勝圖會續篇八冊、藍渠子梶原藍水編輯、前編者既ニ刊行相成、本書ハ全ク板下ニ而書中圖面等往々上梓候處も有之。殊勝之書籍ニ而何レモ世上傳本無之候事

地誌課

（欄外）

「第五百八十六号　十二月十日（印）　第十七号十二月十二日（印）（印）」

十二月十九日上申　（検印）同二十二日（印）

大臣　（朱字）「数例有之　不及上申」　庶務課長（印）

審議　地誌課長（印）

財務課長（印）

別紙書目ノ通、名東縣ヨリ差出候図書之内、元香川縣士族梶原泉太郎献納之讃岐志九冊幷讃岐國名勝図會八冊之儀者、其先世多年苦心編著之書、殊ニ世上傳本モ無之。屹度御用可相立品ニ付、為御賞金十圓下賜可然哉。依之同縣へ御達幷大蔵省へ御達共案文、取調左ニ相伺候也。

名東縣へ御達案

其縣士族（貫属）梶原泉太郎儀、先世編集之讃岐志幷ニ讃岐國名勝図會致献納（候段）、奇特之儀ニ付（事候）、

為（依テ別紙目録之通、）其賞金十圓下賜候条、此旨可相達事

但賜金受取（ハ）方大蔵省へ（ヨリ）可申立（受取）事

大蔵省へ御達案

名東縣士族（貫属）梶原泉太郎儀、其先世編集之讃岐志幷ニ讃岐國名勝図會、致献納奇特（候）之儀ニ付、

為其賞金十圓下賜候条、賜金受取方同縣より申出候（江方可取斗、此旨、相達候）ハヽ可相渡事

政官地誌課では受け入れのための議案書を作成したが、そこで、「讃岐志」と「讃岐国名勝図会」についての評価がなされている。その評価はつぎのようである。

讃岐志九冊、旧高松藩梶原藍渠編輯、一国の全志に候こと
讃岐国名勝図会続篇八冊、藍渠子梶原藍水編輯、前編はすでに刊行相なり、本書は、まったく板下にて書中図面等、ゆくゆく上梓候ところもこれあり。殊勝の書籍にていずれも世上伝本これなく候こと

献納された「讃岐国名勝図会」の前編については、刊行ずみであること、今回献納された分は、「まったく板下」、つまり草稿であり、将来的には刊行が予定されていることがわかる。この議案を受けて、財務課では、つぎのように査定した。

名東県より差し出し候図書のうち、元香川県士族梶原泉太郎献納の讃岐志九冊ならびに讃岐国名勝図会八冊の儀は、その先世多年苦心編集の書、ことに世上伝本もこれなし。きっと御用相立つべき品につき、御賞金として十円下賜しかるべきや。

「讃岐志」の編著者梶原藍渠と「讃岐国名勝図会」の編著者同藍水について、献納者の梶原泉太郎の「先世」(せんせい、先祖・亡父のこと)としているとおり、泉太郎は藍水の子である(注2)。

書名については、「讃岐國名勝圖會續篇」8冊と見えるが、前編はすでに刊行されていると見えること、藍水の計画では続篇は3冊であったことから、これは後編8冊のこととみてよい。これが国立公文書館所蔵の草稿本である。なお、「讃岐志」は「大日本輿地通志南海部」に収められている。こちらも国立公文書館デジタルアーカイブで閲覧できる。

以上の検討から、国立公文書館所蔵の「讃岐国名勝図会」後編6巻8冊は、献納される明治6年(1873) 7月までは、旧高松藩士で藍渠の孫、藍水の子である梶原泉太郎が所蔵していたことが明らかとなった。

国立公文書館所蔵の「讃岐国名勝図会」後編の首巻である巻六の冒頭に、讃岐出身の儒者で昌平黌の教官となった河田 興(迪斎)の序が載せられている。その年紀は、「安政四年(1857)丁巳嘉平月下浣(12月下旬)」であり、藍水は前編につづけて後編を刊行する目論見であったことが知られる。

明治初年、藍水が死去したのちも、「讃岐国名勝図会」の後編についての編集は続けられており、行間・欄外への書込みがなされている。たとえば、満濃池に関わる箇所ではつぎのように見える。

△爰ニ明治元辰年ニ至りて、王政復古旧政を御一新あり。幕府権政を返上なせしかバ、天下一統旧政を改革なし、府藩縣の御政務決りしかバ、香川縣より主として今の池宮拝殿下ニ巨萬の大盤石のありしを、同二巳年九月八日より、竪四尺餘、横三尺五寸餘、長弐拾八間

餘の水道を穿堀て、屈強成天然自然の竇(ゆる)水穴を開□始、同三年五月ニ至り穿拵て水道成就し、堤根ハ旧の如く六十間餘堤を築重、桜・楓・桐嶋・さつき等を植置て池もとの如く造営成就なせしハ、萬代不朽、天萬民を救助なし給ふ。時節到来のなせるなるべし。

上に見るように、本文中に△や○の印を付けて、行間・欄外に注記がなされている。嘉永７年(1854)６月の伊賀上野地震による決壊後、満濃池の修築が完工するのは明治３年(1870)７月のことで、当時は丸亀藩時代である。翌４年(1871)４月、丸亀藩を廃し、丸亀県が置かれる。さらに丸亀県と高松県を合併し、香川県(第一次香川県)が置かれるのは、同年11月のことである。同６年(1873)２月には、香川県を廃止し、名東県に併合した(『香川県史年表』)。従って、上の記事に「香川縣」と見えるのは、第一次香川県の設置期間にこの注記がなされたことを記している。名東県への併合後の７月に梶原泉太郎による「讃岐国名勝図会」後編の献納が行われていることから、明治維新後のできごとに関する注記は泉太郎によるものと推定できる。

なお、藍水が刊行を予定していた続篇３巻(多度・三野・豊田３郡)は、国立公文書館の藏本には含まれていない。こちらは、公益財団法人鎌田共済会郷土博物館に昭和４年(1929)の写本が所蔵されている。表題と書写奥書を掲げておく。

(十三巻)
讃岐國名勝圖會草稿　多度郡　十三　上下
昭和四年十二月二十日写　原本竹内コハル氏藏
(十四巻)
讃岐國名勝圖會草稿　三野郡　十四　上下
昭和四年十二月二十日写　原本竹内コハル氏藏
(十五巻)
讃岐國名勝圖會草稿　豊田郡　十五
昭和四年十二月写　原本梶原猪之松氏保管

原蔵者の竹内コハルは、『日本名所風俗図会』収録の『讃岐國名勝図会』解説によれば、綾歌郡羽床村在住となっている。梶原猪之松は、昭和５年(1930)に刊行された『古今讃岐名勝図会』の補訂兼発行者となっている梶原猪之松(竹軒)である(注３)。

(注)
(１)『日本名所風俗図会14四国の巻』(松原秀明編　角川書店　昭和56年)の『讃岐国名勝図会』の解説に詳しい。なお、本書の底本は「内閣文庫本」(国立公文書館所蔵本)である。それは、解説の末尾に「本書(内閣文庫本)を見れば明白のように、写本であっても六巻より十一巻まではほぼ版下の状態である」と記されていることからわかる。

（２） 梶原猪之松監修『讃岐人名辞書』（高松製版印刷所　昭和３年(1928)）の「梶原藍水と其の子孫」の項に見える。同書は、国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧できる。

（３） 梶原猪之松（竹軒）が補訂して昭和５年(1930)に刊行した『古今讃岐名勝図会』の冒頭の序文は「安政四年丁巳嘉平月下院」に「昌平黌教官　河田興」が撰ならびに書したものであるが、本文で触れた国立公文書館所蔵「讃岐国名勝圖會」後編八冊の序文とまったく同じものである。ただし、「下浣（かかん）」を印刷時に「下院」と誤っている。『古今讃岐名勝図会』を刊行するにあたり「讃岐国名勝圖會」の序文を流用していること、本文で指摘しているように、「讃岐國名勝圖會草稿　豊田郡　十五」を保管していることからみて、梶原猪之松（竹軒）は、藍水の近親者であろう。なお、『古今讃岐名勝図会』は、国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧できる。

（２）国立公文書館所蔵「讃岐国名勝図会」の満濃池関係記事について

「讃岐国名勝図会」巻十一那珂郡上　国立公文書館所蔵本

真野郷　此地初神野郷と書来りしか、嵯峨天皇御諱神野と申奉りしかハ、字音の同しきか故に、真野郷と改めしならん。其事諸記なしと雖も日本紀略大同四年九月二日乙巳、改伊豫国神野郡、為新居郡。以触上諱也と見えたり。其後弘仁十二年、當国より奏請して、弘法大師に萬濃池を築しめたまふ時の上書にも、神野郷と記さん事を憚りて、真野と改めし物ならんか。後人の考を待。

（中略）

十市里　同（真野村）所にあり。

南海国史ニ

　　爰なから　おとふるたにも　有ものを　いとゝ十市の　里なきかせそ

清少納言

（萬濃池　池宮讃）

　　まゝ（のゝ）の池よ　いけとはいはし　うなはらに　八十嶋かけて　見るこゝちせり

藤井宿祢高尚

　　漲水漫々繞翠巒　放眸正作大洋看　一双不借踏将破　九十九灣探盡難

幸田惟親

（釈文）

漲水漫々として翠巒を繞る　眸を放ち正に大洋の看を作す　一双の不借、踏みて将に破るべし　九十九湾、探尽難し

　　風は五日　雨ハ十市の　池水も　たへづたゝへて　国ハしづけき

酒（矢原）部正敬

資料43　讃岐国名勝図会 萬濃池 池宮 摸写図［嘉永７年（1854）］（原本国立公文書館所蔵）

群山屏立勢龍窟　纔是堤防六十弓　三萬有田駆旱魃　百渓缺一住蛟龍　海師遺徳歴年耀　嶋氏餘功逐世隆　請看溶々助民力　公私歡意起斯中

藤春嶺

（釈文）

群山屏立し、勢は龍窟たり　纔かに是、堤防六十弓　三万の田有り、旱魃に駆らる　百渓一に欠く、蛟竜の住するを　海師の遺徳、年を歴て耀き　嶋氏の余功、世を逐ひて隆んなり　請ふ、看よ、溶々たる民を助くの力　公私、意を歓ばし斯の中に起る

萬濃池　同所にあり。十市池とも云。池の周廻八千五百間、水たまりニて二里三丁、池の長さ南北九百間、東西四百五十間、當国第一の池なるに依て、萬濃太郎と云。中比廃して山田と成、堤長四拾五間、上廣さ六間、高サ拾弐間半、堤根六拾五間、三面ハ山也。漑田三万五千八百十石斗。竇水（ゆる）長十八間、廣さ四尺弐寸、高さ弐尺八寸、穴壱尺六寸、樋五ケ所ニて、竇水穴十ケ所なり。當時水たまり深さ十一間。

弘仁十年四月より七月迄、諸国雨ふらさりしかハ、公より諸国に令して池を掘らしむ。當国も溝渠をさらへ、池を築きける。同十一年より此池を築初しかと、目に餘る大池なれハ、十二年にいたれともならす。諸人大に倦労れぬ。何ともすへからす。爰に人あり。沙門空海今都にあり、世人ミな其徳を慕ふ事、枯草の雨を待か如し。若爰ニ来らハ不日にならん。是に於て時の刺史其言を朝廷に奏す。同六月空海詔を奉して爰に至る。民大に歓ひ、堤防もまた日ならすしてなれり。同十三年勅して空海に新銭弐万を給ふ事日本紀略にみえたり。寛仁四年時の国司碑銘を建さし給ふ。其文次ニ出せり。治安年中、堤塘を更改す。爰に独眼竜あり。此池に住む。傳云、寒川郡志度村の當願と云者化する所也とそ。後此地を去て海に移る。其時堤防大に壊ると志度寺の縁起にみえたり(注1)。又元暦元辰年、大洪水ニて堤基破壊して跡方なくなりて、其後五百石斗の山田となり。人家なとも往々基置して、池の内村といふ。△（△弘仁十二丑年(注2)、開発なして三百六十四年、池中満水なせし也。）爾後数多の星霜を経て、寛永三寅年閏四月七日大風雨ニて、其後七月に至る迄七十五日雨なく、大旱して、秋穀不作（ミのらす）。一諸民餓死に及ひける。京都も井水涸て、草葉萎て糸になれるか如くなりける。此年先封生駒の老臣西嶋八兵衛尤之といへる人、此池を再ひ築きける。

普請奉行ハ福家七郎右衛門・下津平左衛門也(注3)。今永世の助益となりて、下民其恩沢に浴せり。生駒家国除の後、同十八年〇（〇竇水（ゆる））木朽壊（きくさり）しかと、国の大守なきによりて當郡木徳村の農民里正四郎大夫と云者をして、重修の事を幕府へ訴へ出ける。台命によりて、當郡五条・榎井・苗田三村を池修補料と定給ふ。是に依て其三村を池御料と云。其後国祖君の御時御料所の御代官岡田豊前守殿・執政稲葉美濃侯ニ申出て、當池修理の入費ハ本府高松及ひ京極侯より弁へ給ふ様ニ内命ありしかと、池修補料ハ軽微たりといへとも、池御料の三村ハ其費にあて給ふべき様定めおき給ひしを台命に背き給ふ事本意ならすといな

ミ給ふに依て、其事ハ止ミて、其後数多御普請ありと雖も、先矩の如く、樋材木等をも池御料三村の租税を以て給ひ来りしか、いか成る故よし有しや。宝永三戌年竇水木改換（つくりかへ）のとき、御代官遠藤新兵衛殿より已来賜ハらさる也とて、今の如く本府高松及京極侯より諸事扱ふ様ニなりたり。〇（〇扨寛永~~三~~八年再興以来百八拾~~八~~三年の星霜を経て、文化十亥年ニ至り、池中弐丈余も土埋りしかハ、苗田村の里正守屋吉左衛門主ニして堤ニ土置、六尺高くし、其要を石ニ刻して碑銘を不動堂ニ造立せり。）

竇水木（ゆるき）往古より嘉永年中迠ハ径り丈餘の巨木をならへ、池水を通し、三十三年目ニ大樋更とて大普請あり。国中東西の村々より人足数万人出て堤を切開き、土砂を荷ひ、大樋を掘出し、新木を埋め更、前年八月より初て翌年三四月比迠ニハ元の如く築直す。其入費夥敷事ニて、其行装図上に出せるか如く、筆紙に尽し難き大荘成事也。依之爰に人あり。村吏数輩と謀りて丈餘の巨木を石となしなハ萬世不朽。入費を除くの国益是にまされることあらしと、衆議一決して、官に訴へ出て、嘉永五子年四月より工を起し、巨木をのぞき、　石となせしかと、土と石とハ思ひ合ざる事もありしや。所々より水もれ出て、是迠の如く　速に築止めかたきを、色々と丹誠をこらして、漸く同七寅年夏に至て堤塘もとの如く築立落成す。爰に於て官より其事に預りたる者へ其功を嘉して格式を給ふもあり。被服及白銀を賜ふもありて、諸民安堵の思ひをなして歓ひ居たりしか、同年七月四日より樋の傍~~より~~水洩出て昼夜大水流れ出しかハ、池掛りの者ハさら也。農民力を尽し種々さまさまと妨きしかと、池中の水僅か四合斗なれと追々水勢強くなりて如何とも詮方なく今や堤防破壊に及なんと池下の村里ハ安き心もなくて堤足切なば傍なる山の上に火を焚き太鼓を打て堤の崩たるを知らすべしと相図を定おき、手を空しくして徒に詠め居りしか、五日の間水勢ますます強く流れ出て、残れる水ハ十か一なる時数多の人々池辺の山に登りて池中をみやり、息をこらして居りしか、同九日の夜半の比奇（ふしき）なるかな。池の半水溜りより白雲空に立のぼるとみえて、忽ち白波起立やいなや、二年丹誠なして埋置し石の樋一時破壊して、堤足崩れ流れて其水川下及田畑一面に流れ出て一里斗なる金比羅阿波町・金山寺町なとハ俄に床の上へ水湛へたり。さるに依て五条村・榎井村ハ往来の道人の乳迠水ミち来りしかハ、家居流れてその水丸亀町（丸亀市中府町）口まて水流れ行しとそ。僅か一合の水なれと、其水勢の厳しき事ハ埋め置し石の樋ことことく何地へ流れ出て埋れしや、数多の石の行方知らすなりしハ、池の廣大なる事思ひやるへし。

〇（〇寛永~~三辰~~八未）年再興なしてより弐百三十年池中満水なせしが、是年堤防崩れ流去て一筋の小川となり、其余ハ悉く芝草生して、近村山のあなたより此地ニ通へる閑道ニなりて池水のかゝらざる村民の便利とハなりぬ。）

因ニ曰、僅か池中の水四合の時ならすして一合の時堤陥たるハ、天萬民を助け給ふ。御加護の難有事也。されと其水金毘羅さや（鞘）橋の上を越て流れしを以、考れハ、池中満水の時堤切なハ、あは町・金山寺町ハ家の棟より壱丈六尺高の水流れける分量也と土人いへり。さるに依て川下の村々ハさら也。其水池より四里斗なる丸亀城下に流れ行て海に落入ける と

そ。是に依て川下に住居なせる村々ハ常に其事を考居て二六時中油断あるへからす。あな恐ろしの水勢や。只ニ正直第一ニして信心なし、仏神の擁護を願ふへし。あなかしこ。是を忘れ給ふな。又曰、ある人巨木を石ニ作りかへ、堤足を崩し池を失ひしハ、其人のとか也といへと、さにあらす。是ハ国益を慮り、且ハ多くの人民の苦辛を思ひやり、善事をなせしかと、地妖にてかく成りしなれハ、其人を罪する事なかれ。今昔物語にいへる魚を捕んとて池を失ひしとは雲泥の相違なれハ、天其善心を照覧し給ひ不日にもとの如く堤防成就なせる時あるべし。

△(△爰ニ明治元辰年ニ至りて、王政復古旧政を御一新あり。幕府権政を返上なせしかバ、天下一統旧政を改革なし、府藩縣の御政務決りしかバ、香川縣より主として今の池宮拝殿下ニ巨萬の大盤石のありしを、同二巳年九月八日より、竪四尺餘、横三尺五寸餘、長弐拾八間餘の水道を穿堀て、屈強成天然自然の竇水穴を開□始、同三年五月ニ至り穿拵て水道成就し、堤根ハ旧の如く六十間餘堤を築重、桜・楓・桐嶋・さつき等を植置て池もとの如く造営成就なせしハ、萬代不朽、天萬民を救助なし給ふ。時節到来のなせるなるべし。始め木を以て竇水道を通し、弐百年餘、三十一年毎竇水木更とて、国中より幾萬の人足を出し、造替なせる民の辛苦をいとひ、或人、嘉永年中其木を除きて石となしなバ、萬代不朽の栄なりとて人力を費せ〻しと。其後一とせも持たす流失なせしかハ斯なし。厚志の切なるを天道照給ひて今の如くなし候共、長谷川喜平次が忘眠丹誠成て数十年の辛労を天照覧なし、死後ニ至て則なれるも石の水道を思ひ付しハ、今の如く自然の水道なれる魁なるべし。爰ニ於て遠近の諸人、池遊覧せんとて、日毎ニ弁当・割籠を携へ、爰ニ至る者の絶間無りしかバ、堤の上ニ桟敷・机木を設て遊客を憩しめ、酒肴菓を商ふ者もあり。四時村民の潤となせるハ、是も萬民を救ひ給ふ一助なるべし。)

新後拾遺集(注4)

今ハはや　十市の池の　みくり縄　かくるともしらぬ　人にこひつつ

民部卿為家

日本紀略曰(注5)、弘仁十二年五月壬戌、讃岐国言、始自去年、堤万濃池、公大民少。成功未期。僧空海此土人也。山中坐禅獣馴鳥狎。海外求道、虚往実帰。因茲道俗欽風、民庶望影。居則生徒成市。出則追従如雲。今離旧土常住京都。百姓恋慕実如父母。若聞師来、必倒履相迎。伏請。宛別当令債済其事許之。

萬濃池後碑文(注6)

伝燈満位僧真勝入寺東大、此池者大宝年中国守道守朝臣之所築也。旧記不注位名、空以嗟嘆。古人伝云、此堤前世頽破、然而文書淪亡、其実難知。近曾弘仁九年流破。再下官使、三丈八尺乃築成。仁寿元年之秋、天下大水超堤上、少剋之間掃底而流。国中之池大小悉破。二年春、

有丈二幅。又荒饉。今茲旱魃八十余日、国既虚耗、民无所拠。秋八月、権守正□位下弘宗王、含朝之倫旨、莅残害之百姓、即巡諸郡、検察損物、薫慰撫愁苦之民間。閏八月朔、始発役夫二千余人、令築堤一丈五尺。而上起自十月上旬、発六千以下輪転、令築、幷破水門槃石。此苦咎築諸群破堤。三季二月朔、大発役夫六千余人、限約十日、戮令築。十一日午剋、大功已畢。爰水門猶尚不可无言。是以明年春三月発夫二千余人、更増一丈五尺、通前八丈。其成事之体、以俵薦六万八千余枚、裹沙土填深処。由此其功早遂声満天下。惣上夫単一万九千八百余人之所用物数一十二万余束。凡見聞之　記大綱。細々之事不題注。老僧悉応円諸卒、随三僧自始迠終、作法錬行。於是依蒙仏力、夫・民無恙。国司欣悦。申上諸官聖主務悠幸施満海岳之恩。非本所望　守賢君宵衣勤公。飢疲口唱秘密真言之法、遍内外処分之事、内国楽分之中民富。可謂海岳者度実頼王詳。寛仁四年歳次庚申

今昔物語曰(注7)、今ハむかし、讃岐国那珂郡に萬濃池とて大成る池あり。其池大師其国の人を愍みて人を役して築たまへる池なり。池のまハり遙に遠く堤はなはた高かりけれハ、池とハ覚へす。海なとのやうに見えたり。廣さハかなたに居る人のかすかに見ゆるほとなれは思ひやるへし。池築て後くすれすして久しけれは、其国の人田を作るに旱魃のときといへとも、此池にたすかりけれは、国の人よろこひあひけり。殊更上より数の川かゝりたれは、池の水常に湛へ絶る事なく大小の魚おひたゝしく有。国中の人是を事多といへとも、池にハますます魚満てたえさりけり。然に其国司にありける国中の者共館に集りて物語なとしけるついてにあはれ萬濃池には限なく多き魚かな。三尺の鯉なともあらんと語けるを守伝聞てほしくおもひ、いかにして此池の魚をとらせはやと思ふに池はるかに深けれハ人をいれて網を置事あたはす。所せん池の堤に大きなる穴を通し、夫より水を洩して水の落る所に魚のいるへき物をかまへて取らんとて、かくはからいけれは、ミづ走り出るにしたかひて其穴より多くの魚いつるを数斗もなく捕てけり。かくてのち穴を塞しかとも、水の出る勢つよくして塞得す。穴次第に廣くなる内に大ニ雨ふりて、池の上より流来る河水まさりて池にミちて其穴よりして堤遂にくすれて、池の水國中の田畠・人家を損しぬ。多の魚は流出て彼是にて人にとられけり。かゝりし後ハ、池の水少くなり、雨降ことに土埋りて、池のあとかたちもなかりけり。是を思ふに人の欲心によりて池を失ひたりける。やんことなき権者の人を憐ミて築たまへる池を失ひしたにはかりなき罪なるに、此池の崩によりて多の人の家をそこなひ、多の田畠を失ひたる罪いかはかりそや。ましていはんや、池の中に有そこはくの魚をとりたる罪、誰人の負んや。極て益なき業したる事やと国人は其守を悪ミ誹ける。其池の堤の形ハ今に見申かとなん、かたりつたへたるとかや。

同書云(注8)、讃岐国那珂郡に万乃池と云、極て大きなる池あり。其池ハ弘法大師の其國の衆生を哀しかり、為に築たまへる池なり。池の廻り遙に廣くして堤を高く築きまはしたり。池なととは見えすして、海とそ見えける。池の内底ひなく深けれハ大小の魚とも量なし。亦龍の棲としてありける。然る間其池に住ける龍日に当らんとおもひけるにや。池より出て人離

たる堤の邊に小蛇の形にて蟠て居たりけり。其時に近江国比良山に住ける天狗鷂の形として其池の上を飛まわるに堤に此小蛇の蟠て有を見て鷂反下て、俄に掻き抓て遙に空に昇ぬ。龍ちから強き者なりといへ共、思ひかけぬ程に俄に抓れぬれハ、更に術尽て只抓れて行に、天狗小蛇を抓砕て食せんといへとも龍の用力強に依て心にまかせて抓み砕て散ん事あたはすして遙に本の栖の比良の山に持行ぬ。狭き洞の動へくもあらぬ所に打籠置つれハ、龍狭□□□破无くして居たり。一滴の水も无ハ空を翔る事もなし。亦死ん事を待て四五日あり。然る間此天狗比叡山に行て短(すき)を伺て貴き僧を取らんと思ひて夜、東塔の北谷にありける高き木に居て伺ふほとに其向に造り懸たる房あり。其房に有僧、椽に出て小便をして手をあらはんかため水瓶を以て手を洗ふて居るを、此天狗木より飛来て僧を掻抓て、遙に比良山の栖の洞に将き行て龍の有處に打置つ。僧水瓶を持なから我にもあらて居り。いまハ限とおもふほとに天狗ハ僧を置ままに去ぬ。其時に暗き所に音(をと)有て僧に向て云く、汝ハ此誰人そ。何より来るそと。僧答て曰、我比叡山の僧なり。手を洗はん為に坊の椽に出たりつるを天狗の俄に抓ミ取て将来れはなり。然ハ水瓶を持なから来れるなり。抑かくいふハまた誰そ。龍答て云、我は讃岐国万能池に住龍なり。堤に這出たりしを、此天狗空より飛来て俄に抓て此洞に将来れり。狭く□□て為む方無といへとも、一滴水も无けれハ空をも翔らすと。僧のいはく、此の持たる水滴に若一滴の水や残りたらんと。龍是を聞て喜て云、我此所にして日来経て既に命終なんと為るに幸に来り會ひ給ひて互に命を助る事得へし。一滴の水有らハ、必汝本の栖に将至へしと。僧又喜て水瓶を傾て龍に授るに一滴斗の水を受て、龍喜て僧に教て云、努々怖る事无して、目塞て我に負れ給ふへし。此御更に世々にも忘かたしといふて、龍忽に小童の形と現し、僧負て洞を蹴破りて出る間、雷電霹靂して陰り雨降事甚怪し。僧身振肝迷て怖しと思ふといへとも、龍を睦ひ思ふかゆゑに念して負れて行し程に、須臾に比叡山の本の坊に至る。僧を椽に置て龍ハ去。彼房の人常の霹靂して房に落懸と思ふほとに俄に坊の邊暗夜の如く成ぬ。しはらく斗有たる時に見れは、一夜俄に失ひにし人の椽にあり。坊の人々奇異く思て問に、事有様を委しく語る。人々ミな聞て驚き奇異りける。其後龍彼天狗の怨を報せん為に天狗を求るに天狗京に智識を催す荒法師の形と成て行けるを龍降て蹴殺てけり。然ハ翼折れたる屎鷂にてなん。大路踏れける。彼比叡山の僧ハ彼龍の恩を報せんかため、常に経を誦し善を修しけり。実に此龍ハ僧の徳に依て命をなし。僧ハ龍の力依て山に返る。是もミな前世の機縁なるへし。此事ハ彼僧の語り傳へを聞継て語り傳へたるとかや。

冬日観満濃池　　徳顯忠　号筆山　本府人

衆山環列自為披　百谷朝宗帰一池　凛乎壮哉渺漫色　況復厳冬雪飛時　我来放観立谷口
波上凄々送寒颸　岸遠不辨牛与馬　村童数處牧涯　始驚多少封内水　誰是堪當君孫児
有時灌沃及両邦　為虚旱魃因君醫　満眼山水隔塵區　賞心欲賦入小詩　無情僮僕妨吟思
欠伸促帰訴晩曦　顧聘憐君潜其徳　僻地湛々養龍螭　守分莫復誇寛洪　江潮豈無此雲夢
君不見琵琶湖水　千萬頃浸天有与海争雄

（釈文）

冬日、満濃池を観る　　徳顯忠　号筆山　本府人

衆山環列しておのづから披となり　百谷、朝宗して一池に帰す　凛として壮なるかな、渺漫の色　いはんやまた厳冬、雪の飛ぶ時　我来たって放観し谷口に立つ　波上凄々として寒颸を送る　岸遠くして弁へず牛と馬　村童数、処牧の涯　始めは驚く多少、封内の水誰かこれ君が孫児に当たるに堪へん　時に灌沃あり、両邦に及ぶ　虚となす旱魃、君によって医す　満眼の山水、塵区を隔つ　賞心、賦して小詩に入らんとほつす　無情の僮僕、吟思を妨げ　欠伸、帰るを促して晩曦に訴ふ　顧聘君を憐みその徳を潜ます　僻地湛々として龍螭を養ふ　守分、また寛洪に誇るなく　江潮あに雲夢に比するなし　君見ずや、琵琶の湖水　千万頃、天を浸し海と雄を争ふあり

池乃宮　同所堤にあり。社人朝倉氏。祭礼九月四日。合殿　萬濃池神　神野神社　加茂大明神　祭神　美豆波能賣命　天穂日命　別雷命　嵯峨天皇

三代實録曰(注9)、元慶五年十一月戊午、授讃岐國正六位上万濃池神、従五位下。當社ハ大同三子年九月勧請なり。天文三午年九月、矢原太郎兵衛尉、神野寺　住僧をして修造す。棟札今尚存せり。寛永六巳年三月、〇(先封生駒侯)御再(遷宮)営あり。~~勧請~~導師ハ金光院(金刀比羅宮)たり。今尚別當職たりしかハ、修補遷宮乃式等とり行ふ例とハなりぬ。万治二亥年九月、国祖君(松平頼重)御修造なし給ふ。其後寛文七未年九月及貞享元子年、再営す。遷宮導師ハ金光院権大僧都宥栄、願主ハ矢原理右衛門尉たりと棟札にみえたり。或云、万濃池土地四百五十石高、七ツ井を以、しつけをなし。其井を天の真井と云。天穂日命を勧請して産土神とせしを弘仁年中、池普請出来しより池の神を相殿となせしとそ。

寶物　劔一振　長九寸。両銘。京宗近作之。備州住春光作、鞘袋共、宝暦十一年御巡見使御寄附。

邦内廿四社諸記

神代あふく　跡も十市の池乃宮　野上乃花を　ぬさと手むけん　坂上道啓

神野神社　同所ニあり。延喜式二十四座の一。祭神　天穂日命　加茂大明神　池の宮相殿たり。

當社跡は、大同三子年二月、勧請之。正治元年二月十二日、矢原庄司義宗、社殿を造替せり。應安四年八月五日、矢原五郎正信、社殿を修補す。遷宮導師ハ金光院代法将坊及神野寺実道勤之。大工塩入山三比良なりと。寛正二巳年四月、当社殿に掲る處の銅の釣燈篭に彫刻して今尚存せり。

銘曰

神野社　大同三二月立　加茂神　同九月立

神野寺　弘仁十二立

空海座堂　再立　本願主神櫛遠孫矢原式部左衛門正文

二天門　同年立　大治五戊七月三日

本願矢原庄司義宗

神野神社　再建　正治元二月十二日

本願矢原五郎正信

應安四八月五日　造作出来遷宮

金光院代法将坊

神野寺實道和尚　大工塩入山三平

本堂再建　明徳四酉二月三日

大願主　矢原五郎入道正信　　向井丹後貞次

惣領庄司太郎正時　　山川市正元忠

二男長尾刑部二郎　　神野寺二十三世　信専大和尚

寛正二巳棟札集寫

永禄年中より今の朝倉氏の祖斎れり。此神社ハ嵯峨天皇の御宇、俄に万濃池を築けるに依て、□□□○成へし。（○修補なして鎮護の神となせし）~~日本紀略弘仁十二年五月にミゆ。~~其後荒廃に及ひしかハ、郡家村八幡宮ハ天穂日命を合せ祭て神野大明神と称し奉りしに依て、今ハ神野神社といへり。されと此地と郡家村とハ同郡なりといへ共、道遙ニ遠さかりしかハ、万濃池鎮護の為、大師修補勧請（修補）せし社たるに何そ池より遠所に社殿あるへきや。後人の所為にて彼地の神社ハ式内廿四座の一ならさること、押てしるべし。△（△尚、当社ニ掲る所銅の釣燈篭ニ勧請及修補の年月等を○（○寛正二年棟札を集寫し）彫刻して今尚存せるを以証となすべし）

神野寺跡　同所ニあり。

當寺跡は、弘仁十二年万濃池開発の時、弘法大師此地ニ来り一宇建て止住す。大治五戊年七月三日、住僧空忍和尚の時、當村の士矢原式部左衛門正文、大師堂及仁天門等を建立せり。明徳四酉年二月三日、当寺二十三世信専大和尚のとき、矢原五郎入道正信其男庄司太郎正時・次男長尾刑部次郎・向井丹後貞次・山川市正元忠等、主として諸堂再建なせると神野神社釣燈篭に彫刻せり。天正十二年九月八日、住持空照和尚遷化後、退転なせりと矢原氏の旧記にミえたり。

矢原家傳曰、式部左衛門佐栄正ハ神櫛王三十五世の苗裔中務権大輔酒部黒麿の男なり。延暦年間、當所神野神社の東口ニ居住す。栄正より二十世の末孫　五郎正信、貞治元年、細川右馬頭頼之朝臣鵜足津の濱え着岸し、同姓清氏（細川）朝臣と争戦のとき、清氏朝臣の招ニ應し、一族と共ニ白峯の麓ニ出陣す。清氏朝臣戦死後、在所に帰り、應永二年八月病を以、家に没す。其後八世の後胤理右衛門正景、後八助と改む。永禄の比なれハ当国騒乱の時に当つて数々戦功あり。天正十二年九月四日の夢に童子来つて八助に謂て曰、速に此所を退去すべしと。夢さめて奇異の思ひをなせしに五日の夕長宗我部信親（長宗我部元親嫡子）当国に乱入し、神野寺に陣せんとす。住僧空照、大に憤り争へとも、一一一叶ハしとや思ひけん。寺重寶弘法大師自筆の心経、行事の器等を携へ小松庄榎井坊へ立退きしかバ、信親遂に此ニ陣し、八助か住所を攻む。此時弟又八一族郎黨都合二十六人討死す。八助ハ次男豬兵衛と倶に潜に遁れ

出て土民を誘ひ六町ばかり西の山の岡に伏兵を設て待居たるに信親又来り攻む。時に應して伏兵一同に吶喊を發したり。信親大に懼れ半里計引退く。その隙に一族を帥ひ逃て本目左衛門に掎頼せり。左衛門許諾して為に信親か陣所に至り和親を請ひ和成て八助元の居所へ帰り安堵す。是に於て夢に見へし童子を同所楠樹の許に祀り童子明神と号す。元親(長宗我部)の書翰等今当家に存す。後仙石権兵衛秀久、當国の領主となり、八助ニ七ケ村東分ニ於て高四百五十石を賜へり。同十三年二月刀一・槍二を嫡次の二男に賜へり。今猶家に襲蔵せり。同十五年六月合力米二百石を給へり。文禄元年朝鮮の役佐次郎正方弟豬兵衛、近矩(生駒親正)朝臣に従ひて行。慶長六年十月、戦功を賞し、地方弐百石をたまへり。折紙猶家に存せり。大坂の役生駒正俊朝臣に従て生玉に出陣す。是より先き正方備前の国日比左衛門基春か養子となり、與三右衛門と改名し、浮田秀家に仕ふ。秀家(宇喜多)配流の後、郷に帰り父の後を嗣て、数々戦功あり。元和二年家に没す。男正直に至て寛永三寅年領主壱岐守高俊(生駒)朝臣、西嶋八兵衛をして万濃池を再営せしむ。同五辰年、工を起し同八未年落成す。八兵衛始終正直の家に寄住して成功を遂く故を以、正直をして池の事件を掌らしむ。慶安二年に没す。男理右衛門正勝嗣く。其後、正平・正行・正治・正澄・正躬、相續て今理右衛門正敬ハ遠祖酒部黒麿三十九世の後胤なり。今の居所ハ中古の下屋敷也。今童子か峯といへる所ハ是則元屋敷の地なりといふ。

荒神社　同所にあり。祭礼九月三日

此地ハ、貞享の比まてハ、当郡士矢原氏の領地にて、旗下の者住居なせしか、怪異の事有しによりて、矢原太郎、此神を祭るといへり。

（　）内は、頭注で示された書込みである。○△は補筆する箇所を示す。

（注）

（1）「志度寺縁起」『香川叢書』第一 香川県 昭和 14 年 国立国会図書館デジタルアーカイブ

「桓武天皇延暦のころ、淀の白杖といふもの、死して琰魔の廳庭に到る。王のたまわく、汝娑婆にをいて、一堂建立の願ひあり。いま一たび娑婆に歸すまゝ、南瞻部州大日本國讃岐國志度道場を建立すへし、これ観音結界の霊場、すなわち我氏寺なり。白杖勅命をうけ奉て出ぬれは、道に獄卒手弱き女を縛りきたるを見て、女に問ふ。答ていはく。我は讃州のもの。父は一藹廳官といへり。我大富家の娘なりといへとも、死しては随従する人もなく、かゝるくるしみをうくと云々。白杖慈念絶かたく、王宮にたちかへり、仰願はこの女も娑婆に歸したまはゝ、かれか力を頼んて、志度道場を造奉らんと、そのとき琰王放免有て、両人蘇生し、夫婦となり、堂等を建立せり。その供養の時、當所に二人の猟師あり。當願・暮當といへり。當願は法事の庭に詣てつ。暮當は妻子の糧もなしとて、山に入て猟しなから、供養に遇さることをかなしめり。かつ當願は法會に在といへとも、心根を三寶に歸する事もなく、唯暮當か一人快く殺生せんことをのみ妬て、たちまち頸より下は虵身となりぬ。暮當来ていはく。多年交りしなさけに、當國萬農の池に入れたまはれと。暮當いとあはれにおもひ、かの池に入れぬれは、暫あつて大虵となり、うかひ出ていはく。汝

か恩ふかし。我眼の玉をぬてた報せん。甕に入れ、一たひ酒を造り賣へし。酌とも盡しといつてあたふ。暮當歸て、教のことくし、家富、よろつ心のまゝなり。そのゝちかの玉は、ゆへあつて、禁裏より宇佐八幡へ奉納しまふと云々。延喜元年より當年まで、凡九百四十年餘。」

（２） 慶応３年(1867)成立の香川県立図書館所蔵「政要録五之内巻三」に見える。つぎの記事は、この箇所が典拠であろう。「治安二年(1022)堤防を修築しけることの有りしに、元暦元辰年(1184)の洪水にて悉く流失し、跡は五百石斗りの山田となり池内村とぞ唱へける。爾後数多の星霜を経て、寛永三寅年(1626)閏四月七日大風雨の後、七月に至り雨なく大旱にて、五穀実らず餓死に及べるもの多かりければ、国守生駒壱岐守高俊侯、其臣西島八兵衛之尤（ゆきまさ）といへる人地理に精妙なるを以て此池を築かしむ。」著者の石田忠恒は、高松藩の農政・農村担当の下級藩士で「地方纂要」の筆者石田忠昌と同一人物である。

（３） 普請奉行の人名は、「満濃池営築図」個人蔵 公益財団法人鎌田共済会郷土博物館所蔵写本と一致している。

（４） 「新後拾遺和歌集」

（５） 『新訂増補国史大系』弘仁 12 年(821) 7 月 21 日条には、「新銭二萬、空海法師に施す」と見える。なお、空海の満濃池修築への関わりについては、「弘法大師行化記」（『続群書類従』第八輯）に詳細が見える。

（６） まんのうのいけのちのひぶみ。『続群書類従』第三十三輯上 雑部

（７） 『今昔物語集』巻三十一　本朝　附雑事　第二十二　讃岐國満農の池をくずしゝ國司の語

（８） 『今昔物語集』巻二十　本朝　附仏法　第十一　龍王、天狗のために取られたる語

（９） 「日本三代実録」『新訂増補国史大系』

（３）「讃岐国名勝図会」に見る満濃池の造営・修築と景観

①満濃池の修築と決壊

寛仁４年(1020)の「萬濃池後碑文（まんのうのいけのちのひぶみ）」によれば、満濃池の草創は、奈良時代の大宝年間(701 - 704)の国司道守朝臣の築造にさかのぼる。たびたび決壊したがその記録は残っていない。弘仁９年(818)に決壊したときは、官使を下して復興がなされ、３丈８尺(約 11.4m)の堤を築いたという。「日本紀略」に見える同 12 年(821)、讃岐国よりの申請により、空海を満濃池造営の別当に任じたというのは、このときのことであろう。

仁寿元年(851)秋、大雨により国中の池、大小ことごとくが破れ、その翌２年には旱魃におそわれたので、国司(権守)弘宗王は朝廷の命をうけて、諸郡の池を修築した。満濃池については、閏８月、役夫 2,000 人を動員し１丈５尺(約 4.5m)の堤防を築いた。その後も造営をつづけ、同４年(854) ３月には役夫 2,000 人を用い、さらに堤防を１丈５尺かさ上げし、以前のように８丈(約 24m)の高さとなったという。

満濃池は、弘仁９年(818)、仁寿元年の両度、決壊し、そのつど３年ほどの期間で修復がなされている。仁寿元年(851)の修復により満濃池の堤の高さは以前のとおり８丈になったと伝えており、現在の満濃池の堤高が約 32mであることと比べれば、その３分の２ほどの高さの堤が築かれていたわけである。古代においては大規模なものであった。

『今昔物語』に、「今ハむかし、讃岐国那珂郡に萬濃池とて大成る池あり。其池大師其国の人を愍みて人を役して築たまへる池なり。」と見えるように、満濃池の築造は弘法大師信仰と結びついていき、近辺にあった神野寺には空海の滞在中の宿所ということで大師堂が建てられ、信仰の対象となった。

「讃岐国名勝図会」によれば、治安年間(1021 - 24)に、満濃池の堤を改修したあと、元暦元年(1184)、大洪水により堤は崩壊して跡形もなくなったという。その後は、石高 500 石ばかりの山田となり、人家も置かれて、池内村と呼ばれたという。

寛永３年(1626)閏４月、大風雨が起こり、その後７月まで降雨がなく、秋の収穫もなく飢饉が起こった。この惨状への対策として、当時の領主生駒家は西嶋八兵衛之尤に満濃池の再築を命じた。普請奉行は福家七郎右衛門・下津平左衛門であった。

「満濃池営築図」(注１)の記すところでは、八兵衛は、同年八月、土地の領主矢原正直を訪ね、「当(那珂)郡年々旱損」につき、懇談し、正直は「池内所持の田地」をのこらず差し出し満濃池の修築工事が始まった。工事は同５年(1626)10 月より始まり同８年(1629) ２月に竣工した。矢原家は、寛永 12 年(1635) ４月３日の生駒家家老連署奉書(矢原家文書)(注２)により、生駒家から 50 石を与えられ、満濃池の「常々仕かけ水、堤まはり諸事油断なく、指図つかまつり、堅く相守るべき」ことを命じられ、池守となった。

(注)

(１)「満濃池営築図」原図個人所蔵、摸写図公益財団法人鎌田共済会郷土博物館所蔵

(２)『新編　香川叢書　史料篇(二)』香川県教育委員会　昭和 56 年(1981)

②満濃池の景観描写

満濃池の景観について初めて描写した文献は、12 世紀前半の成立と推定される『今昔物語集』である。

巻三十一 本朝 附雑事 第二十二 讃岐國満農の池をくずし丶國司の語、には、つぎのように見える。

> 今ハむかし、讃岐国那珂郡に萬濃池とて大成る池あり。其池大師其国の人を愍みて人を役して築たまへる池なり。池のまハり遙に遠く堤はなはた高かりけれハ、池とハ覚へす。海なとのやうに見えたり。廣さハかなたに居る人のかすかに見ゆるほとなれは思ひやるへし。

巻二十 本朝 附仏法 第十一 龍王、天狗のために取られたる語、には、つぎのように見える。

讃岐国那珂郡に万乃池と云、極て大きなる池あり。其池ハ弘法大師の其國の衆生を哀しかり、為に築たまへる池なり。池の廻り遙に廣くして堤を高く築きまはしたり。池なととは見えすして、海とそ見えける。

両方の説話に共通する点は、満濃池は、弘法大師空海が、讃岐国の人々を哀れんで築いたとすることと、この池が広大で堤体が非常に高く、池ではなく海のように見えるということである。

空海の遺徳を讃える大師信仰が広がるにつれて、満濃池は空海によって創建されたとの説話ができたのであろう。堤体が当時としては驚くほどの高さを持っていたことは、「萬濃池後碑文」の記事からも知ることができる。

この満濃池は空海によって創建され、池というより海に見えるとの、二つの観点は、後代の満濃池の景観を描写するときの基調となった。

後者の観点については、たとえば、「讃岐国名勝図会」の挿図「萬濃池　池宮」の讃につぎのように見えるのが典型である。

漲水漫々として翠巒を繞る　眸を放ち正に大洋の看を作す　一双の不借、踏みて将に破るべし　九十九湾、探尽難し
ま丶(の丶)の池よ　いけとはいはし　うなはらに　八十嶋かけて　見るこ丶ちせり

前者の観点については、同じ讃の一つにつぎのように見える。

群山屏立し、勢は龍窿たり　纔かに是、堤防六十弓　三万の田有り、旱魃に駆らる　百渓一に欠く、蛟竜の住するを　海師の遺徳、年を歴て耀き　嶋氏の余功、世を逐ひて隆んなり

上でいう、「海師の遺徳」とは、満濃池を築いた空海の徳を指す。なお、つづけての「嶋氏の余功」とは、中世を通じて決壊したままであった満濃池を寛永年間に復興した西嶋八兵衛の遺業を指している。

上の二つの漢詩からは、「讃岐国名勝図会」では、満濃池の景観を描写するとき、あらたな観点が入っていることが知られる。それは、満濃池には「群山」が「屏立」し、「九十九湾」の湾入があることである。挿図においても、池の彼方に連なる山々と岬が連続する地形が強調されている。

海と見まがうほどの広大な池を造った人間の営為への驚嘆と、取り囲む山々と池に連なる岬が作り出す景観のすばらしさを文人たちは詩文に残したのである。

２．絵画史料に見る満濃池の景観の変遷

本項では、源平の争乱のころ、元暦元年(1184)に崩壊した満濃池のその後と、寛永年間(1624 - 1645)の再築後の満濃池の景観を国絵図をはじめとする絵画史料から明らかにする。

（１）池内村

「讃岐国名勝図会」の本文につぎのように見える。

> 元暦元辰年、大洪水ニて堤基破壊して跡方なくなりて、其後五百石斗の山田となり。人家なとも往々基置して、池の内村という。△(△弘仁十二丑年、開発なして三百六十四年、池中満水なせし也。)爾後数多の星霜を経て、寛永三寅年閏四月七日大風雨ニて、其後七月に至る迄七十五日雨なく、大旱して、秋穀不作(ミのらす)。―諸民餓死に及びける。京都も井水涸て、草葉萎て糸になれるか如くなりける。此年先封生駒の老臣西嶋八兵衛尤之といへる人、此池を再び築きける。普請奉行ハ福家七郎右衛門・下津平左衛門也。
>
> （注）現代仮名遣いにあらためた。

元暦元年(1184)、大洪水により満濃池は決壊し、跡形もなくなって、池は500石ほどの山田となり、人家もできて池内村と呼ばれたというのである。弘仁12年(821)空海による修復から364年の間、満濃池は水を湛えてきた。このときの決壊後、満濃池が再築されるのは、寛永３年(1626)の大旱魃ののち、生駒家の家臣西嶋八兵衛によってである。

「讃岐国名勝図会」の「池の宮」の項にはつぎのように見える。

> 池乃宮　同所堤にあり。社人朝倉氏。祭礼九月四日。合殿　萬濃池神　神野神社　加茂大明神　祭神　美豆波能賣命　天穂日命　別雷命　嵯峨天皇
>
> (中略)
>
> 万濃池土地四百五十石高、七ツ井を以、しつけをなし。其井を天真井と云。天穂日命を勧請して産土神とせしを弘仁年中、池普請出来しより池の神を相殿となせしとそ。

満濃池の地は、450石の石高で、「七ツ井」を用いて田植えを行い、その出水を「天真井(あまのまない)」とよんでいた。天穂日命を祀って産土神としていたが、弘仁年間の満濃池の築造により、池の神を祀った際に相殿とした。

西嶋八兵衛による満濃池再築工事の完工は寛永８年(1631)のことであり、元暦元年の決壊から447年後のことである。その間、満濃池は放棄され、かつての池地は再開発されて500石ほどの石高を持つ池内村という村になっていた。

鎌倉時代末期の嘉元４年(1306)６月12日の昭慶門院御領目録案(竹内文平旧蔵文書)(注１)には、当時、後宇多上皇の院分国であった讃岐国の公領が書き上げられている。その中に「萬乃池泰(秦)

資料四十四　賀茂別雷神社文書［長禄二年（一四五八）・永正十七年（一五二〇）］

①送り進（まいら）す御料足事

合わせて六貫六百文といえり。ただし口銭を加うるなり。

右、讃岐国萬乃池内御公用銭、送り進すところくだんのごとし

長禄二年五月三日　　瀧宮新三郎　實明（花押）

賀茂御社

沙汰人御中

②永正十七年（一五二〇）四月十六日　栗野景昌讃岐国萬濃池代官職請文

賀茂御社領讃岐の国萬濃池の内競望申すにつき、御補任を成し下され候。畏み存じ候。しかれば、御公用の事は、毎年四月中旬に六貫九百文、はたまた、十一月中に五貫八百文分、京着定め、社納申すべく候。万一無沙汰申し候はば、かの代官職の儀御改替あるべく候。その時一言の子細申すべからず候。よつて後日のため請文の状くだんのごとし

栗野孫三郎

永正十七年四月十六日　　景昌（花押）

③永正十七年四月十六日　讃岐国萬濃池公用銭請文

請乞い申す、賀茂御社領讃岐国萬濃池の内御公用の事、栗野孫三郎御代官職として、毎年四月中旬に六貫九百文、はたまた、十一月中に五貫八百文申し請けらるところ、万一無沙汰の儀これあらば、私として、御神事前に社納申すべく候。なおもつて難渋候はば、堅く御催促に預かるべく候。よつて後日のため請文の状くだんのごとし

はたす（秦）ハふ（周防）守

永正十七年四月十六日　　安家（花押）

久勝」と見える。秦久勝は後宇多上皇の父亀山上皇の随身を勤めていた人物である(注2)。満濃池はため池としての機能は失われていたが、収益のある農地となっていたため、院の御随身に給付されたのである。

室町時代から戦国時代初めにかけて、満濃池は、京都の賀茂別雷神社(上鴨社)の社領となっていた。鎌倉時代、分国主となった上皇は、讃岐国内の公領を、しばしば大寺社の料所として寄進していたから(注3)、満濃池も同様の道をたどったのであろう。

「賀茂別雷神社文書」(注4)より、満濃池に関する文書を掲げる。なお、読解の都合上、書き下し文にあらためている。

いずれも、満濃池の年貢を当時「国人」と呼ばれていた武士が請け負っていたことを示す史料である。①は「萬乃池内」の「御公用銭」(御料足)を送付した送状(おくりじょう)、②・③は「萬濃池の内」の「御公用」銭を連帯して請け負った請文(うけぶみ)である。なお、①に見える「口銭(くちぜに)」は、兵庫関や淀関の関銭(関税)であろう。

これらの史料から、かつて満濃池があった地は「池内」、「池之内」と呼ばれ、国人が代官とし

資料45　讃岐国絵図［慶長年間（1596-1615）］部分
（高松市歴史資料館所蔵、□は田中による補入）

て請け負って領主上鴨社へ年貢を納めていたことがわかる。

この池内村の存在を明示する史料(注5)が、先に掲げた【資料 45】 高松市歴史資料館所蔵「讃岐国絵図」である。本図は原本ではなく写本であるが、読み取れる情報は慶長年間(1596-1615)末のものである。

図の中央に金倉川が描かれているが、本流をさかのぼると「七ケ村」と肩書を付けて小判型の中に「池内」と記されている。村名は小判型で示されているから、「池内」は村名である。なお、本図には、一か所もため池は書き込まれていない。

池内村の場所を確認するために、【資料 46】丸亀市立資料館所蔵「讃岐国絵図」の一部を掲げ

資料46　讃岐国絵図［寛永10年（1633）］部分
（丸亀市立資料館所蔵、□は田中による補入）

る。本図は、寛永 10 年(1633) 3 月、生駒家から金毘羅宮へ奉納されたことが明らかな、金刀比羅宮所蔵「讃岐国絵図」と記載内容・表現がよく似ており、丸亀藩京極家に伝来したものである。寛永 10 年原図製作の讃岐国絵図とみてよい。

図の中央に大きく描かれているため池が、満濃池である。「金毘羅」宮の西を流れる川は金倉川でその水源は満濃池である。【資料 45】で、池内村は、春日・福良見・照井３か村の東側に位置し、その東は仲・宇足両郡の郡境であった。【資料 46】に見るように、満濃池の場所は、かつての池内村に当たる。

【資料45】と【資料46】の原図が、それぞれ製作された慶長年間(1596-1615)から寛永10年(1633)の間、同８年(1631)に西嶋八兵衛による満濃池再築がなされ、この地の景観は一変したのである。

(注)

(１) 『香川県史８資料編　古代・中世史料』香川県　昭和 61 年(1986)

(２) 『勘仲記』『増補史料大成』臨川書店　昭和 56 年(1981)　弘安７年(1284)10 月 20 日条

(３) 『香川県史２中世』第２章第３節　公領の変質　香川県　平成元年(1989)

(４) 『賀茂別雷神社文書第一』史料纂集古文書編　続群書類従完成会　昭和 63 年(1988) 東京大学史料編纂所所蔵「賀茂別雷神社文書」写真帳により一部修正。

(５) 高松市歴史資料館所蔵「讃岐国絵図」ほかの生駒時代の讃岐国絵図については、田中「生駒時代の讃岐国絵図」『近世初期讃岐国における城下町建設と開発・治水に関する研究』美巧社 平成 29 年、に詳しい。なお、本書は、科学研究費補助金による研究成果報告書であるため、市販されていない。香川大学附属図書館・香川県立図書館・高松市立図書館・坂出市立大橋記念図書館で閲覧できる。

（２）寛永年間の再築

寛永年間の満濃池再築については、「満濃池営築図」(個人所蔵)が好個の資料となる。本図は、『讃岐のため池誌』香川県農林水産部土地改良課 平成 12 年等で活用されてきた。まず、公益財団法人鎌田共済会郷土博物館所蔵の写本から作成した摸写図を掲げる。

図には、中央に池の宮がある小山が描かれ、その左右に水流が見えている。小山の左側が崩壊した堤体の跡であり、かつての池地からの川が通り、大小の石が散乱している。右側の小川は「うてめ」(余水吐)の跡である。その池地側には岬状の地形との間に数軒の民家と道、農地を区切るあぜ道が描かれている。うてめ跡の右上の小山にも民家がある。

本図は、元暦元年(1184)の崩壊以来、長期にわたって放棄された満濃池の再築以前、寛永初めの景観を示す貴重な資料である。

本図には、寛永５年(1628)10 月 19 日の鍬始め(着工)から、同８年(1631) ２月の上棟式(完工)までの日付ごとの工程、奉行・普請奉行の氏名、那珂・宇多・多度３郡の水掛高、それと、西嶋八兵衛による矢原正直との交渉が書き込まれている。つぎにそれを翻刻する(注１)。

資料四十七　満濃池営築図［寛永年間（一六二四-一六四五）］摸写図

（原図個人所蔵、摸写図鎌田共済会郷土博物館所蔵）

満濃池営築

寛永五辰年　奉行西嶋八兵衛之尤

十月十九日　鍬初　代官出張　番匠喚

十一月三日　西側堀除

十二月廿日　普請方一統引払候

同六巳年

正月廿八日　取掛

二月十八日　奉行代官相改

三月十九日　東ノ分大石割取掛

四月十日　奉行代官立会相改　皆引取

八月二日　底土台　亀甲之用意石割掛

同十五日　西側大石切出済

十月廿八日　座堀取除出来

十二月十二日台目取除ニ掛ル

同廿二日　奉行一統引払

同七午年

正月廿八日　取掛

三月十八日　台目所出来

四月十日　櫓材木着手

同十一日　流水為替土手築立

同十八日　底樋亀甲石垣取掛

五月廿四日迄ニ出来

六月五日　底樋取掛

同廿九日　一番櫓建立

七月六日より底樋伏込　同廿九日迄ニ出来

八月十五日　木樋両側伏込

十月六日　堤埋立出来　竪樋座堀掛

同十八日　竪樋下築立　同晦日出来

十一月十七日波打亀甲石垣築

同廿九日　二番櫓立

十二月十日　三番櫓立

同十五日　四番櫓立

同廿二日　五番櫓立

済

同八未年

裏

二月五日　堤右石垣直シ

同十五日　芝付悉皆出来

上棟式終　普請奉行下津平左衛門

福家七郎右衛門

那珂郡高合一万九千八百六十九石余

宇多郡高合三千百六十石余

多度郡高合一万二千七百八十五石二斗余

三郷合（郡）

三万五千八百十四石二斗余

西嶋氏、寛永三年八月、矢原正直方え来、当（那珂郡）郡年々旱損ニ付、懇段（談）御座候付、池内所持之田地不残差出申候

資料47　満濃池営築図［寛永年間（1624-1645）］模写図
（原図個人所蔵、模写図鎌田共済会郷土博物館所蔵）

末尾の満濃池再築に当たっての西嶋八兵衛と矢原正直との交渉の記事は、つぎのように解釈される。

寛永３年(1626)８月、奉行の西嶋八兵衛が矢原正直方へ来た。那珂郡の毎年の旱害について懇談がなされた。そこで、正直は、池内に所持している田地を残らず差し出す旨、申し出た。

図に描かれた家と農地は、かつての池地に位置する。ここが、池内村の中心であって、その領主が矢原家であったと推定できる。そこで、満濃池を再築するにあたっては、矢原家の協力を欠くことができなかったのであろう。

矢原家が池内に所持していた田地を池の復興のため差し出したとの記事は、つぎに掲げる８月15日付けの西嶋八兵衛書状(矢原家文書)(注2)により事実であることが確認できる。

先日者、懸御目大慶奉存候。兼而申上置候、満濃池内御所持之田畠弐拾五町餘、此度致断、闕候之処、衆寡難替御思召寄、今日御用ニ而罷出、相窺候処、笑止ニ思召候。何茂同前之事ニ候。猶追々存寄有之趣、被仰候。三万石餘之衆人上下令承知候。千載御家忽相失候成行、何とも難及是非事候。恐々謹言

西嶋八兵衛

八月十五日　　之尤(花押)

矢原又右衛門(正直)様

このたひは　ぬさも取あへす　神野なり　神の命ニ　逢ふ心ちせり

(書き下し文)

先日は、御目に懸かり大慶存じたてまつり候。兼て申し上げ置き候、満濃池内御所持の田畠二十五町余、このたび断りいたし、欠け候のところ、衆寡替えがたく御思召寄す、今日御用にて罷り出で、相窺い候ところ、笑止に思召し候。いずれも同前の事に候。なお追々存じ寄りこれある趣、仰せられ候。三万石余の衆人上下、承知せしめ候。千載御家たちまちに相失い候成り行き、何とも是非に及びがたき事候。恐々謹言

八月十五日　　西嶋八兵衛之尤(花押)

矢原又右衛門様

このたびは　ぬさも取りあえず　神野なり　神の命に　逢う心地せり

大意を取るとつぎのようである。なお、括弧内は文意を整えるために補っている。

(矢原家が)満濃池の池内に所持なさっていた25町余りの田畠は、このたび(当方から)ことわりを入れて欠けることになったところ、(矢原家においては)公共の利益には代えがたいと思っていただいた。今日、御用により主人生駒高俊にお目にかかってご意向を伺ったところ、「笑止」(お気の毒)のこととお思いになった。(矢原家の処遇については)お考えもある旨、おっしゃっていた。(満濃池が潤すはずの)３万石余りの土地の人々はみな(矢原家の対応を)承知している。長く続いてきた家を失われることになったことは、なんとも申し上げようがない。

資料四十八　矢原家文書［慶長六年（一六〇一）・寛永十二年（一六三五）］

①慶長六年（一六〇一）十月十四日　生駒一正宛行状　矢原家文書(注3)

扶持せしむ知行所事

一　五十七石一斗四升　　豊田郡
一　百四十二石八斗六升　　植田
　　合二百石　　香西郡
　　中間　ミまや

右の分まったく知行せしむべきものなり

慶六
十月十四日　　生駒讃岐守
　　一正（花押）

比々（日比與三右衛門）與三殿

②寛永十二年（一六三五）四月三日　生駒家家老連署奉書　矢原家文書(注4)

以上

御意として申せしめ候。仲郡満濃池上下にて、高五十石永代に遣わされ候間、常々仕かけ水、堤まわり諸事由（油）断なく、指図つかまつり、堅く相守るべく候ものなり。よってくだんのごとし。

寛永拾弐年亥
四月三日　　西嶋八兵衛
　　之尤（花押）
　　浅田右京
　　直信（花押）

矢原又右衛門（正直）殿

「讃岐国名勝図会」では、元暦元年(1184)の大洪水で決壊してから、満濃池の地は「五百石ばかりの山田となり。人家なども往々基置して、池の内村とい」ったと記す。当時の田１反(10ａ)当たりの米の収穫量は、ほぼ２石(300kg)であるから、八兵衛の書状に見える25町余の田畠は、石高でいえば、500石余に相当する。この石高は、「讃岐国名勝図会」に見える池内村のそれと一致するから、矢原家は池内村全体の領主であったと推定される。

矢原家と池内村との関係を「讃岐国名勝図会」の記事から、探ってみる。

「矢原家傳」によれば、矢原家は神櫛王の子孫酒部黒麿が、延暦年間(782 - 806)に神野神社の近辺に住んだことに始まる。神野神社は満濃池の堤に続く丘の上に鎮座する。矢原家は、貞治元年の細川頼之と同清氏が戦った白峯合戦では清氏方についた。

土佐・長宗我部氏の西讃侵攻に際しては、天正12年(1584)、矢原八助(正景)が、神野寺に陣取った元親の嫡子信親と戦い、のち和睦した。

豊臣秀吉の部将で讃岐一国の領主となった仙石秀久のとき、正景は那珂郡七ケ村東分で高 450石を賜り、同13年(1585)、秀久より長男正方と次男豬兵衛に刀と槍を賜わった。同15年(1587)６月には、生駒家より合力米200石を賜り、文禄の役に際しては当主正方の弟豬兵衛が従軍し、戦功を賞して、慶長６年(1601)、200 石の知行地を賜った。正方は備前国日比家の養子となり與三右衛門と名乗って宇喜多秀家に仕えた。秀家が没落したあとは、故郷に帰り、元和２年(1616)に没した。

正方の子正直にいたって、寛永３年(1626)、生駒高俊が西嶋八兵衛に満濃池を再築させたとき、八兵衛は正直宅に寄宿して指揮に当たった。この間の功績により生駒家は正直を満濃池の池守とした。正直は慶安２年(1649)に没した。

上に述べた内容のうち、①慶長６年(1601)、生駒親正より200石の知行地を賜った。②寛永の再築時の功績により、生駒家は正直を満濃池の池守に任じた。この２件については、矢原家文書の中に該当するものがあるので、【資料 48】に掲げる。なお、読解の都合上、書き下し文にあらためている。

【資料 48 - ①】に見るように、慶長６年(1601)の知行地給付は日々與三左衛門(正方)宛てで、給地は豊田郡植田、香西郡中間・御厩の計 200 石である。【資料 48 - ②】から、正直は、満濃池を管理する池守に任命されるにあたって、同池上下において50石を与えられたことが知られる。

また、「讃岐国名勝図会」に収める神野神社の釣燈篭の銘文からは、矢原家の歴代当主が、産土神である神野神社の社殿の造替や堂舎の再建を願主として行っていたことが読み取れる。

矢原家は、神野寺付近に本拠を持つ小領主で、戦国時代の末期は長宗我部氏と戦い、豊臣政権期から江戸時代初期には、仙石・生駒の２代にわたって大名に臣従していたこと、寛永年間(1624-1645)の満濃池の再築の功績により、池守に任じられたことがわかる。この由緒からみて、矢原家は池内村の領主であったといえる。なお、のち寛永18年(1641)に幕府領の苗田・榎井・五条３か村が満濃池の池御料とされると幕府の代官が管理に当たった。

寛永年間(1624-1645)の再築については、工程は詳細に知られるが、ため池としての規模が明ら

かでない。さいわいなことに、寛永の次の年号である正保の初年(1644)に江戸幕府が全国の大名に命じて製作させ、提出させた、いわゆる「正保国絵図」の讃岐国分の写本が存在する。この絵図には、ため池の水深と水面からの堤の高さ、竪・横の間数が記されているので、それぞれのため池のおおよその規模を知ることができる。

国立公文書館所蔵の松平乗命旧蔵「讃岐国図」(注5)は、美濃岩村藩の最後の藩主であった松平乗命(のりとし)が、明治初年(1868)、明治政府の要請に応えて、藩主代々に伝わって来た絵図集を政府に献じたものである(注6)。

正保国絵図では、規格の統一とともに図式の統一化が顕著であることが指摘されている(注7)。具体的には、①村形(小判型)、②郡区分(村形の色分けと黒筋郡界線)、③郡付(枠なし)、④一里山(黒丸点対置)、⑤道筋(朱線)、⑥舟路(朱線)、⑦隣国色別(色塗り分け)である。本稿で取り上げる「讃岐国図」の場合、写本であり、村高など省略されており、また、道筋や舟路が朱線で示されているほかは着色されていない。本論にとって好都合な点は、幕府からの指示に含まれていない、ため池についての記載があることである。

つぎに掲げる【資料 49】は、「讃岐国図」を写真製版したもの(注8)から作成した摸写図(左側)と、寛永 10 年の丸亀市立資料館所蔵「讃岐国絵図」である。満濃池につぐ規模を持つ山田郡神内

正保国絵図 讃岐国図［正保元年（1644）］
部分 摸写図（国立公文書館所蔵）

讃岐国絵図［寛永10年（1633）］
部分（丸亀市立資料館所蔵）

資料49　国絵図に見る神内池と三谷池

池(注9)と同郡三谷池を示している。

図に見るように寛永10年(1633)の国絵図では、ため池は絵画的表現が取られているが、詳細は不明である。この点、【資料45】に見える満濃池も同様である。ところが、「正保国絵図」の「讃岐国図」では、神内・三谷両池について、つぎのように注記がなされている。

神内池
　水深六間　水より上二間　竪六百六十間　横三百間
三谷池
　水深六間　水上二間半　竪七百二十間　横二百四十間

この記載から、堤体のおおよその高さと、池の規模を知ることができる。

つぎに掲げる【資料 50】は、「讃岐国図」を写真製版したものから作成した摸写図で、満濃池とその周辺地域を示している。

満濃池についての注記はつぎのとおりである。

満濃池
　深九間半　水上三間半　竪五百六十間　横四百二十間

満濃池の規模は、水深、水面から堤までの高さ、竪横の長さにおいて、神内・三谷両池を圧倒していることがわかる。これら三つの池は讃岐国のため池を代表するもので、近世には、満濃太郎・神内二郎・三谷三郎の愛称で呼ばれていた。

絵図に注記された水深と水上の高さを合わせたものが堤体の高さとするならば、寛永再築後の満濃池は13間(約23.4m)の堤体を備えていたことになる。

「萬濃池後碑文」には、仁寿４年(854)の弘宗王による復興の結果、満濃池の堤体は以前のとおり８丈(24m)となったと見えるから、寛永の再築では、ほぼ近い数字が得られているといえる。

ちなみに江戸時代終わりごろの満濃池の規模については、「讃岐国名勝図会」につぎのように見えている。

池の周回八千五百間、水溜まりにて二里三丁、池の長さ南北九百間、東西四百五十間、当国第一の池なるに依て、萬濃太郎という。中ごろ廃して山田となる。堤長四十五間、上広さ六間、高さ十二間半、堤根六十五間、三面は山なり。漑す田三万五千八百十石斗。竇(ゆる)水長十八間、広さ四尺二寸、高さ二尺八寸、穴一尺六寸、樋五ケ所ニて、竇水穴十ケ所なり。当時(現在)水たまり深さ十一間。

先にみえるように、「讃岐国名勝図会」が編纂されたころの満濃池の堤体の高さは12間半(約

資料50　正保国絵図 讃岐国図［正保元年（1644）］部分 摸写図
（国立公文書館所蔵、寛永再築後の満濃池）

22.5m）とされており、寛永再築時より若干小さな数字が示されている。

堤体の高さからいえば、満濃池は、古代以来、江戸時代の末期まで、ほぼ同じ規模で築造されてきたわけである。

（注）

（1）『讃岐のため池誌』香川県農林水産部土地改良課　平成12年、で翻刻されている。ただし、一部誤読がある。

（2）本文書の写真が、満濃池土地改良区五十周年記念誌『満濃池史』満濃池土地改良区 平成13年、の81頁に掲載されている。全体に暗くて解読しにくいので、藤田勝重著『西嶋八兵衛と栗林公園』昭和37年(1962)（平成27年9月に美巧社より復刻版が発行されている。）の27頁で示されている解読文を参考にした。

（3）『新編 香川叢書 史料篇(二)』香川県教育委員会　昭和56年(1981)

（4）同上

（5）田中「『正保国絵図』に見る近世初期の引田・高松・丸亀」（『香川大学教育学部研究報告』第Ⅰ部第146号 平成28年 前掲『近世初期讃岐国における城下町建設と開発・治水に関す

る研究』に収録)で、詳細に検討している。

（6） 福井 保「内閣文庫所蔵の国絵図について(続)」『国立公文書館報』10 号 昭和 23 年(1948) 同著『内閣文庫書誌の研究』(日本書誌学大系 12)青裳書店 昭和 55 年(1980)に収録。

（7） 川村博忠著『江戸幕府撰国絵図の研究』古今書院 昭和 59 年(1984) 第二編 江戸幕府撰国絵図の系統的研究 第三章 正保国絵図

（8） 近世絵図地図資料研究会編『近世絵図地図資料集成・第Ⅰ期(第 16 巻)正保国絵図集成・西日本篇』科学書院 平成 24 年 解説は科学書院のホームページで閲覧できる。

（9） 神内池の築造については、「翁嫗夜話」などに西嶋八兵衛が主君生駒高俊の命により寛永 12 年(1635) 5 月に着手し、同年 9 月に完成したとの記事が見える。ところが、寛永 10 年(1633)の年紀を持つ金刀比羅宮所蔵の「讃岐国絵図」(『香川県史 9 資料編 近世史料Ⅰ』昭和 62 年(1987) 口絵写真)には、三谷池の北方にのちの神内池に当たるため池が描かれ、「陣内池」との貼札が付けられている。『日本歴史地名大系第 38 巻香川県の地名』平凡社 平成元年(1989)の「陣内池」の項で指摘されているように、神内池は寛永 10 年以前から存在し、同 12 年(1635)に八兵衛が改修したものと推定される。

（3）嘉永 7 年地震による決壊と復興

満濃池再築時の底樋は木製であったから、定期的に伏替(交換)する必要があった。早くも寛永 18 年(1641)には第 1 回目の伏替が行われ、以後、約 30 年目ごとに伏替を中心とする修復工事が行われた。工事は大雨や洪水の危険を考慮して前半と後半に分けられ、おおむね 14、5 年ごとに行われている。

江戸時代最後の伏替は嘉永年間(1848 - 54)のことである。このときの修築では木樋を石樋に交換する大規模な工事が行われ、嘉永 2 ・ 3 両年(1849・1850)と同 5 ・ 6 両年(1852・1853)の 2 期に分けての普請が行われた。その総人夫数は 37 万人以上にのぼっている。

嘉永 6 年(1853)11 月に完工した翌 7 年(1854)の 6 月 14 日に地震(伊賀上野地震)が起こり、 7 月 5 日に堤防の水漏れが発見され、同 9 日に決壊した。

この嘉永年間(1848-54)においての満濃池の修築事業と同 7 (安政元)年(1854) 7 月の決壊については、芳澤直起が関係資料を網羅して詳細な検討を行っている。最新の研究である。

芳澤論文(注 1)で紹介された高松藩 10 代藩主松平頼胤治世中の事績を記録した「靖公実録」(注 2)から、決壊当時の様子を見るとつぎのようである。なお、読解の都合上、書き下し文にしている。

> 六月十四日夜、地震。十五日暁にいたり小地震数度。十五日より十二日にいたり、京・畿内・近江・伊勢・伊賀等地、大いに震せしと云々。
>
> (中略)
>
> 九日、満濃池隄、長さ四十間余決壊す。那珂郡大水ニて田畑・人家、損傷大し。本隄六十間

余之所、両方にニ七・八間計づつ残り、中四十間余切れ申し候。金毘羅大水にてさや橋より上へ二尺ばかりも水のり、橋大いに損じ、町々人家へ水押し入り難儀致し候。もっとも四五(日脱か)前より追々隄、損し、水漏れ候間、郡奉行代官出張指揮し候。水下の人家用心致し候ゆえ、人馬怪我これなし。折節池水三合ばかりにてこれあり候につき、水勢まず穏かなる方にこれあり候由

(中略)

一　水溜り四合ばかりの由、四日頃より穴明き、追々大穴ニ相成り、六つ(時脱)に切れ捨り。堤指し渡し四五拾間ばかり切れ、土も残らず流れ、石盤も一二拾丁も流る。池尻御領池守居宅流れ捨てり。死人もこれある由

一　榎内辺り町屋、腰水ばかり、金毘羅・阿波町・金の鳥居辺り同断

一　鞘橋あやうく候えども、別条これなく候事

一　家宅は段々損じ候由

一　田代格段損これなく候えども、川端田地砂入り相成り出申し候

一　晴天にて、照り続きの節、右の通り切れ池相成り候につき大損これなき様子に相聞こえ申し候

当時、満濃池の貯水量は「三合」(30%)であったことがさいわいし、決壊後の水勢はおだやかな方であったという。それでも、池のすぐ下では死者が出、金倉川を伝わった水は金毘羅の町を浸水させ、鞘橋を超えて流れたという。

「讃岐国名勝図会」は満濃池の決壊をつぎのように描写している。

同九日の夜半の不思議なるかな。池の半水溜りより白雲空に立ちのぼるとみえて、たちまち白波起り立つやいなや、二年丹誠なして埋め置し石の樋一時に破壊して、堤足崩れ流れて、その水川下および田畑一面に流れ出て一里ばかりなる金比羅阿波町・金山寺町などは、にわかに床の上へ水湛えたり。さるによりて五条村・榎井村は往来の道、人の乳まで水満ち来りしかば、家居流れてその水丸亀町(丸亀市中府町)口まで水流れ行きしとぞ。わずか一合(ママ)の水なれと、その水勢の厳しきことは埋め置きし石の樋ことごとく何地へ流れ出て埋もれしや、数多の石の行方知らずなりしは、池の広大なる事思いやるべし。

(注)現代仮名遣いにあらためた。

こちらでは、決壊した池の水流は激しく、堤防の石が流れ出るほどであり、その水は丸亀城下町の入り口まで達したと伝える。

この時の決壊後の様子を描いた図が、つぎに掲げる【資料 25】 個人所蔵「讃岐国那珂郡満濃池近郷御料私領絵図」(部分)(注3)である。

本図からは、満濃池が、金倉川の浸食でできた広い谷の出口の、両側から断崖が迫った場所に

堤防を築いて、金倉川をせき止めて作られたせき止め湖であることがよくわかる。満濃池には、金倉川上流の深い谷間からの小河川が流れ込んでいることも見てとれる。

決壊後、榎井村の豪農長谷川佐太郎の尽力で、復興が進められた満濃池が完成するのは明治３年(1870)６月のことである。この間、十数年間、農民は井戸を掘り、井手をさらえて灌漑のための水を求めた。榎井村の勤王詩人日柳燕石はつぎの漢詩(注４)を作り、佐太郎へ贈っている。

> 万農池廃(すた)れて十余秋　夏日溝渠寸流なし　箇々田塍(しょう)井を鑿つ　柳辺槿(こう)影毬の如く急ぐ

資料25　讃岐国那珂郡満濃池近郷御料私領絵図
［嘉永７年（1854）以降、明治２年（1869）以前］部分
（個人所蔵、画像提供香川県立ミュージアム）

「讃岐国名勝図会」に掲げられた満濃池の図は、その編集時期から明らかなように、嘉永７年(1854)の決壊以前の姿を描いたものである。嘉永年間(1848 - 1855)の修復は同３年(1850)に始まり同６年(1853)に終わっているから、当然、修復以前の姿を描いたものであろう。本文末尾の明治に入ってからの補筆にはつぎのように満濃池の修復工事とその後を記している。

> ここに明治元辰年にいたりて、王政復古旧政を御一新あり。幕府権政を返上なせしかば、天下一統旧政を改革なし、府藩縣の御政務決りしかば、香川県より主として今の池宮拝殿下に巨万の大盤石のありしを、同二巳年九月八日より、竪四尺餘、横三尺五寸餘、長二十八間余の水道を穿堀して、屈強なる天然自然の竇水穴を開□始め、同三年五月にいたり穿拵して水道成就し、堤根は旧のごとく六十間余堤を築き重ぬ。桜・楓・桐嶋・さつき等を植え置きて池もとのごとく造営成就なせしは、万代不朽、天万民を救助なし給う時節到来のなせるなるべし。はじめ木を以て竇水道を通し、二百年余、三十一年毎竇水木更えとて、国中より幾万の人足を出し、造替なせる民の辛苦をいとい、或人、嘉永年中その木を除きて石となしなば、万代不朽の栄なりとて人力を費せじと。その後一歳も持たず流失なせしかばかかるなし。厚志の切なるを天道照らし給いて今のごとくなし候とも、長谷川喜平次が忘眠丹誠なして数十年の辛労を天照覧なし、死後にいたりて則なれるも石の水道を思ひ付きしは、今のごとく自

然の水道なれる魁なるべし。ここにおいて遠近の諸人、池遊覧せんとて、日ごとに弁当・割籠を携え、ここにいたる者の絶え間なかりしかば、堤の上ニ桟敷・机木を設けて遊客を憩しめ、酒肴菓を商う者もあり。四時村民の潤いとなせるは、これも万民を救い給う一助なるべし。

（注）現代仮名遣いにあらためた。

明治２年(1869) ９月より池の宮拝殿下の岩盤に水道を掘削して堤防を築き、堤防の上には、桜・楓・霧島つつじ・さつきなどを植えて、竣工した。

嘉永年間の修復工事においては、榎井村の庄屋長谷川喜平次の主導で、底樋を木樋から石樋に替えたわけであるが、それが地震による決壊をもたらす原因となったという批判があることに対し、筆者は、喜平次の死後、満濃池の修復は岩盤を繰り抜いて水道を作ることで完成したが、石の水道を作るということを思いついたのは、喜平次が先駆けであると弁護している。

元のように修復された満濃池には、遠近の人々が遊覧のために訪れ、日ごとに弁当や割籠を持参して来る人が絶えない。村人は、堤防の上に桟敷や机を置いて遊客を接待し、酒肴菓子を商う者もいる。これが村人の生活を豊かにしている。神仏が人々を救う一助というべきである。

明治の復興以前から、満濃池が遊覧の対象となっていたことは、文化年間(1804 - 1818)成立の「金毘羅山名~~所~~勝図会」(注５)に次のように見えることから知られる。

さればかゝる大池なれは、四季つねにながめ有て、春の弥生は土人池見とて、小竹割子ようのものを携え、朱の氈(かも)を敷たるさまは、山つゝじの色を奪い、糸竹の秘曲は山谷にこだまして、夕陽を限りて打ち連れ帰れる。まことに山水勝地風色の名池なり。

（注）現代仮名遣いにあらためた。

江戸時代の後期において、満濃池は、文人だけではなく一般の人々が遊覧し、食事を楽しむ景勝地となっていたのである。

(注)

（１） 芳澤「嘉永七年七月満濃池決壊」『香川県立文書館紀要』第 19 号 平成 27 年

（２） 「高松松平家歴史資料」公益財団法人松平公益会所蔵　香川県立ミュージアム保管

（３） 個人所蔵、画像提供香川県立ミュージアム

（４） 満濃池土地改良区五十周年記念誌『満濃池史』 満濃池土地改良区 平成 13 年、の 113 頁に示された読みによる。

（５） 『香川叢書』第三 香川県 昭和 14 年(1939)
本書は、金毘羅大権現参詣者のための案内書で、著者石津亮澄は大坂の人で和歌国学に名高い。絵は当時、琴平近くの苗田にいた大原東野によると推定される。文化年間(1804 -

1818)に編纂されたものである。

おわりに

平安時代から明治初めにかけての資料を通じて、その間の満濃池の景観の変遷を明らかにした。

満濃池の景観の特徴として最初に注目されることは、その海と見まがうほどの広大さである。その景観は、満濃池が山間部のせき止め池であって堤体が、群を抜いて巨大なことがもたらしたものである。海のように広大な池が讃岐にあるという印象は、弘法大師空海が直接に修築に関わったことから、彼の偉業を示すものとして讃えられることで強められた。

つぎに、満濃池の景観の継続性が注目される。それは、数度の決壊にも関わらず、満濃池は、もとの姿に復興されていることである。立地上、金倉川が作り出した谷間がもっとも狭まる場所に堤体を設ける場所は限られたから、動かしようはなく、技術的な制限もあって嘉永年間の例を除いて江戸時代には同じ工法で復元されてきたのである。

最後に注目される景観は、江戸時代の文人たちが詩文で示したように、満濃池を取り巻く山々や岬状の地形が、池と一体化した風景の美しさである。

第４節　文芸作品等からみた満濃池の名所的価値の形成過程

奈良県立大学地域創造学部准教授
井原　縁

はじめに

満濃池は古代より多くの文芸作品や美術作品の題材とされ、名所として広く知られてきた。これらの作品に内包されている満濃池に対する人々の価値認識を抽出し時系列で整理した結果、そこには時代を超えて通底してみられる４つの軸があることが明らかになった。１つめはそのスケールの広大さに対する価値認識、２つめは周辺の山容と屈曲した谷に代表される固有の立地環境に対する価値認識、３つめは満濃池にまつわる伝承と史実に基づく歴史的価値の認識、４つめはその存在が周辺地域にもたらす社会的価値の認識である。ただしその内容や強度には、時代による差異がみられる。また、このような価値認識を背景に、評価される満濃池の景観も変化してきた。以下、４つの軸ごとに、その内容について詳しくみていくこととする。

１．スケールの広大さ

まず何よりも、現在に至るまで強く意識され続けてきたのが、そのスケールの広大さである。この価値認識は、古代の満濃池の情景が記された説話集『今昔物語集』において、既に明確に見て取ることができる。「池の周囲ははるかに広々としており、堤を高く巡らしている」「海のよう」「底知れぬ深さ」（以上、「巻二十 本朝 附仏法 第十一 竜王為天狗被取語」）、「池の回りは延々と遠く連なり、堤も高いので、とても池とは思われず、海などのように見えた」「対岸ははるかかなたかすかに見えるほど」「尽きることのない大小多くの魚」（以上、「巻三十一 本朝 附仏法 第二十二 讃岐国満濃池類国司語」）のように、満濃池の尋常ならざるスケールを評した表現が繰り返し登場する。かつその観点として、池面の広さに加えて堰堤の高さがあり、この両者がセットになって満濃池の広大さを語っている点が特徴である。

同様の価値認識は、元暦元年（1184）の決壊後、長期に渡り放置され耕作地と化した中世を経て、再築された近世に入ると再び立ち現れる。特に、地誌の編纂が盛んであった江戸後期には詳細かつ具体的な描写がみられ、文化年間（1804 - 1818）刊行とされる『金毘羅山名勝図会』では、「・・・池水常に湛へ池のまはりははるかに遠く堤高ければ 池とは更に見へす湖水のやうすそ見へける廣さはかなたに居る人のかすかに見へ野飼いの馬は鳥と見ゆるほとなり 水洋々として百灘のごとく 万山影を逆しまる」と記されている。さらに嘉永７年（1854）刊行の『讃岐国名勝図会』では、「当国第一の池」として、池周、水深、東西と南北の池の長さが明記され、続けて堰堤のスケールを示す諸情報（長さ、上広さ、高さ、堤根）が挙げられている。これらの記述からは、今昔物語の時代と同様、満濃池のスケールが常に堰堤のそれと共に認識されてきたことが伺える。嘉永年間（1848 - 1854）に実施された、木樋から石樋に修築する普請の様子を描いた『満濃池普請所絵図』

では、堰堤の高さが強調される構図になっており、その堤の先に対岸が見えないほどの広い池面が続いている様子が描かれている【資料８】。満濃池の歴史は、決壊と再築・修築の繰り返しだが、古代以来江戸末期まで、多少の変動はあれども、現在(32m)とあまり大差ない、ほぼ同じ高さ(約22～24m)の堰堤が築かれ続けてきたと考えられている(第６章第３節参照)。現在も当時も、これは破格のスケールである。主題ゆえの誇張を差し引いたとしても、この普請所絵図もまた、池面の広さと堰堤の高さのセットで満濃池の広大さが認識されていたことを物語る証左といえよう。その他、近世に刊行された地誌の挿絵や絵画はいずれも、高い堰堤を手前に、その先に満濃池の広大な池面が広がる構図で描かれている【資料 17】。大がかりな堰堤の再築、修築が繰り返され、その状況が絵画や文章で表現され広まった近世において、特にこのような認識はより強固なものになっていったのではないかと推測される。

資料８　満濃池御普請所絵図［嘉永年間（1848-1854)］
（香川県立ミュージアム所蔵）

さらに、江戸後期の地誌類には、満濃池の広大さを語るもうひとつの観点が明確に現れている。前掲の『讃岐国名勝図会』には、嘉永７年(1854)に起こった大地震による決壊の様子を記した箇所があり、そのなかに「僅か一合の水なれと、其水勢の厳しき事ハ埋め置し石の樋ことことく何地へ流れ出て埋れしや、数多の石の行方知らすなりしハ、池の廣大なる事思ひやるへし」、「さるによりて川下の村々はさらなり、その水池より四里ばかりなる丸亀城下に流れ行きて海に落ち入りけるとそ。・・・あな恐ろしの水勢や」という記述がみられる。古代以来、満濃池の深さや水量

資料 17　象頭山八景 満濃池遊鶴［弘化２年（1845）］（まんのう町所蔵）

の多さに関する描写は繰り返し登場するが、その描写には、単なる感嘆のみならず、人為を超えた強大な力に対する畏怖の念が見え隠れしていた。それがここではより顕在化し、満濃池に潜在する激しい水の力を、畏怖の念と共に克明に記載している。このような認識は、『今昔物語集』や中世の『志度寺縁起』に記されている龍の住む池伝承、さらに寛政 11 年(1799)『讃岐廻遊記』において、決壊の史実を、池に棲む大蛇が池の堤を突切ることになぞらえて描写していることにも通じると考えられる。満濃池のスケールの広大さは、近世まで、池面の広さ、堰堤の高さ、そして内包する水量の多さと水勢の激しさによって複合的に捉えられてきたといえよう。

近代に入り、明治 40 年(1907)『讃岐名勝栞』で紹介された「満濃池八景」のひとつ「萬濃眺望」には、近世の『金毘羅山名勝図会』『讃岐国名勝図会』の挿絵に掲載されているものと同じ短歌が選ばれている。国学者の藤井高尚が天保５年(1835)に讃岐を訪れて詠んだ、「萬濃の池　池とはいわじ　海原の　八十島かけて　見る心ちせり」という歌である。池面の広さを海に例えて高く評したこの歌が、近世・近代を通して満濃池のイメージを象徴する存在として好まれてきたことが窺える。

ただし、従来このような「池面の広さ」とセットで満濃池のスケールを捉えてきたもうひとつの観点、「堰堤の高さ」に関してはやや変化がみられる。明治３年(1870)の大規模な再築工事の後、

資料 29　讃岐写真帖［大正５年（1916)］(香川県立ミュージアム所蔵)

明治後期、昭和初期、昭和中期の計３回に及ぶ嵩上げ事業を経て、満濃池の堰堤はさらに高くなり、かつ強度と安定度を増した。結果、堰堤から望む池の面積は大幅に拡大し、より広々とした眺望が楽しめるようになったわけだが、同時に堰堤はこのような風景を愛でる「視点場」として定着していくこととなった。前掲の『讃岐国名勝図会』の本文末尾に掲載されている明治に入ってからの補筆部分には、明治初頭の再築工事の一環として、堤防の上に桜・楓・霧島つつじ・さつきなどが植えられ、村人がこの上に桟敷や机を置いて遊客を接待するといった利用がされているという旨の記載がみられる(第６章第３節参照)。結果、堰堤は池面の広さを愛でる視点場として確立し現在に至るが、その反面、堰堤自体の高さに対する人々の意識は次第に薄れていったのではないかと考えられる。事実、近代以降に生み出された満濃池を主題とする歌や絵画、絵葉書には、堰堤や周辺の丘陵ないし上空を視点場に、俯瞰で池面の一部や汀線全体を捉えたものが多い【資料 29】【資料 31】。同様の傾向は、現在刊行されているパンフレットやリーフレットにも認められる【資料 51】。

また、近代以降の満濃池は決壊することなく現在に至っており、それゆえに「内包する水量の多さと水勢の激しさ」に対する意識も、次第に薄れていったと考えられる。ただし、毎年６月に行われる「ゆる抜き」の行事が、その埋もれかけた記憶と感覚を多くの人々に呼び覚ます場として機能していることが指摘できる。この日を機に、丸亀平野では一斉に田植えが始まる。中讃地

資料 31　満濃池弘法大師銅像除幕式記念絵葉書
［昭和８年（1933)］（丸亀市立資料館所蔵）

資料 51　満濃池ガイドマップ
［平成 30 年（2018）現在］

域の田を広く潤す一大潅漑施設としての本来の機能が最も発揮される時である。豊作への神事に始まり、太鼓の合図で取水塔のハンドルが回されると、轟音と共に水煙を上げながら毎秒５トンの水が一気に流れ出していく。大正３年(1914)に取水塔が新設されたことで、巨大な木製の「ゆる(池の取水栓)」を地元の男性が大人数で抜いていた従来の仕組みから、樋門を開き取水塔から取水・送水を開始する仕組みへと変わり、その後さらにシステム化されて現在に至るが、放出時の水勢の激しさは変わらない。その凄まじさは、香川県出身の歌人、赤松景福が昭和３年(1928)刊行の『讃岐名所歌集』に掲載した短歌「眞野の池 いひを放てば 渦の音は とどろに響く 遠き里迄」からも窺い知ることができる。

満濃池のゆる抜きは初夏の風物詩になっており、受益者はもちろん、県内外から大勢の人々が見物に訪れる。近代においても大勢の人々が見物する様子が、取水塔方式に変わる前にも【写真 54】後にも【写真 85】記録されている。近・現代を通して、これら多くの人々が、従来のような畏怖というよりはむしろ満濃池がもたらす恵みへの感謝や祈りの念と共に、内包する水量の多さと水の激しさを毎年共通体験する場になっている。平成８年(1996)、環境庁(現環境省)が「全国各地で人々が地域のシンボルとして大切にし、将来に残していきたいと願っている音の聞こえる

写真 54　大正３年（1914）以前の初ゆる抜き
（満濃池土地改良区所蔵）

写真 85　昭和５年（1930）ゆる抜きの賑わい
（満濃池土地改良区所蔵）

環境＝音風景」を広く公募して選定された「残したい“日本の音風景100選”」に、「満濃池のゆるぬきとせせらぎ」が「ゆる抜きにより放出される水音が豊作を祈る人々の心に深く響き渡る」として選ばれたことは、このような意識が広く共有されている証左といえよう。平成３年(1991)に旧満濃町が樋管前の減勢工(沈殿池)北側に木道を設置したことで、人々はより間近で放水時の光景を見ることができるようになった。これによって、満濃池に内包されている水量と水勢に対する実感の度合いはさらに増したと考えられる。

２．固有の立地環境

満濃池は、丸亀平野を流下する金倉川の上流域に位置し、香川・徳島県境の讃岐山脈から北へ派生した谷の最狭部に堰堤を構築して造り出された。堰堤以外は、丘陵が堤体の役割を果たしている。池面を取り巻く地形は変化に富んでおり、堰堤より南東を望むと、広大な池面の後背には、江畑断層を境とする讃岐山脈が屹立している。一方、池面周囲の丘陵は対照的に低くなだらかで、特にシルト‐砂層で構成されているため浸食を受けやすい南岸は複雑に入り組んだ岬状になっており、硬質な砂礫層に覆われた北岸とは対照的な汀線形状になっている(第４章第１節参照)。

このような立地環境の特性に対する価値認識は、平安後期の『今昔物語集』にも確認できるが、特に顕著にみられるのは江戸時代後期、盛んに編纂された地誌類である。前掲の『金毘羅山名勝図会』には、次のような記述がみられる。

> 此池南の方大山といふよりは方多くの山々なり。右に廻りきたりて其の山と谷よりおつる水を野の方山の端のさし向いたる山内の四十間たらすの處に築き其内を池としたる故の名とて門内の池と云にはあらぬと水源は千山屏風を立たるがごとく万谷より地股を垂れ池水常に湛へ池のまはりははるかに遠く堤高ければ池とは更に見へす湖水のやうすそ見へける廣さはかなたに居る人のかすかに見へ野飼いの馬は鳥と見ゆるほとなり水洋々として百灘のごとく万山影を逆しまる松柏草森々として谷を□し雲朦朧として恒に順雨を施し万々たる灵水峩々たる岸をあらわし水鳥鯉鮒は鷺口にまい遊ふ樋矢倉は番次並ふ水流千筋に別て田圃の料とし・・・

前項で述べた通り、池面の広さと堰堤の高さでスケールの広大さを語っているが、注目すべきはその前後の記述である。池の南東奥、広い池面の後背に屹立する「大山といふよりは方多くの山々」、「千山屏風を立たるがごとく」、そして池の周囲は「万谷より地股を垂れ」「峩々(がが)たる岸をあらわし」と、立地環境の地形的特性が詳細に書き込まれている。ここでは、満濃池という存在を周囲の自然環境とのつながりのなかで意識し、池の在る場所全体を一つのまとまりとして捉えている視点が窺える。挿絵は、まさにこのような捉え方を具現化したものとなっており、手前に高い堰堤があり、変化に富む池岸を有する広々とした池面、そしてその先に連なる讃岐山脈の山々を全体として捉えた構図で描かれている【資料16】。続く『讃岐国名勝図会』の挿絵も

基本的には同様の構図で描かれており、その讃には「群山屏立」「九十九湾」の文言がみられる【資料 19】。『金毘羅山名勝図会』の挿絵と比べると池面後背の山々が名称を添えてより精緻に描かれている。かつ、手前の堰堤もより引いた目線から描かれており、右手奥の余水吐から流れ出る激しい水流の精緻な描写とも相俟って、堰堤の高さが印象的に描かれている点も特徴的である。

他に江戸時代の後期に刊行された地誌の挿絵や絵図もまた、視野領域は一様ではないにせよ、必ず手前に高い堰堤が描かれ、その先に広大な池面が周囲をとりまく丘陵や山々と共に描かれている、という点では共通している。堰堤の上には池之宮である神野神社が描かれており、また余水吐から流れ出る激しい水の流れを印象的に描いている絵も多い。人々の知恵と労苦の産物である高い堰堤によって山間の谷で水の流れをせき止め生み出された広大な池面が、周囲の自然環境と一体となっている姿が、満濃池の象徴的景観として流布し、定着していたことが窺える。

資料 16　金毘羅山名勝図会 写本（個人所蔵、画像提供香川県立ミュージアム）

その後近代に入ると、立地する周囲の自然環境とのつながりのなかで満濃池の存在を全体的に捉える視点は薄れていき、意図的に特定の視角で切り取った景観や、前項で述べたように堰堤ないしその上部からの俯瞰で池面の広さと形状に照射した景観が、写真や絵画を介し広まっていく。特に、大正３年(1914)に竣工した赤レンガ取水塔を中心にその周囲の池面と池岸にフォーカスを当て、奥に山々が背景として一部写り込む構図は、前掲の『讃岐写真帖』掲載の写真【資料 29】や各種絵葉書【資料 32】に好んで用いられている。この構図は、第三次嵩上げに伴い昭和 30 年(1955)にコンクリート製の取水塔に変わっても引き続き人気であり、平成２年(1990)から平成 14 年(2002)にかけて描かれた琴平町在住の画家・小西嘉純の油彩画(７点)は、その大半が、視点場

資料 19　讃岐国名勝図会 萬濃池 池宮［嘉永 7 年（1854)］（国立公文書館所蔵）

資料 32　讃岐琴平名所絵葉書［昭和初期］（香川県立ミュージアム所蔵）

資料 52　小西嘉純 油彩「満濃池」［平成 14 年（2002）］（町立かりん会館所蔵）

の微妙な遠近差はあれども、同様の構図で描かれている【資料 52】。このように、近代的土木構造物や、池岸の特徴的な形状といった個別の要素に焦点を当てた景観の切り取りがなされる半面、この場所を成り立たせている基底を意識しつつ、周囲の自然環境とのつながりのなかで満濃池を全体的に捉える視点はやや薄れていったのではないかと考えられる。

３．歴史的価値および社会的価値への認識

満濃池には、古より龍に纏わる伝承が付随している。『今昔物語集』には龍の棲む池として、また中世の『志度寺縁起』には、蛇になった志度の猟師当願の住む池として語られている。同じく『今昔物語集』には、弘法大師空海により創建されたという説話も記されている。近世の地誌類には、この２つの伝承・説話を下敷きに、以後満濃池に繰り返されてきた決壊と再築・修築の歴史、特に寛永年間(1624 - 1645)の西嶋八兵衛による再築の史実が記載されている。例えば寛政 11 年(1799)『讃岐廻遊記』には「弘法大師の築給ふ故、法の池ともいふ」としたうえで、志度寺縁起を引きつつ、大蛇が目が見えなくなったために堤を突切り、しばし荒廃にまかせられていたが、寛永になり西嶋八兵衛が再築した旨の記載がされている。弘化４年(1847)刊行の『金毘羅参詣名所図会』には、今昔物語を引きつつ空海の築堤、龍の棲む池としての伝承が述べられたうえで、

「後世修補して」現在の状況に復旧したという史実が記されている。さらに嘉永７年(1854)刊行の『讃岐国名勝図絵』においても同様に、空海の築堤の説話と、池に棲む大蛇が海に移る際に堤が壊れたという伝承が記されている。そのうえで、元暦の大洪水による決壊後長らく村と化していたが、寛永に西嶋八兵衛により再築が行われたこと、またそれ以後の堰堤修築の繰返しの史実に関する詳細な記述がなされている。

満濃池の歴史的価値は、近代以降も主にこの３つの観点、すなわち龍の棲む池の伝承、弘法大師築堤の説話、決壊と再築・修築の繰り返しの史実から語られ続けている。昭和５年(1930)刊行の『古今讃岐名勝図絵』では、近世において語られてきたこの３点の延長上に、弘仁９年(818)の堤の決壊から、安政元年(1854)の決壊、そして明治３年(1870)の再築までの一連の決壊・修復の繰り返しについて書かれている。また、弘法大師空海築堤の説話は、大師信仰に支えられ根付いてきたが、特に昭和７年(1932)から９年(1934)にかけて「空海誕生千百年祭」の記念事業が実施されたことに伴い、よりいっそう強く意識されるようになったと考えられる。この事業は、堰堤左岸の丘陵に大師ゆかりの神野寺を再興し、その境内に池面を俯瞰する大師像を建立するものであった。神野寺は、近世の地誌類には、弘仁 12 年(821)弘法大師の築堤に伴い創建されたという由来と、天正 12 年(1584)に長宗我部元親に焼き討ちにあったことが記され、挿絵に現在よりも南西に離れた位置に「神野寺跡」として記されている。この事業に併せて記念絵葉書も作られており、その中身は、神野寺が再興された堰堤左岸丘陵からの俯瞰、上空からの俯瞰、そして大使像にフォーカスした写真で構成されている。東京出身の歌人吉井勇は、記念事業竣工後の昭和 11 年(1936)に満濃池を訪れ、「水ならて 慈悲のこころを たたへたり 大師の池は ありかたきかも」という短歌を読んでいる。この歌は歌碑となり、昭和 59 年(1984)、満濃池土地改良区の手で堤防上に建立された。さらに、毎年田植えの時期に行われる「ゆる抜き」は、神野寺に詣でて豊作祈願の神事を行うことから始まる。このような弘法大師に対する直接あるいは間接的な顕彰の繰り返しによって、特に大師築堤の説話は、満濃池と強く結びつきながら現在に受け継がれているといえる。

以上のような歴史的価値と共に、地域における社会的価値もまた、時代を超えて語り継がれてきた。古くは『今昔物語集』「巻三十一 本朝 附仏法 第二十二 讃岐国満濃池類国司語」に、築造して長い間崩れなかったので旱魃の時でも多くの者がこの池のおかげで助かった旨の記載が認められる。満濃池の潅漑施設としての本来の機能に照射したこのような記述内容は、近世の地誌類において明確に確認することができる。『金毘羅山名勝図会』では「五十余ヶ村に分散して田料よく熟實しめて国豊の水源親池なりといひつたえたり」、『讃岐国名勝図絵』では池と堰堤のスケールを示す諸情報に続けて「漑田三万五千八百十石斗」と、影響の大きさを示す具体の数値を挙げて潅漑面積の広さが語られている。近代に入ると、同様の記述はより頻繁にみられるようになる。例えば大正５年(1916)刊行の『讃岐写真帖』では「讃岐第一の池にして周回三里一市十六町村の田に潅漑す」、昭和５年(1930)年刊行の『古今讃岐名勝図絵』では「神野村にあり周囲二里二十五丁面積八十一町 神野七箇吉野の三ヶ村に跨り周囲三里六町水面百町六反歩を占め一市十六ヶ町

村三千五百町歩餘の田地に灌漑せる縣下最大の溜池なり」と、池の広大さと同時に潅漑面積の広大さが示され、この観点から満濃池の社会的価値が強調されている。さらに先述した年中行事のゆる抜きは、近代以前から行われているといわれており、現在までの長きに渡り、多くの人々に定期的に潅漑施設としての満濃池を意識させ続ける場としても機能してきたことが指摘できる【写真 86】。

写真 86　ゆる抜きを見物する人々

また、満濃池の社会的価値は、このような広範な水田を潤す一大潅漑施設としての観点に加え、観光地という観点からも認識されてきた。この認識が初めて明確に読み取れるのは、文化年間(1804 - 1818)刊行の『金毘羅山名勝図会』における以下の記述である。

> さればかゝる大池なれは　四季つねにながめ有て　春の弥生は土人池見とて小竹割子ようのものを携え　朱の氈を敷たるさまは　山つゝじの色を奪い　糸竹の秘曲は山谷にこだまして夕陽を限りて打ち連れ帰れる。まことに山水勝地風色の名池なり。

さらに、明治に入って補筆された『讃岐国名勝図会』の部分には、明治初頭の再築以降の人々の利用状況が次のように記されている。

> ここにおいて遠近の諸人、池遊覧せんとて、日ごとに弁当・割籠を携え、ここにいたる者の絶え間なかりしかば、堤の上ニ桟敷・机木を設けて遊客を憩しめ、酒肴菓を商う者もあり。四時村民の潤いとなせるは、これも万民を救い給う一助なるべし。

これらの記述から、満濃池は遅くとも江戸の後期からは人々の行楽地として機能しており、四季折々の眺望を座して愛でる文化が定着していたことが窺える。『金毘羅山名勝図会』に記されている、当時人々が「朱の氈を敷」き「池見」を行った具体の場所は不明だが、明治以降は、第１項で述べた通り、堰堤の上が眺望を愛でる基本の視点場となっていった。さらに、現代においては、堤防上やその周辺、さらに樋門・放水路付近一帯に休憩所や親水施設の設置等の公共整備が重ねられ、観光地としての認識はより強まっているといえよう。

４．総括

以上みてきたように、盛んに編纂された地誌類を介し「名所」として広く知られるようになった近世後期の満濃池は、①池面の広さ、堰堤の高さ、そして内包する水量の多さと水勢の激しさによって複合的に捉えるスケールの広大さ、②満濃池という存在を周囲の自然環境とのつながりのなかで意識し、池の在る場所全体を一つのまとまりとして捉える固有の立地環境、③龍の棲む池の伝承、弘法大師築堤の説話、決壊と再築・修築の繰り返しの史実の３点で捉える歴史的価値、④広範な水田を潤す一大潅漑施設として、かつ四季折々の眺めを愛でる行楽地（観光地）として捉える社会的価値の４つの軸から、その価値が総合的に捉えられていたことが明らかになった。これらの内容は、いずれも古代に端を発し、時を経るなかで次第に確立されていったものであり、４つの軸は現在も継承されている。ただし、近代以降その内実には変化がみられ、①における堰堤の高さに対する意識や、②における満濃池の立地を周囲の自然環境とのつながりのなかで全体的に捉える視点はやや薄れてきており、この価値認識の変化と、人々に評価される満濃池の景観の変化が連動していることも明らかになった。同時に、「ゆる抜き」という伝統行事が、本質的に移ろいやすい人々の価値認識を定期的に呼び覚まし、つないでいく重要な役割を果たしていることも確認できた。

「名勝」として評価し、その視座から保全・活用していくということは、古来満濃池に注がれてきた人々の豊かな価値認識を現代に呼び覚まし、未来につないでいく手段がさらに強化されることを意味しており、その点からも非常に意義深いことだと最後に付言しておきたい。

第７章　総括

第１節

１．沿革

満濃池は香川県中部の丸亀平野を讃岐山脈より派生し北西に向かって流下する金倉川の上流域に所在するため池である。丸亀平野は土器川と金倉川によって形成された沖積平野であり、主に古代より条里地割による大規模な耕地開発が行われてきたが、降雨や河川の恒常的な流量が少ないなどの当地方の気候・地理的条件を克服し安定した潅漑用水を確保するために多くのため池が築造されてきた。満濃池はこれらを代表する広大なため池である。

満濃池は「讃岐国萬濃池後碑文」（寛仁４年(1020)）によると、大宝年間(701 - 704)に讃岐国守道守朝臣により築造されたが､弘仁９年(818)には破堤し３年を要して弘仁 12 年(821)に再築したとする。弘仁 12 年（821）の再築は、弘法大師空海が別当として指揮したことは著名である(「日本紀略」)。『今昔物語集』(12 世紀前半頃)は「堤が高く海のように広くみえた」とするなど、古代の満濃池の様子をうかがい知ることができる。

弘仁 12 年(821)の再築後は仁寿元年(851)や元暦元年(1184)に相次いで破堤したことが伝えられており、その後の中世には嘉元４年(1306)に後宇多上皇院分国の公領として、永正 17 年(1520)には賀茂別雷神社(上鴨社)の社領として確認できることから、長期間にわたって耕作地と化していたと考えられる。

江戸時代初期になると、生駒藩家臣西嶋八兵衛は、旱魃対策や石高増を目的として領内の治水事業を推し進め、寛永５～８年(1628～1631)に満濃池を再築する。寛永 16 年(1639)に満濃池は、近隣の五条村、榎井村、苗田村はとともに幕府領に封入され、苗田村に代官所が置かれ管理を担った。木製の樋管は約 30 年毎の交換が必要であり、寛永８年(1631)より嘉永６年(1853)の間に 19 回の普請が行われるなど水掛かり村々(潅漑受益の村々)をはじめとした多くの課役で維持された。嘉永２年(1849)から嘉永６年(1853)の普請は、木樋を石樋へ交換する大掛かりな改修であったが、嘉永７年(1854)に地震の影響によりあえなく破堤した。

嘉永７年(1854)の破堤以降、那珂郡金蔵寺村の豪商の和泉虎太郎や榎井村庄屋であり池御料総代の長谷川佐太郎らが尽力し、木製樋管から岩盤を刳り貫く「石穴」への改良が行われ明治３年(1870)に再築をみる。その後、近代土工制度の成立とともに満濃池の管理は水掛かり(潅漑受益地の各村)が担うことになり、明治12年(1879)に「満濃池水利土功会」が設立された。明治23年(1890)の「水利組合条例」の制定に伴い、明治25年(1892)には「満濃池普通水利組合」(現満濃池土地改良区)が設立され、同組合は明治38年(1905)から明治39年(1906)に築堤の第一次嵩上げ事業、大正２年(1913)から大正３年(1914)に取水塔設置事業を行った。更に、昭和２年(1927)から昭和５年

(1930)にかけて第二次嵩上げ事業を行い、昭和15年(1940)から昭和33年(1958)には第三次の築堤の嵩上げや取水塔、余水吐改修等の大規模な整備事業が実施された結果、貯水容量は第二次の約２倍の1,540万m^3、満水面積は約138.5haとなり、潅漑用では国内最大規模のため池として現在に至っている。

２．満濃池の名勝地としての構成

満濃池の風致景観は、築堤を中心として広大な水面と南東への眺望から構成されている。築堤は、讃岐山脈から北へ派生する開析谷の最狭部を利した一か所に築造され、現在の築堤は昭和33年に竣工した第三次嵩上げ工事によるもので、緩やかな曲線を描くアーチ式の土堰堤(アースダム)であり、提高32m、堤長155.8m、天端幅20mを測る。築堤の付属施設には、左岸側の取水塔と樋門(登録有形文化財(建造物)平成12年２月登録)、右岸側には余水吐、余水吐放水工がある。築堤上及び周辺には、「真野池記」や「松坡長谷川翁功徳之碑」をはじめとした明治３年の再築以降の多くの顕彰碑が建立されている。

築堤を挟み両岸の丘陵上には、弘法大師空海創建の由緒をもつ神野寺境内(左岸側上)、満濃池の守護神である神野神社(右岸側上)が対峙し、その中央の水面にはかつての築堤の右岸側の取り付きの丘陵のなごりであり弘法大師空海の護摩焚きの場の伝承をもつ「護摩壇岩」がある。毎年６月の「ゆる抜き」と呼ばれる放水行事は、関係者の神野神社と神野寺での豊水祈願を行った後に取水塔で開門が行われる。

このように築堤及び周辺には、取水塔などの付属施設以外にも近代以降の履歴を示す顕彰碑などの記念物、神野神社や神野寺など精神性を示す施設がまとまっており、この地が枢要なる場所であることを示している。

水面は、現状で138.5haを測る広大なものであり近代以降の３次にわたる築堤の嵩上げ事業で拡大しているが、主として奥行きの延伸にとどまり、近世以降における築堤付近の水面の風致景観に大幅な変化はみられない。

築堤から南東を望むと、広大な水面の左右になだらかな丘陵地があり、遠景には大川山などの讃岐山脈が広がる。池岸の形状は地質条件により北岸と南岸で異なっている。北岸は硬化した砂礫層のため緩やかな曲線状、南岸は浸食作用を受け易いシルト‐砂層であるために複雑に入り組む。遠景の讃岐山脈は、断層の影響により水面周囲のなだらかな丘陵地に対して直線的な地形境界をもって急峻に聳え立つ。その山容はあたかも屏風絵のような背景を成して奥行きを強調する。このような風致景観の観賞の認識は、『金毘羅山名勝図会』(文化年間(1804～1818))と『讃岐国名勝図会』(幕末～明治初め)にみることができる。これらでは、由緒を示す古代以来の事跡を語るとともに、挿絵や詩文において巨大な築堤と広大な水面を周囲の自然環境とのつながりのなかで捉え「山水勝地風色の名池」として普及した。また、築堤上での行楽の様子やサクラ、ツツジなどの植栽を記しており、同所が当時の風致景観の観賞における重要な視点場であったことを示している。

また、近代以降には、赤レンガ取水塔(大正３年(1914))をはじめ築堤及び周辺の土木構造物が巨大な築堤と広大な水面とともに絵葉書などに盛んに取り上げられ満濃池を代表する風景として定着した。近年においては、毎年６月の「ゆる抜き」では、樋門から溢れ出る放水の様子を多くの来訪者が見守るなど、満濃池を代表とする一大行事となっている。

３．満濃池の名勝としての価値

満濃池は、大宝年間(701～704)の築造後、中世の荒廃期を挟み破堤と再築を繰り返して現在まで継承されてきたため池である。弘仁 12 年(821)の弘法大師空海、寛永８年(1631)の西嶋八兵衛、明治３年(1870)の和泉虎太郎や長谷川佐太郎の再築は、特筆すべき事跡として多くの史資料で絶えず語られてきたものである。現在の高さ 32mを測る巨大な築堤は、緩やかな曲線を描くアーチ式の土堰堤であり 138.5ha に及ぶ広大な水面を造り出している。これらの雄大さは古代の認識を基礎として、再築がなされた近世、近代を通じて現代まで発展的に継承されてきたものであり、記念物としての満濃池の存在感を揺るぎないものとしている。

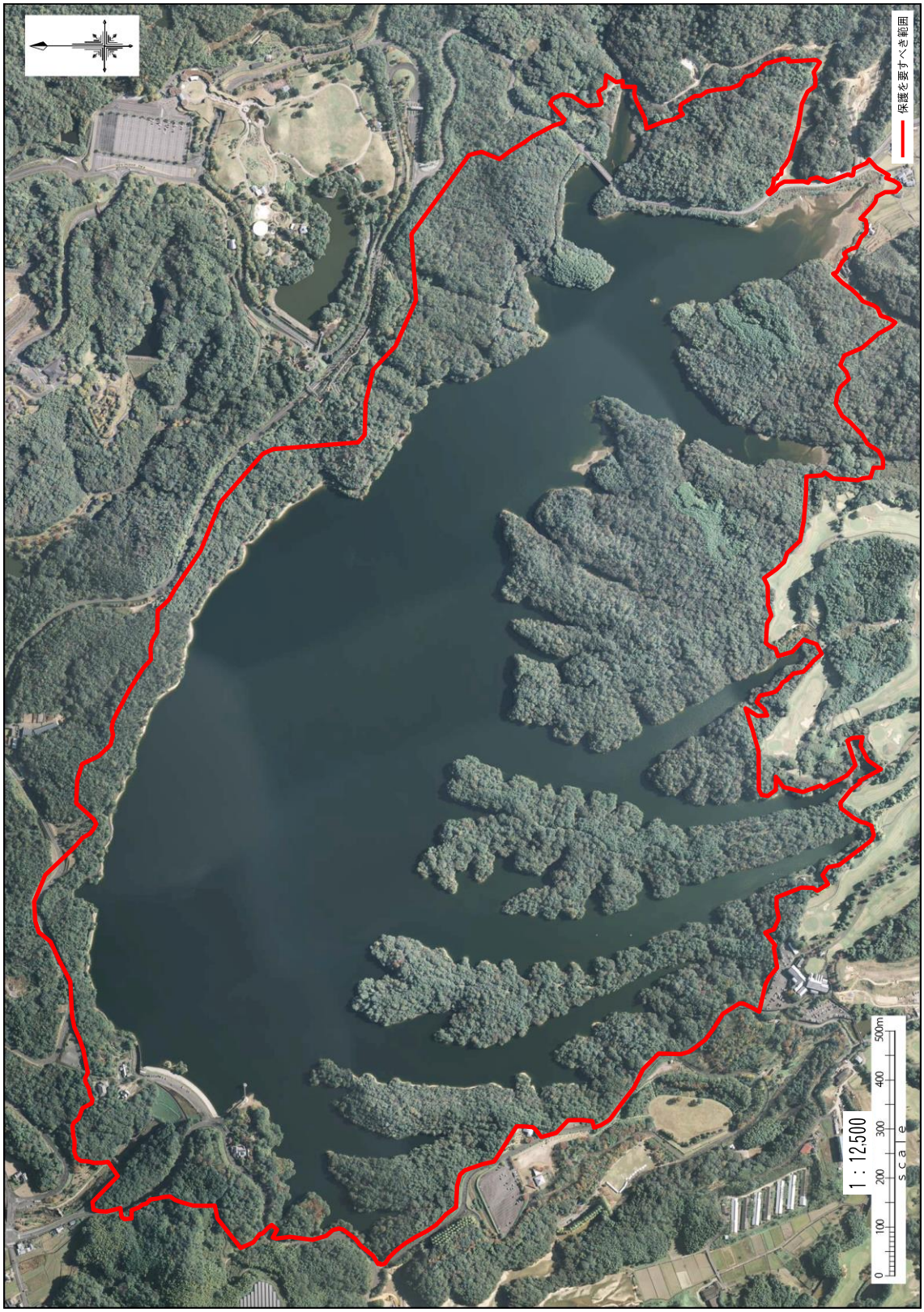
築堤上から南東への眺望は、広大な水面を中心として、北岸の緩やかな池岸、南岸の複雑に入り組んだ池岸、なだらかな丘陵の遠景に聳え立つ讃岐山脈の山容が一体化する幽邃な風致景観を成している。この風致景観の観賞は、由緒を示す多くの事跡とともに近世地誌の挿絵や詩文において定形化し名所として喧伝されたものである。近代以降は取水塔や樋門などの付属施設がその対象に加わるが、巨大な築堤により生み出された広大な水面は一貫して評価され続けている。

以上のように、満濃池は古代以来の多くの事跡に裏付けられた歴史性を背景として、巨大な築堤によって生じた広大な水面が周辺の自然環境と一体となる優れた風致景観を成す名勝地として傑出している。

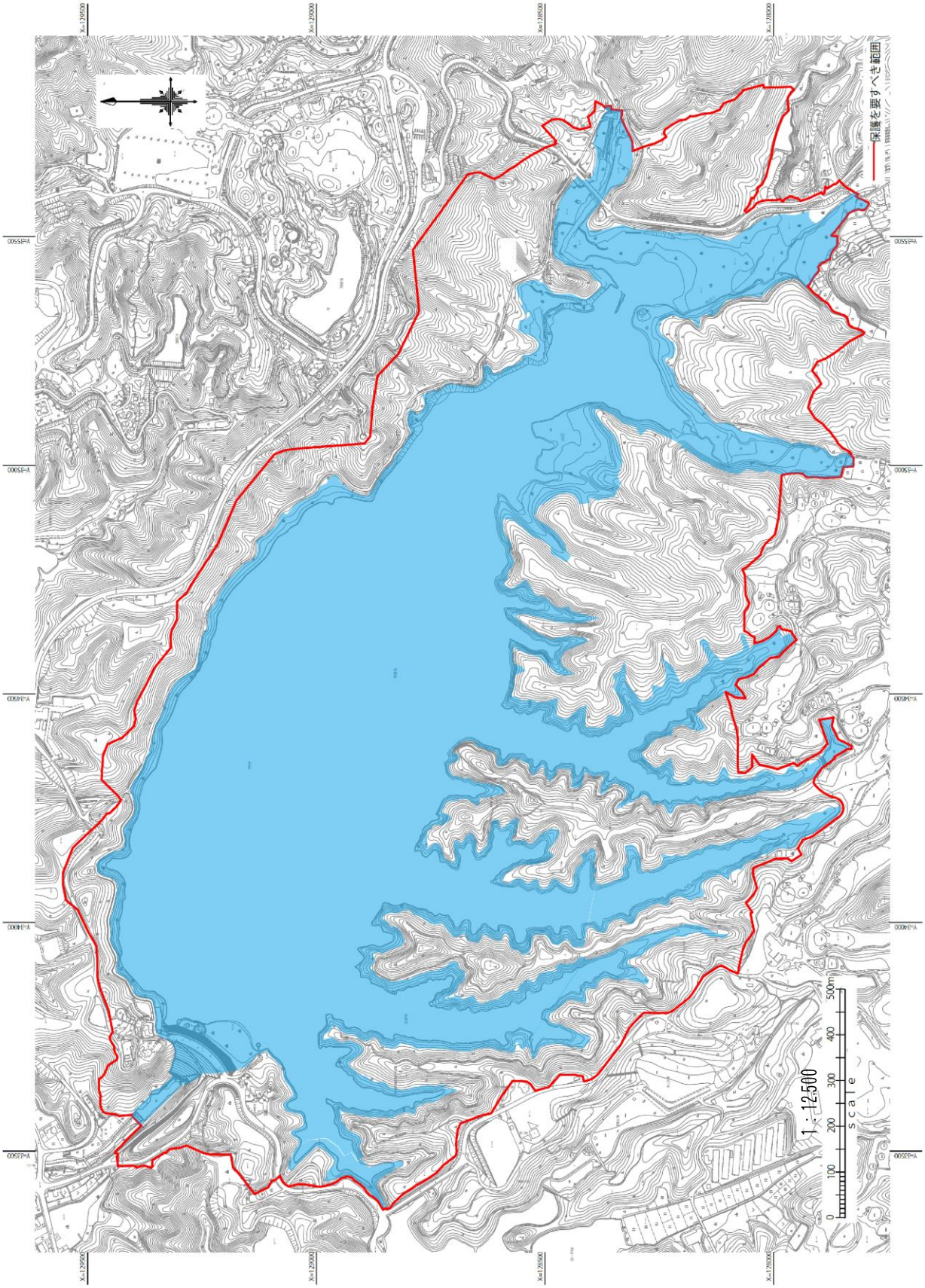
４．名勝として保護を要すべき範囲

満濃池の風致景観の保護に必要な範囲は、上記価値に基づき築堤及び周辺を中心として水面並びに周囲の丘陵を基本とした地域を設定することが望ましい。遠景の大川山などの讃岐山脈の山容は、眺望の点において留意すべきと考えられるが、築堤や水面より離れた位置にあり、広域にわたるものであることから、名勝として保護を要すべき最小限の範囲とは区別した上で何らかの保全策を検討すべきである。

以上の保護を要すべき範囲については、【第 22･23 図】に示すとおりとする。



第22図　保護を要すべき範囲



第23図　保護を要すべき範囲

資　料　編

古代							
分類	資料番号	資料名	著者	作成年・出版年	備考	所蔵	引用文献
文芸	4	今昔物語集 巻二十 本朝 附仏法 第十一「龍王、天狗のために取られたる語」 今昔物語集 巻三十一 本朝 附雑事 第二十二「讃岐國満農の池をくずしゝ國司の語」	不詳	平安時代後期	–	京都大学付属図書館	新編日本古典文学全集37 今昔物語集③ 巻20～26(小学館 2001) 新編日本古典文学全集38 今昔物語集④ 巻27～31(小学館 2002)
その他	2	日本紀略 弘仁十二年五月二十七日条	不詳	平安時代	-	宮内庁書陵部図書課図書寮文庫	新訂増補国史大系
	3	萬濃池後碑文	不詳	鎌倉時代前期、建仁元年(1201)	東寺観智院聖教文書のうち弘法大師行化記より	東寺	続郡書類従 第三十三輯上 雑部

中世							
分類	資料番号	資料名	著者・作者	作成年・出版年	備考	所蔵	引用文献
文芸	5	志度寺縁起 当願暮当之縁起	兼空	鎌倉時代末期～南北朝時代	首より下が蛇となってしまった当願が、暮当に「深き水の畔」に連れていってくれるように頼み、暮当は満濃池に連れて行く物語。	志度寺	新編香川叢書文藝篇(香川県教育委員会 1981)
絵画	6	絹本著色志度寺縁起 白杖童子縁起 当願暮当之縁起	不詳	鎌倉時代末期～南北朝時代	-	志度寺	画像提供:香川県教育委員会
その他	1	善通寺一円保差図(善通寺伽藍幷寺領絵図)	不詳	鎌倉時代末期、徳治2年(1307)	国指定重要文化財	善通寺	-
	44	賀茂別雷神社文書	-	室町時代、長録2年(1458)、永正17年(1520)	-	賀茂別雷神社	賀茂別雷神社文書第一 史料纂集古文書編(続群書類従完成会 昭和63年)、東京大学史料編纂所所蔵「賀茂別雷神社文書」写真帳により一部修正

前頁写真「満濃池と星空」 撮影：松永希

近世							
分類	資料番号	資料名	作者	作成年・出版年	備考	所蔵	引用文献
絵画	8	満濃池御普請所絵図	合葉文山(画)	江戸時代末期、嘉永年間(1848-1854)	法量縦42.5㎝、横60.5㎝。	香川県立ミュージアム	画像提供:香川県立ミュージアム
			友部方升(詩歌)		「治まれる 御代は仕ふる 人さはに まけのまにまの 池にたつみゆ」		
			友安三冬(詩歌)		「みくり縄 くるしげもなし 万のゝ池 のいけるかひある 御代にたつ民」		
			藤井高尚(詩歌)		「まのゝ池 いけとはいはじ 海原を 八十島かけて 見るこゝちせり」		
			奈良松荘(詩歌)		「萬濃の池の樋を木もて造れるが朽ちやすしとて近きころ石にかへんと司々たばかりけるがごとし嘉永六年といふとしの春つくりかへぬときいゝて」 「常盤とし なせるいさをは池水の いひ出つるや 世々にたたへむ」		
			治濟(詩歌)		「萬代を ふるともまのの 池水は あせじとぞおもふ 常盤かきはに」		
			日柳燕石(詩歌)		「満嶺翠氣平濛々池在四山環中知是 蚊龍来間捲水両腥 九十九渓風環下僥在」		
	14	象頭山十二景圖二巻 十二 萬農曲流	狩野常眞	江戸時代前期、万治年間(1658-1660)	法量縦は甲・乙巻ともに41.5㎝、横は甲巻519.6㎝、乙巻519.0㎝。象頭山と門前の様子を絵図に表わしたものとしては最も古い。	金刀比羅宮	画像提供:琴平町
	15	象頭山十二景圖十二幅 十二 萬農曲流	狩野時信(画)	江戸時代前期、延宝元年(1673)以降	法量縦120.6㎝、横51.2㎝。		画像提供:琴平町
			林春常(詩文)		「清泒泛喬岑 長流旱則霖 弘仁餘帝澤 一歃當千金」		
			上左兵衛(書)		-		
	17	象頭山八景 満濃池遊鶴	長山孔直(画)	江戸時代末期、弘化2年(1845)	-	まんのう町	-
			宥瑜(詩)		「千代よはう 夢きこゆなり まのゝ池乃汀にあたる 田鶴乃むら島」 「百里鏡光池水開千峯黛色入波摧鶴群忽自雲間下拾似傳書渡海来」		

近世							
分類	資料番号	資料名	著者・出版社・作者	作成年・出版年	備考	所蔵	引用文献
地誌	11	玉藻集	小西可春(柳原小一郎)	江戸時代前期、延宝5年(1677)	-	-	香川叢書 第三(香川県 昭和14年)
	12 16	金毘羅山名勝図会	石津亮澄(著)	江戸時代後期、文化年間(1804-1818)	-	写本鎌田共済会郷土博物館、写本個人	香川叢書 第三(香川県 昭和14年) 写本画像提供:香川県立ミュージアム
			大原東野(画)				
			琴陵宥怡(画)				
			藤原為家(詩歌)				
			藤井高尚(詩歌)				
			琴陵宥怡(詩文)				
	13	讃岐廻遊記	進藤政量	江戸時代後期、寛政11年(1799)	-	-	香川叢書 第三(香川県 昭和14年)
	18	金毘羅参詣名所図会	暁鐘成(著)	江戸時代末期、弘化4年(1847)	象頭山十二景「萬濃曲流」、今昔物語集「龍王、天狗の為に取られらる語」、象頭山八景「満濃池遊鶴」を記載する。	香川県立図書館	画像提供:香川県立図書館
			浦川公佐(挿絵)				
	19 43	讃岐国名勝図会 萬濃池 池宮	梶原藍渠・梶原藍水(著)	江戸時代末期、嘉永7年(1854)	-	国立公文書館	画像提供:国立公文書館
			松岡調(画)				
			藤井高尚(詩歌)		-		
			幸田惟親(詩文)		-		
			酒部正敬(詩歌)		-		
			藤春嶺(詩文)		-		
	20	象頭山參詣道紀州加田ヨリ讃岐廻并播磨名勝附	金毘羅、美玉堂	江戸時代末期	縦35.5cm、横47.0cm。	金刀比羅宮	画像提供:琴平町
その他	7 47	満濃池営築図	-	江戸時代前期、寛永年間(1624-1645)	-	原図個人、摸写図鎌田共済会郷土博物館所蔵	画像提供:香川県立ミュージアム 摸写図画像提供:鎌田共済会郷土博物館
	9	満濃池絵図 天保八丁酉年	-	江戸時代後期、天保8年(1837)	-	香川県立ミュージアム	画像提供:香川県立ミュージアム
	10	讃州那珂郡分間画図	-	江戸時代中期	-	香川県立ミュージアム	画像提供:香川県立ミュージアム
	45	讃岐国絵図	-	江戸時代初期、慶長年間(1596-1615)末	-	高松市歴史資料館	画像提供:高松市歴史資料館
	46 49	讃岐国絵図	-	江戸時代前期、寛永10年(1633)	-	丸亀市立資料館	画像提供:丸亀市立資料館
	48	矢原家文書	-	江戸時代前期、慶長6年(1601)、寛永12年(1635)	-	-	新編 香川叢書 史料篇二(香川県教育委員会 昭和56年(1981))
	49	国絵図に見る神内池と三谷池	-	江戸時代前期、寛永10年(1633)	-	丸亀市立資料館(讃岐国絵図)	近世絵図地図資料研究会編 近世絵図地図資料集成・第Ⅰ期(第16巻)正保国絵図集成・西日本篇(科学書院 平成24年)
	49 50	天保国絵図 讃岐国図	-	江戸時代末期、天保9年(1838)	-	国立公文書館	-

近代							
分類	資料番号	資料名	編著者・作者・出版元	作成年・出版年	備考	所蔵	引用文献
文芸	26	讃岐名勝栞	矢原理平(編) 日柳活版所(出版)	明治40年(1907)	-	国立国会図書館	国立国会図書館デジタルコレクション
			梅渓通治(詩歌)		-		
			梶原景謙(詩歌)		-		
			藤井高尚(詩歌)		-		
			松平頼續(詩歌)		-		
			松岡調(詩歌)		-		
			佐伯旭雅(詩歌)		-		
			森寛斉(詩歌)		-		
			矢原正照(詩歌・詩文)		詩文読み下し「千秋来歴万濃池 野と為り原と為る嘉永の時、百姓心を傷め将に廿戴天盤竇して不朽に垂る」		
	27	柿村書屋詩集	赤松景福	大正15年(1926)	-	-	-
	28	吉井勇の詩歌「満濃池に遊びて」	吉井 勇	昭和11年(1936)	-	山西家	-
絵葉書写真	29	讃岐写真帖	三好今三郎	大正5年(1916)	-	香川県立ミュージアム	画像提供:香川県立ミュージアム
	30	香川県営満濃池竣工記念絵葉書	-	昭和2年(1927)	-	丸亀市立資料館	画像提供:丸亀市立資料館
	31	満濃池弘法大師銅像除幕記念絵葉書	満濃大師會	昭和8年(1933)	-	丸亀市立資料館	画像提供:丸亀市立資料館
	32	讃岐琴平名所絵葉書	-	昭和初期	-	香川県立ミュージアム	画像提供:香川県立ミュージアム
	33	讃岐二百景	-	昭和初期か	-	丸亀市立資料館	画像提供:丸亀市立資料館
	34	金刀比羅宮御境内及讃岐名所圖繪	小野秀八	昭和2年(1927)	-	香川県立ミュージアム	画像提供:香川県立ミュージアム
	35	琴平急行沿線名勝鳥瞰図	-	昭和5年(1930)以降	-	香川県立ミュージアム	画像提供:香川県立ミュージアム
その他	21	真野池記(石碑)	矢原正敬(撰文・題額)、矢原正照(染筆・建立)	明治3年(1870)以降	-	-	讃岐農林業の石碑(香川県 1976)
	22	松坡長谷川翁功徳之碑(石碑)	山縣有朋(題字揮毫)、品川弥二郎(碑文選者)、衣笠豪谷(揮毫)	昭和6年(1931)	-	-	讃岐農林業の石碑(香川県 1976)
	23	満濃池之図	-	明治3年(1870)	-	香川県立ミュージアム	画像提供:香川県立ミュージアム
	24	満濃池水掛村々之図	-	明治3年(1870)	-	香川県立ミュージアム	画像提供:香川県立ミュージアム
	25	讃岐国那珂郡満濃池近郷御料私領絵図	-	嘉永7年(1854)以降、明治2年(1869)以前	-	個人	画像提供:香川県立ミュージアム
	41	梶原泉太郎讃岐志幷同国名勝図絵献納ヲ賞シ金円下賜 太政類典・外編・明治四年-明治七年・官規・賞典恩典	-	明治4年(1871)～明治7年(1874)	-	国立公文書館	国立公文書館デジタルアーカイブ
	42	名東県庁蔵西讃府志外一部士族梶原泉太郎蔵讃岐志外一部献納申立並賞金達 公文録・明治六年・第二百四十七巻・明治六年十二月・諸県伺(二)	-	明治6年(1875)	-	国立公文書館	国立公文書館デジタルアーカイブ

現代							
分類	資料番号	資料名	作者・選定元・出版元	作成年・出版年	備考	所蔵	引用文献
絵画	52	油彩「満濃池」	小西嘉純	平成14年	小西嘉純［大正9年(1920)-平成16年(2004)］琴平町の洋画家。昭和23年、創造美術協会展、行動美術協会で入賞。行動美術協会会友。香川県展審査員。香川県教育文化功労者。「ビルマの絵かきさん」として人々に親しまれた。晩年は郷土の風景をテーマとした作品を製作。満濃池を描いた作品が5点、香川県立ミュージアムに所蔵。また、満濃池土地改良区に1点、まんのう町かりん会館に1点所蔵。	町立かりん会館	-
選定	36	四国新聞 昭和43年10月18日付 新さぬき百景	四国新聞社	昭和43年(1968)	-	四国新聞社	記事提供:四国新聞社
	37	残したい“日本の音風景100選”「満濃池のゆるぬきとせせらぎ」	環境省	平成8年	-	-	-
	38	ダム湖百選	一般財団法人水源地環境センター	平成17年	-	満濃池土地改良区	-
	39	地域活性化に役立つ近代化産業遺産	経済産業省	平成21年	-	満濃池土地改良区	-
	40	世界かんがい施設遺産	国際かんがい排水委員会	平成28年	-	満濃池土地改良区	-
その他	51	満濃池ガイドマップ	NPO法人まんのう池コイネット	平成30年	-	NPO法人まんのう池コイネット	-

編・著者	論考名	書名	発行・所蔵	初出
後白河法皇	－	梁塵秘抄	－	平安時代末期
二条為遠・ 二条為重	－	新後拾遺和歌集	－	1384(至徳元)
寂本	－	四国遍礼霊場記	－	1689
中山城山	－	全讃史	相原謙益	1890
川合松平	－	国歌大観 歌集部	－	1901(明治34)
増田休意・ 梶原猪之松	－	翁嫗夜話	香川新報社	1915(大正4)
梶原猪之松	－	讃岐人名辞書	高松製版印刷所	1928(昭和3)
－	－	讃岐名所歌集	赤松景福	1930(昭和3)
塙保己一ほか	弘法大師行化記	続群書類従 第八輯	続群書類従完成会	1933(昭和8)
塙保己一ほか	萬濃池後碑文	続群書類従 第三十三輯 雑部	続群書類従完成会	1958(昭和33)
－	－	新訂増補国史大系	吉川弘文館	1964(昭和39)
－	日本三代実録	新訂増補国史大系	吉川弘文館	1964(昭和39)
－	－	古今讃岐名勝図会	歴史図書社	1976(昭和51)
福井保	内閣文庫書誌の研究	日本書誌学大系12	青裳書店	1980(昭和55)
松原秀明	讃岐国名勝図会	日本名所風俗図会14 四国の巻	角川書店	1981(昭和56)
松原秀明	－	日本名所風俗図会14 四国の巻	角川書店	1981(昭和56)
－	勘仲記	増補史料大成	臨川書店	1981(昭和56)
－	－	讃岐人物風景〈7〉花開く東讃文化	大和学芸図書株式会社	1982(昭和57)
－	－	讃岐人物風景〈8〉百花繚乱の西讃	大和学芸図書株式会社	1982(昭和57)
－	－	讃岐人物風景〈9〉幕末から維新へ	大和学芸図書株式会社	1982(昭和57)
－	－	讃岐人物風景〈13〉明治から大正へ	丸山学芸図書	1985(昭和60)
川村博忠	第二編 江戸幕府撰国絵図の系統的研究 第三章 正保国絵図	江戸幕府撰国絵図の研究	古今書院	1984(昭和59)
－	－	続讃岐人名辞書	藤田書店	1985(昭和60)
金田章裕	－	条里と村落の歴史地理学的研究	大明堂	1985
長谷川修一・ 斉藤実	讃岐平野の生いたち ―第一瀬戸内類層群以降を中心に―	アーバンクボタNo.28	－	1989
－	陣内池	日本歴史地名大系 第38巻 香川県の地名	平凡社	1989(平成元)
		増補松葉名所和歌集本文編	笠間書院	1993
－	バーデンヴュルデンベルク州環境省編(リバーフロント整備センター監訳)	河川工事ハンドブック「自然に適合した工法」	集文社	1997

編・著者	論考名	書名	発行・所蔵	初出
近世絵図地図資料研究会	－	近世絵図地図資料集成・第Ⅰ期 第16巻 正保国絵図集成・西日本篇	科学書院	2012(平成24)
藤田勝重	－	西嶋八兵衛と栗林公園	美巧社	1962(昭和37)
－	－	香川歴史紀行	美巧社	2013
田中健二	生駒時代の讃岐国絵図	近世初期讃岐国における城下町建設と開発・治水に関する研究	美巧社	2017(平成29)
－	－	毎日新聞 昭和45年6月21日	毎日新聞社	1970
－	－	山陽新聞 昭和60年11月9日	山陽新聞社	1985
－	－	山陽新聞 平成9年5月2日	山陽新聞社	1997
－	－	四国新聞 昭和60年2月7日	四国新聞社	1985
－	－	四国新聞 平成6年10月3日	四国新聞社	1994
－	－	四国新聞 平成14年4月20日	四国新聞社	2002
－	－	香川県人物・人名事典	四国新聞社	1985(昭和60)
－	－	新讃岐の文学散歩	四国新聞社	1998
－	－	満濃池営築図 写図	鎌田共済会郷土博物館	－
－	－	満濃池水懸申候村高之覚	鎌田共済会郷土博物館	－
－	－	農林業の石碑	香川県農業改良普及会	1981(昭和56)
－	－	金毘羅庶民信仰資料集年表編	金刀比羅宮社務所	1988(昭和63)
－	－	昭和59年度満濃地区動植物現況基礎調査	香川動植物の会	1985(昭和60)
末広喜代一ほか	丘陵公園予定地とその周辺部の植生	昭和59年度満濃池動植物現況基礎調査	香川動植物の会	1985(昭和60)
－	－	国営讃岐丘陵公園(仮称)地域の動植物現況調査報告書	香川動植物の会	1985(昭和60)
末広喜代一ほか	讃岐丘陵公園予定地の植物相と植生	国営讃岐丘陵公園(仮称)地域の動植物現況調査報告書	香川動植物の会	1985(昭和60)
－	－	口訳全讃史付三教一帰論訓釈	城山会	1991(平成3)
－	－	赤松景福の「讃岐慕情」	讃岐先賢顕彰会	2005(平成17)
－	－	香川を詠んだ歌人たち	香川明星倶楽部	2010
鬼頭尚義	寺社参詣の意識−酒井家文書から考える	京都精華大学紀要 第44号	京都精華大学	－

編・著者	論考名	書名	発行・所蔵	初出
Akira Sangawa	Geomorphic Development of the Izumi and Sanuki Ranges and relating Crustal Movement	Science Reports of the Tohoku University , Seventh Series (Geography)	Tohoku University , Faculty of Science	1978
長谷川修一・鶴田聖子	讃岐ジオサイト(26)満濃池と江畑断層	讃岐ジオサイト探訪	香川大学	2013
田中健二	『正保国絵図』に見る近世初期の引田・高松・丸亀	香川大学教育学部研究報告 第Ⅰ部 第146号	香川大学 教育学部	2016(平成28)
長谷川隆	志度寺の「当願暮当之縁起」について	独立行政法人国立高等専門学校機構香川高等専門学校研究紀要7	独立行政法人国立高等専門学校機構香川高等専門学校	2016
－	－	さぬき市の文化財	さぬき市文化財保護協会	2012
－	－	満濃町史	満濃町	1975
－	－	新修満濃町史	満濃町	2005
－	－	まんのう町土砂災害ハザードマップ	まんのう町	2017(平成29)
－	－	満濃池総合調査報告書	まんのう町教育委員会	2008
－	第2章 満濃池内調査の概要	満濃池総合調査報告書	まんのう町教育委員会	2008
－	－	町史ことひら5 絵図・写真編	琴平町	1995(平成7)
－	－	新編 志度町史 下巻	志度町	1986(昭和61)
－	－	満濃池史要	満濃池普通水利組合	1929(昭和4)
－	－	満濃池史	満濃池土地改良区	2001(平成13)
－	香川県森林公園条例	－	香川県	－
－	香川県森林公園規則	－	香川県	－
－	志度寺縁起	香川叢書 第一	香川県	1939(昭和14)
－	讃岐国郡村幷惣高覚帳	香川叢書 第二	香川県	1941(昭和16)
－	金毘羅山名所図会	香川叢書 第三	香川県	1943(昭和18)
－	－	香川叢書 第三	香川県	1943(昭和18)
－	－	土地分類基本調査 池田	香川県・徳島県	1972
金田章裕	第六章 条里と村落生活	香川県史1 原始・古代	香川県	1988(昭和63)
－	第2章第3節 公領の変質	香川県史2 中世	香川県	1989(平成元)
－	－	香川県史3 通史編 近世Ⅰ	香川県	1989(平成元)
－	－	香川県史3 通史編 近世Ⅱ	香川県	1989(平成元)
－	－	香川県史8 資料編 古代・中世史料	香川県	1986(昭和61)

編・著者	論考名	書名	発行・所蔵	初出
－	昭慶門院御領目録案(竹内文平旧蔵文書)	香川県史8 資料編 古代・中世史料	香川県	1986(昭和61)
－	寛永10年(1633) 金刀比羅宮所蔵「讃岐国絵図」	香川県史9 資料編 近世史料Ⅰ	香川県	1987(昭和62)
－	－	香川県史10 近世史料Ⅱ	香川県	1987(昭和62)
－	香川県指定満濃池鳥獣保護区更新計画書	－	香川県	2010(平成22)
－	－	香川県満濃池森林公園パンフレット	満濃池森林公園管理事務所	－
－	－	新編 香川叢書 文芸編	新編香川叢書観光企画委員会	1981(昭和56)
－	－	新編 香川叢書 史料篇二	香川県教育委員会	1981(昭和56)
－	矢原家文書	新編 香川叢書 史料篇二	香川県教育委員会	1981(昭和56)
大久保徹也	第5章第10節 基幹的灌漑水路と灌漑単位	高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊 上天神遺跡	香川県教育委員会	1995
－	－	香川の文化財	香川県教育委員会	1996(平成8)
－	－	四国横断自動車道建設に伴う発掘調査報告第33冊 川津一ノ又遺跡Ⅱ	香川県県教育委員会ほか	1998
－	－	歴史博物館整備に伴う収蔵資料目録 平成9年度	香川県教育委員会	1999(平成11)
－	－	一般国道32号満濃バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査買田岡下遺跡	香川県教育委員会ほか	2004
古市光信	香川県西部満濃町・琴南町の三豊層 ―四国北部新生代層の研究(その4)―	香川県自然科学館研究報告 第6巻	香川県自然科学館	1984(昭和59)
高橋芳樹	香川県満濃池付近における三豊層群産昆虫化石について	香川県自然科学館研究報告 第18巻	香川県自然科学館	1996(平成8)
藤田正芳・吉川武憲	香川県における洞窟棲コウモリの活動期と冬眠期の個体数の変動	香川県自然科学館研究報告 第19巻	香川県自然科学館	1997(平成9)
藤田正芳・吉川武憲	香川県で確認されたコウモリの新しい生息地	香川県自然科学館研究報告 第20巻	香川県自然科学館	1998(平成10)
大北徹	讃岐国名勝図会についての一考	香川県自然科学館長期研修生研究報告 第1巻	香川県自然科学館	1999(平成11)
森下英治	丸亀平野条里型地割の考古学的検討	研究紀要Ⅴ 特集 7世紀の讃岐	財団法人香川県埋蔵文化財調査センター	1997
信里芳紀	大溝の検討―弥生時代の灌漑水路の位置付け―	香川県埋蔵文化財センター研究紀要Ⅳ	香川県埋蔵文化財センター	2008

編・著者	論考名	書名	発行・所蔵	初出
木下晴一	坂出市川津町の古代のため池跡	香川県埋蔵文化財センター研究紀要Ⅴ	香川県埋蔵文化財センター	2009
松本敏三・岩橋孝	香川県古代窯業遺跡分布調査報告Ⅱ	瀬戸内海歴史民俗資料館紀要　第2号	瀬戸内海歴史民俗資料館	1983
－	－	部門展示解説シート 満濃池1	香川県歴史博物館	1999(平成11)
－	－	部門展示解説シート 金毘羅絵図展	香川県歴史博物館	2000(平成12)
－	－	部門展示解説シート 空から見た香川2	香川県歴史博物館	2002(平成14)
－	－	香川の名宝展	香川県歴史博物館	2001(平成13)
－	－	金刀比羅宮と桜 特別公開桜樹木地蒔絵	香川県歴史博物館	2004(平成16)
－	－	昭和大鉄道展	香川県立ミュージアム	2011(平成23)
－	－	香川県立ミュージアム所蔵美術作品目録	香川県立ミュージアム	2015
－	－	高松松平家歴史資料	公益財団法人松平公益会資料、香川県立ミュージアム保管	－
－	－	政要録 五之内巻三	香川県立図書館	1867(慶応3)
芳澤直起	嘉永七年七月満濃池決壊	香川県立文書館紀要 第19号	香川県立文書館	2015(平成27)
横川浩治	香川県の湖沼におけるブルーギルの生態	香川県水産試験場研究報告2号	香川県水産試験場	1986
－	－	讃岐のため池誌	香川県農林水産部土地改良課	2000(平成12)
－	都市公園法	－	－	－
梶原猪之松	－	古今讃岐名勝図会	国立国会図書館デジタルコレクション	1930(昭和5)
福井保	内閣文庫所蔵の国絵図について(続)	国立公文書館報10号	国立公文書館	1948(昭和23)
－	－	第2回自然環境保全基礎調査(植生調査)	環境庁	1982
－	残したい“日本の音風景100選”	－	環境省	1996(平成8)
－	近代化産業遺産群続33 平成20年度	－	経済産業省	－
－	ため池百選	－	農林水産省	2010(平成22)
－	－	保安林のしおり 平成30年度版	全国林業改良普及協会	－
－	－	満濃池資料集	建設省 四国地方建設局	1989(平成元)
－	国営讃岐まんのう公園事業再評価	－	国土交通省 四国地方整備局	2011(平成23)
－	－	湖畔の森散策ガイド	国営讃岐まんのう公園	－
－	－	国営讃岐まんのう公園ご利用あんない	国営讃岐まんのう公園	－
－	ダム湖百選MAP ダム水源地ネット5月号	－	財団法人ダム水源地環境整備センター	2005(平成17)

西暦	和暦	概要
-	-	大宝年間(701-704)、讃岐国守道守朝臣、万農池を築く。(萬濃池後碑文)
818	弘仁9	万農池が決壊、官使を派遣し、修築させる。(萬濃池後碑文)
820	弘仁11	讃岐国守清原夏野、朝廷に万農池復旧を伺い、築池使路真人浜継が派遣され復旧に着手。
821	弘仁12	5月27日、万農池復旧工事が難航していることから、築池使路真人浜継らの申請により、改めて築池別当として空海の派遣を要請。ついで、7月22日、費用銭2万を与える。(弘法大師行化記・日本紀略) その後、7月からわずか2か月余りで再築されたと伝わる。
851	仁寿1	秋、大水により万農池を始め讃岐国内の池がすべて決壊する。(萬濃池後碑文)
852	仁寿2	讃岐国守弘宗王が仁寿2年閏8月より万農池の復旧を開始し、翌年3月竣工。人夫19,800人、稲束12万束、俵菰6万8千枚を使用した。(萬濃池後碑文)
881	元慶5	萬農池神に従五位を授けられる。(三代実録)
927	延長5	神野神社が式内社となる。
947	天暦1	讃岐国守源正明、多度郡道隆寺の興憲僧都に命じ、満濃池の地鎮祈祷を行わせる。これ以前に決壊があったと推測される。
-	-	平安時代成立の「日本紀略」に空海の満濃池修築が記される。(資料2)
1020	寛仁4	萬濃池後碑が建立される。(萬濃池後碑文)

西暦	和暦	概要
1021	治安1	「三代物語」・「讃岐国大日記」に「讃岐那珂郡真野池始めて之を築く」とある。これ以前に廃池となり、この時に、復旧を始めたと推測される。
1022	治安2	再築。(三代物語・讃岐国大日記)
-	-	平安時代後期成立の「今昔物語集」に満濃池が登場する。(資料4)
1184	元暦1	5月1日、満濃池、堤防決壊。この後、約450年間、池は復旧されず放置され荒廃。池の内に集落が発生し、「池内村」と呼ばれる。
1201	建仁1	「萬濃池後碑文」成立。(資料3)
1306	嘉元4	昭慶門院の荘園万之池を秦久勝が知行する。(竹内文平旧蔵文書) その後、賀茂別雷神社に寄進される。(賀茂別雷神社文書、資料44)
-	-	鎌倉時代末期～南北朝時代成立の「志度寺縁起」に満濃池が登場する。(資料5・6)
1470	文明2	神野神社に石造鳥居が奉献される。
-	-	慶長年間(1596-1615)末、「讃岐国絵図」が作成される。(資料45)
1626	寛永3	8月、矢原正直、西嶋八兵衛より多度郡の毎年の旱損の相談を受け、旧満濃池内に所持の田地を差し出す。(満濃池営築図)
1628	寛永5	満濃池築造にあたり、樋外村に水利特権が生まれる。藩主生駒高俊の命により、西嶋八兵衛が満濃池再築に着手する。(満濃池営築図)
1631	寛永8	満濃池の再築なる。(那珂郡満濃池諸色御普請覚帳)

西暦	和暦	概要
1633	寛永10	「讃岐国絵図」が作成される。(資料46・49)
-	-	寛永年間(1624-1645)、「満濃池営築図」が作成される。(資料7・47)
1635	寛永12	矢原家、生駒家より50石を与えられ満濃池の池守となる。(矢原家文書、資料48)
1640	寛永17	東西分治に際し那珂郡池御料は幕府の直轄地となる。
1641	寛永18	満濃池配水に関する特別慣行を幕府の執政官に提出、証文揺。幕府が池御料を吟味して水掛石高を定める。
1642	寛永19	池御料の治所を苗田村に置き、守屋与三兵衛が初代代官となる。
1643	寛永20	満濃池の底樋前半部と竪樋の伏替を行う。(政要録)
1646	正保3	満濃池の底樋後半部の伏替を行う。(政要録)
1654	承応3	満濃池の竪樋の伏替を行う。(政要録)
1658	万治1	満濃池の底樋前半部の伏替を行う。(讃州那珂郡満濃池底樋・竪樋・矢倉御普請目論見帳)
-	-	狩野常眞の「象頭山十二景圖 二巻 十二 萬農曲流」が万治年間(1658-1660)に成立。(資料14)
1659	万治2	満濃池の本樋後半部の伏替を行う。(那珂郡満濃池諸色御普請覚帳)
1667	寛文7	満濃池の竪樋の伏替を行う。(政要録) 狩野時信の「象頭山十二景圖 十二幅 十二 萬農曲流」が延宝元年(1673)以降に成立。(資料15)

西暦	和暦	概要
1675	延宝3	満濃池の竪樋と樽の伏替を行う。(讃州那珂郡満濃池底樋・竪樋・矢倉御普請目論見帳)
1677	延宝5	「玉藻集」が成立。(資料11)
1679	延宝7	満濃池の竪樋後半部の伏替を行う。(政要録)
1690	元禄3	池御料、川之江代官所支配に移る。(金刀比羅宮文書「神事頭人名簿」)
1706	宝永3	幕府の直轄地を高松藩治下に委任する。 満濃池の底樋前半部の伏替を行う。(讃州那珂郡満濃池底樋・竪樋・矢倉御普請目論見帳)
1710	宝永7	10月、高松藩、小豆島・塩飽・直島・池御料の庄屋・年寄を惣会所に呼び出し、小豆島で徒党を組んで騒いだ百姓の追放を申し渡す。(近世史料Ⅰ「小豆島農民訴訟一件」)
1714	正徳4	9月25日、金毘羅社領と池御料の境界絵図を作成する。(金刀比羅宮文書 宝永5年～明和8年「日帳書抜」)
1720	享保5	12月3日、代官間宮三郎右衛門、幕領の女木・男木・直島・塩飽・池御料の庄屋・年寄に対し、家屋敷・田畑の譲渡についてはすぐに届けるように命じる。(塩飽勤番所文書「享保年中并元文年御触書之写」)
1721	享保6	閏7月23日、幕府、高松藩に小豆島・直島・池御料を預ける。当年から口米を徴収する。(恵公外記)

西暦	和暦	概要
1722	享保7	5月2日、金毘羅社領と池御料の境界絵図を書き直し、庄屋らが裏判を押す。(金刀比羅宮文書「金光院日帳」) 満濃池の底樋後半部の伏替を行う。(讃州那珂郡満濃池底樋・竪樋・矢倉御普請目論見帳)
1735	享保20	満濃池の竪樋と樽の伏替を行う。(政要録)
1739	元文4	10月15日、幕府、小豆島・直島・池御料の高松藩預かりを廃止し、代官千種清右衛門の管轄とする。(増補高松藩記)
1754	宝暦4	満濃池の前樋と竪樋の伏替を行う。(政要録)
1763	宝暦13	満濃池の底樋前半部と竪樋樽の伏替を行う。(讃州那珂郡満濃池底樋・竪樋・矢倉御普請目論見帳)
1779	安永8	満濃池の底樋後半部の伏替を行う。(政要録)
1799	寛政11	満濃池の竪樋の伏替を行う。(政要録)讃岐廻遊記が出版される。(資料13)
1804	文化1	満濃池の竪樋の伏替を行う。(政要録)
-	-	「金毘羅山名勝図会」が文化年間(1804-1818)に出版される。(資料12・16)
1820	文政3	満濃池の底樋前半部の伏替を行う。(政要録)
1821	文政4	満濃揺盗抜等の用水争議が相次いで起こる。
1825	文政8	岸上村政所の奈良亮助が満濃普請絵図引附を仰せ付けられる。
1827	文政10	満濃池の底樋後半部の伏替を行う。所要人員248,486人。(政要録)
1828	文政11	満濃池の底樋と竪樋の伏替を行う。

西暦	和暦	概要
1830	天保1	閏3月21日、池御料、松山藩預け地となり、受取役人が金毘羅に参詣する。(金刀比羅宮文書)
1834	天保5	2月15～20日、朱印地の那珂郡金毘羅・幕領の同郡榎井村・五条村などの窮民、金毘羅の米屋・酒屋・質屋に打ちこわしをかける。金光院、高松、丸亀藩に加勢を願い出る。(金毘羅打ちこわし一件・金刀比羅宮文書)
-	-	江戸時代中期、「讃州那珂郡分間画図」が作成される。(資料10)
1837	天保8	「満濃池絵図 天保八丁酉年」が作成される。(資料9)
1838	天保9	「天保国絵図 讃岐国図」が作成される。(資料50)
1840	天保11	満濃池の竪樋と樽の伏替を行う。(政要録)
1845	弘化2	「象頭山八景 満濃池遊鶴」が成立。(資料17)
1847	弘化4	満濃池の宮を始め近隣各宮で念仏踊を行う。 「金毘羅参詣名所図会」が出版される。(資料18)
1848	嘉永1	榎井村庄屋長谷川喜平次、三原谷蔵らが満濃池石製底樋改修に尽力する。
1849	嘉永2	長谷川喜平次が満濃池の木製底樋前半部を石製底樋に改修。(政要録)嘉永6年に工事完了。所要人員249,890人。
-	-	「満濃池御普請所絵図」が嘉永年間(1848-1854)に成立。(資料8)
1853	嘉永6	満濃池の木製底樋後半部を石製底樋に改修。所要人員376,489人。(政要録)

西暦	和暦	概要
1854	嘉永7	6月の伊賀上野地震の影響で、7月5～9日、満濃池の樋外の石垣から漏水。8日には矢倉竪樋が崩れ、9日の九つ時に決壊。(金関家文書)那珂郡は大水により田畑に被害、金毘羅は2尺ほど冠水する。(靖公実録)満濃池は以降16年間廃池。「讃岐国名勝図会」が出版される。(資料19・43)
1855	安政2	長谷川喜平次、満濃池復興のために奔走。
1859	安政6	満濃池の宮を始め近隣各宮で念仏踊を行う。
1860	安政7	倉敷代官大竹佐馬太郎が長雨洪水による被害状況を巡察する。
-	-	嘉永7年(1854)以降、明治2年(1869)以前、「讃岐国那珂郡満濃池近郷御料私領絵図」が作成される。(資料25)
1862	文久2	11月、長谷川喜平次、満濃池復興、意志半ばで病没、67歳。
1863	文久3	12月29日、高松藩、幕領満濃池付属地及び五條・榎井・苗田と金毘羅社領を、治安上高松藩の管轄にすることを請い、許可される。(歴世年譜)
1864	文久4	7月1日、高松藩那珂郡西高篠村の百姓、連年の水不足解消策として満濃池の修復を嘆願する。(森家文書) 11月3日、幕府、池御料2千石余を以後5年間高松藩に預ける。(増補高松藩記)
-	-	江戸時代末期、「象頭山參詣道紀州加田ヨリ讃岐廻并播磨名勝附」が発行される。(資料20)
1865	元治2 慶応1	金蔵寺村の豪商和泉虎太郎、朝廷に満濃池再築の嘆願書提出。
1866	慶応2	洪水のため満濃池の堤防が決壊して金倉川沿岸の家屋が多く流失し青田赤土となる。長谷川佐太郎、和泉虎太郎らが満濃池復旧に奔走する。
1868	慶応4 明治1	1月、和泉虎太郎のもとに朝廷より池御料の関係者と共に書類と図面を持参するようにとの内命書届く。3月5日、池御料、一時土佐藩預かり地となる。 3月、榎井村戸長長谷川佐太郎、新政府の弁事伝達所へ満濃池再築の嘆願書提出。(丸亀県史)7月、和泉虎太郎、朝廷の命に従い上京。再度、満濃池再築を嘆願。9月16日、長谷川佐太郎のもとへ満濃池再築聞届けの返書が届く。9月、池御料倉敷県となる。倉敷県に満濃池再築の命が下る。
1869	明治2	高松藩執政松崎渋右衛門、長谷川佐太郎と満濃池視察。底樋を石穴穿鑿に決定。8月、満濃池、石穴穿鑿工事に寒川郡富田村庄屋軒原庄蔵を起用。 8月9日、満濃池の復旧工事に着手。9月16日、底樋となる石穴穿鑿工事に着手。(丸亀県史)

西暦	和暦	概要
1870	明治3	1月、満濃池、丸亀藩の一部に石穴穿鑿を危惧する声があり、築堤工事に着手できず。 1月、榎井村の長谷川佐太郎が満濃池修築の促進を高松・丸亀両班に掛け合ってほしい旨、倉敷県庁に嘆願(丸亀県史)1月、満濃池の堤防工事着手。(満濃池通史) 2月、倉敷県、長谷川佐太郎の嘆願書を民部・大蔵省に上申。倉敷県参事島田泰雄、池御料来訪。丸亀藩を説得。 「満濃池之図」(資料23)、「満濃池水掛村々之図」(資料24)が作成される。 3月15日、満濃池、石穴底樋貫通。6月3日、満濃池堤防復旧。堤長45間半、高13間、天幅8間、敷幅65間、貯水容量584万6,000m^3。 6月、榎井村の長谷川佐太郎が満濃池修築の功により餅米10俵を賜る。(高松県史) 7月3日、満濃池修築完工。(丸亀県史) 鵜足郡八か村3,160石、多度津藩領12か村8,075石2斗の水掛かりが満濃池水掛かりから離脱。以後、満濃池水掛かりは24,579石となる。 大阪土木司が満濃池井手筋を検分する。
-	-	明治3年以降、石碑「真野池記」が建立される。(資料21)
1871	明治4	9月、倉敷県管轄の榎井・苗田・五条・七箇が丸亀県に編入。(丸亀県史)
1872	明治5	8月24日、高松藩執政松崎渋右衛門を祀る満濃池小祠創建を県から教部省に伺い出る。(香川県史)

西暦	和暦	概要
1873	明治6	「名東県庁蔵西讃府志外一部士族梶原泉太郎蔵讃岐志外一部献納申立並賞金達」が記される。(資料45)
-	-	明治4～7年(1871～1874)、「梶原泉太郎讃岐志幷同国名勝図絵献納ヲ賞シ金円下賜」が記される。(資料44)
1879	明治12	満濃池水利土工会が組織される。
1881	明治14	満濃池の管理を仲多度郡長に委任する。
1890	明治23	五條・真野・岸上・東七箇の4か村が合併して神野村となる。
1893	明治26	5月23日、満濃池普通水利組合設立。(公文月報)
1897	明治30	旱魃のため満濃池の証文揺(底揺)を抜く。(香川新報)
1898	明治31	満濃池の堅樋と樽を改造。
1905	明治38	2月、満濃池第一次嵩上げ事業着手。堤高0.86m増、及び余水吐改造工事着工。(満濃池史要)
1906	明治39	10月、満濃池第一次嵩上げ事業完了。満水面積5.94ha、貯水容量83万2,000m^{3}増。(丸亀市史)
1907	明治40	「讃岐名勝栞」が出版される。(資料26)
1913	大正2	8月17日、旱魃のため満濃池の証文揺(底揺)を抜く。明治30年以来。(香川新報)
1914	大正3	9月、満濃池の赤レンガ取水塔が完成。円筒形煉瓦積、高65尺、内径7尺。(香川新報)

西暦	和暦	概要
1916	大正5	「讃岐写真帖」が作成される。(資料29)
1922	大正11	3月、官有地満濃池が普通水利組合に無償譲与となる。
1923	大正12	10月、神野村で小作争議が起こる。
1925	大正14	満濃池第二次嵩上げ事業計画、調査に着手。
1926	大正15 昭和1	11月、満濃池第二次嵩上げ事業着手。工事費総額47万円、半額国庫補助。(香川新報)「柿村書屋詩集」が出版される。(資料27)
1927	昭和2	満濃池堤高1.5m増、余水吐改造、及び用水幹線1,220m延長の改修を行い、財田川からの承水隧道400m延長の新設工事着工、県営事業。「香川県営満濃池竣工記念絵葉書」が作成される。(資料30)「金刀比羅宮御境内及讃岐名所圖繪」が作成される。(資料34)
1930	昭和5	満濃池第二次嵩上げ事業完了、満水面積7.67ha、貯水容量14万7,000m^{3}増。
-	-	昭和5年以降、「琴平急行沿線名勝鳥瞰図」作成される。(資料35)
1931	昭和6	石碑「松坡長谷川翁功徳之碑」が建立される。(資料22)
1933	昭和8	満濃池畔に空海の銅像が建立される。「満濃池弘法大師銅像除幕記念絵葉書」が作成される。(資料31)
-	-	昭和初期、「讃岐琴平名所絵葉書」が作成される。(資料32)
-	-	昭和初期頃、「讃岐二百景」が作成される。(資料33)
1936	昭和11	吉井勇が満濃池を訪れる。(資料28)
1940	昭和15	満濃池第三次嵩上げ工事及び天川導水路工事を県営事業として開始。
1941	昭和16	11月18日、県が農業水利改良事業補助規程を定める。(香川県報)
1942	昭和17	満濃池堤高6m嵩上げに着手、県営事業。
1950	昭和25	3月、天皇陛下が四国地方を巡幸し、満濃池を視察される。
1951	昭和26	3月、満濃池が観光百選に選ばれる。土地改良法施行に伴い、満濃池普通水利組合を満濃池土地改良区に組織変更。
1953	昭和28	県営金倉川沿岸用水改良事業により、幹線水路の整備実施、完了は昭和44年。
1955	昭和30	4月1日、四条村・吉野村・神野村を合併して満濃町を置く。仲多度郡七箇村・十郷村を合併して仲南村を置く。(香川県報)
1956	昭和31	3月、境界変更によって満濃町大字五條西地区を琴平町に編入する。 8月14日、新農山漁村建設総合対策の31年度認定地域を告示。満濃町他11市町村。(香川県報)
1957	昭和32	10月、境界変更によって満濃町大字五條東地区を琴平町に編入する。
1958	昭和33	満濃池土地改良区と土器川右岸土地改良区連合間で「天川頭首工」「大川頭首工」に関する協定成立。満濃池第三次嵩上げ工事完了、貯水容量1,540万m^{3}となる。
1959	昭和34	8月、境界変更によって琴平町榎井の一部を満濃町に編入する。
1968	昭和43	四国新聞社により「新さぬき百景」に選定。(資料36)
1969	昭和44	県営満濃池幹線用水路工事が完了する。
1973	昭和48	「高松砂漠」といわれる異常渇水、満濃池から高松市に緊急送水。
1979	昭和54	四国新聞社により「ため池100選」に選ばれる。

西暦	和暦	概要
1988	昭和63	5月、第39回全国植樹祭が満濃池森林公園で開催される。6月、満濃池森林公園が開園する。
1991	平成3	5月、金倉川水と緑の砂防事業(螢見橋周辺、ほたる見公園)が落成する。
1995	平成7	3月、国土庁から満濃池が「水の郷百選」に選ばれる。
1996	平成8	7月、環境庁の「日本の音風景百選」に「満濃池のゆるぬきとせせらぎ」が選ばれる。(資料37)水産庁社会法人日本水産会によって「日本の渚・百選」に満濃池が選ばれる。
1997	平成9	10月、第12回国民文化祭、満濃町で「水と文化」シンポジウムを行う。
1998	平成10	4月、国営讃岐まんのう公園が開園する。
1999	平成11	5月、第53回愛鳥週間「全国野鳥保護のつどい」が満濃池森林公園で開催される。
2000	平成12	2月15日、満濃池樋門が国の登録有形文化財となる。4月、「みどりの愛護のつどい」が国営讃岐まんのう公園で開催される。12月、「残したい香川の水環境五十選」に満濃池が香川県から認定される。
2001	平成13	満濃池土地改良区設立50周年。4月、満濃池築堤1300年祭記念式典が満濃池堤で行われる。11月、満濃池築堤1300年祭記念シンポジウム開催、基調講演に五木寛之氏。
2002	平成14	小西嘉純が油彩画「満濃池」を制作する。(資料52)11月、満濃池築堤1300年祭記念シンポジウム開催、基調講演に立松和平氏。
2003	平成15	11月、満濃池築堤1300年祭記念シンポジウム開催、基調講演に富山和子氏。
2004	平成16	満濃池、県より「香川のみどり百選」に選定される。
2005	平成17	満濃池が財団法人ダム水源地環境整備センターにより、「ダム湖百選」に選定される。(資料38)
2006	平成18	3月20日、満濃町、琴南町、仲南町が合併し、まんのう町となる。
2008	平成20	「国営農業用水再編対策事業　香川用水土器川沿岸地区」開始、平成28年度完了。
2009	平成21	満濃池が経済産業省選定の「地域活性化に役立つ近代化産業遺産」に選定される。(資料39)満濃池が環境庁選定の「ため池百選」に選定される。
2016	平成28	11月8日、満濃池が国際かんがい排水委員会登録の「かんがい施設遺産」に登録される。(資料40)
2017	平成29	「県営期間水利施設ストックマネジメント事業　満濃池幹線地区」開始。11月25日、満濃池土地改良区新事務所竣工。
2018	平成30	NPO法人まんのう池コイネットが「満濃池ガイドマップ」を作成する。(資料51)

引用・参考文献
満濃池史(満濃池土地改良区 平成13年)
讃岐のため池誌 資料編(香川県農林水産部土地改良課 平成12年)
香川県史 別編Ⅱ 年表(香川県 平成3年)
新修満濃町誌(満濃町 平成17年)